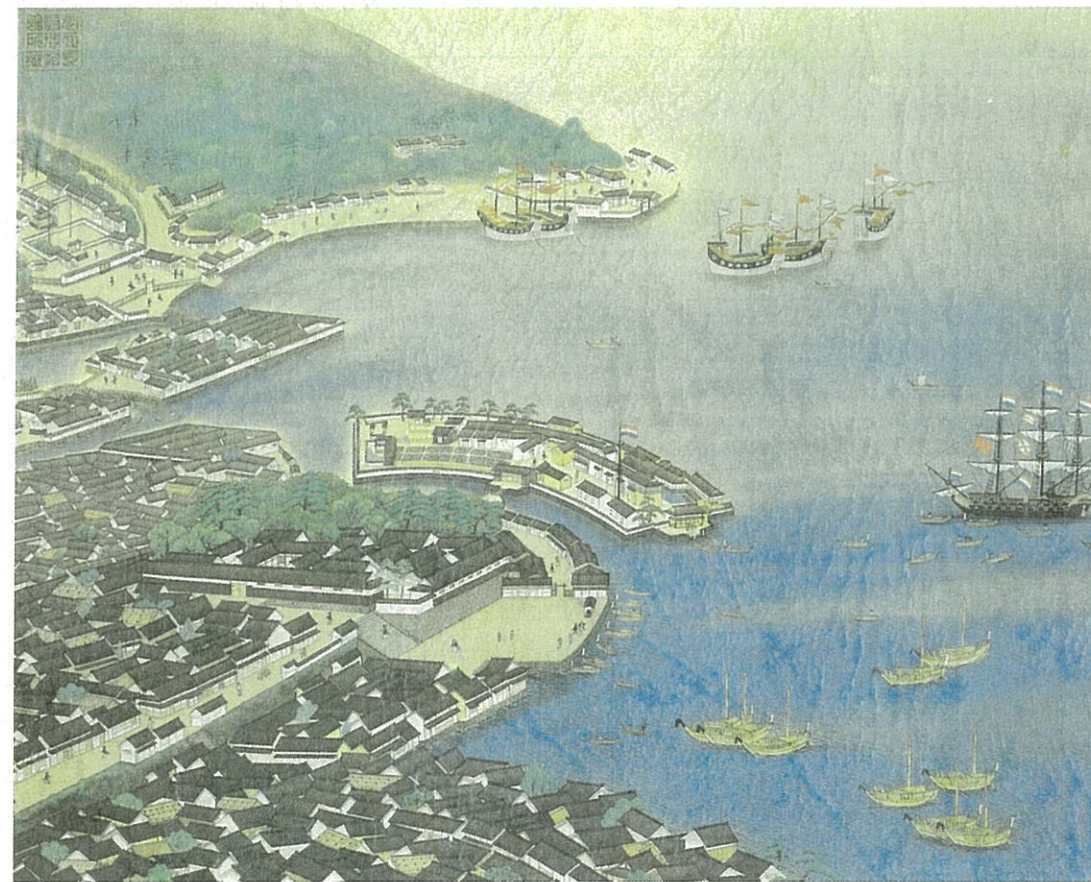


史跡「出島和蘭商館跡」  
復元整備計画書



平成 8 年 3 月

長 崎 市

## はじめに



出島は、江戸時代の鎖国期において日本と西欧を結ぶ唯一の窓口であり、経済、文化、学術の交流の拠点として我が国の近代化に多大な貢献を果たしてまいりました。

明治に入り、出島周辺の埋め立てが進み、築造当時の海に浮かぶ扇形の原形は失われ、市街地に接続することとなりましたが、その歴史的な重要性から大正11年10月12日「出島和蘭商館跡」として国の史跡に指定されています。

この出島の復元は、本市にとりましては大切な使命であることから、まちづくりの重要な拠点と位置づけ、19世紀初頭の出島の復元を目指してまいります。

市民はもとより長崎を訪れる人々、更には海外からも出島の早期復元が待ち望まれる中、この度「史跡『出島和蘭商館跡』復元整備計画書」として、策定いたしました。

本計画書は、長崎市出島史跡整備審議会が昭和57年の同審議会答申による「出島史跡についての長期的かつ総合的な復元整備構想」をもとに具体的な復元整備計画を策定したものであり、本書に詳述されているとおり、今後の遺跡の保存と公開計画、建物復元計画、展示活用計画、顕在化計画などの事業方針を示しております。

出島史跡復元整備事業の実施にあたっては、数多くの困難が予想されますが、本事業は長崎のシンボル再生であるばかりでなく、国際的にも極めて重要かつ久しく待望されている貴重な文化遺産の復元であり、国並びに長崎県、地元関係者を始め、全市民的な理解と協力を得ながら早期かつ着実に事業を実施していくこととしています。

特に、西暦2000年が日蘭修好400年にあたりますので、平成8年度から事業に着手するとともに、学術的研究が必要とされるものは、十分に考証を加えながら最大限の努力を傾注してその実現に努めてまいります。

本事業の推進にあたっては、文化庁、長崎県を始め関係各方面の、なお、一層のご理解とご協力を賜りますようお願いいたします。

平成8年3月

長崎市長 伊藤 一 長

# 目 次

## I. 出島和蘭商館跡復元整備の基本方針

- 1. 基本方針 ..... 1
- 2. 復元整備目標 ..... 1
- 3. 復元整備手順 ..... 1

## II. 短中期復元整備計画

- 1. 史跡の保存と公開計画
  - (1) 鎖国期の遺構 ..... 2
  - (2) 居留地時代の遺構 ..... 5
  - (3) 保存と公開計画 ..... 6
- 2. 建物の復元計画
  - (1) 建物復元の考え方 ..... 7
  - (2) 建物復元のプロセス ..... 7
- 3. 庭園の復元計画
  - (1) 復元の考え方 ..... 15
  - (2) 整備の方針 ..... 16
  - (3) 復元整備計画 ..... 17
- 4. 旧出島橋の復元計画
  - (1) 復元の考え方 ..... 18
  - (2) 旧出島橋の考察 ..... 18
  - (3) 復元の方針 ..... 19
- 5. 明治期建物等の保存計画
  - (1) 保存の考え方 ..... 21
  - (2) 現 状 ..... 21
  - (3) 保存計画 ..... 26

- 6. 展示活用計画
  - (1) 展示活用計画の方針 ..... 27
  - (2) 整備の手順 ..... 28
  - (3) 明治期等建物の展示活用計画 ..... 29
  - (4) 復元建物の展示活用計画 ..... 30
- 7. 出島の顕在化計画
  - (1) 顕在化の考え方 ..... 32
  - (2) 整備の方針 ..... 32

## III. 長期復元整備計画

- 1. 長期復元整備計画の考え方 ..... 38
- 2. 長期計画の整備プログラム ..... 38
- 3. 長期計画の整備内容と骨格構造図 ..... 39
- 4. 建物の復元計画 ..... 40
- 5. 庭園の復元計画 ..... 40
- 6. 旧出島橋の復元計画 ..... 40
- 7. 明治期建物等の取扱い ..... 40
- 8. 展示活用計画 ..... 40

## 資 料 編

- 1. 長崎市出島史跡整備審議会委員名簿 ..... 1
- 2. 出島の現況（航空写真） ..... 2
- 3. 復元建物の基本図 ..... 3
- 4. 復元建物との現況重ね図 ..... 11
- 5. 出島和蘭商館跡の発掘調査概要 ..... 12
- 6. 出島関連年表 ..... 14

# I. 出島和蘭商館跡復元整備基本方針

## 1. 基本方針

出島の復元整備については昭和26年度から公有化に取り組み、整備事業を実施してきたが、昭和57年長崎市出島史跡整備審議会より出島の長期的総合的な復元整備構想の答申がなされた。

この答申に基づき出島の範囲確認調査、出島境界標の設置を行い、出島関係史料の集大成とも言える「出島図ーその景観と変遷ー」を刊行し、出島表門が復元された。

その後、答申構想を具体化し事業の一層の進捗を図るため、平成4年度に長崎市出島史跡復元整備研究会を設置し、実務上の観点から復元の範囲や周辺環境整備、公有化の促進並びに実施を目指した計画づくりの必要性を骨子とした整備計画基本案が作成され、平成5年10月には、出島史跡を教育文化施設、中島川の対岸地区を都市公園として都市計画決定がなされ、公有化が促進されている。

本計画は、長崎市出島史跡整備審議会の復元整備構想（答申）を基に、具体的な復元整備計画を策定するもので、長期計画と短中期計画から構成され、基本的には19世紀初頭の出島和蘭商館跡の完全復元を目指すものとする。

そのためには史跡北面の復元に伴う中島川の振り替え、西面の水門部分の復元に伴う国道499号の線形変更など大規模な市街地改造が必要となる。その実現には事業手法、関係機関との調整、住民の合意形成、出島周辺の大型プロジェクトや計画との整合性などからして、かなり長期的な計画とならざるを得ない。

そこで、出島復元整備の手順としては、現在の史跡指定地を中心とした範囲を対象とし、15年程度を目標とした短中期の復元整備計画を設定することとした。

出島は鎖国時代、日本と西欧を結ぶ我が国唯一の窓口であり、経済、文化、学術等の交流拠点として日本の近代化に重要な役割を果たした世界的遺産であることから遠大な構想のもとに復元を図っていくものとする。

## 2. 復元整備目標

- (1) 貴重な歴史的文化的遺産である出島史跡の遺構や遺物の保存を図るとともに、往時の建造物等を史実に基づいて復元し、文化・学習施設としての機能を目指す。
- (2) 長崎市のシンボルとして機能させるとともに、周辺都市空間を含めて市民が親しむことのできるアメニティ空間を構築する。
- (3) 歴史的観光拠点として、出島史跡の活用を図るとともに、出島周辺の歴史的遺産とのネットワーク化に努めていく。
- (4) 国際交流や文化活動の場としても積極的な運営を図っていく。

## 3. 復元整備手順

復元整備目標を踏まえて、全体的には以下の方針で復元整備計画を策定する。

- (1) 出島史跡と出島対岸の公園整備を中心として、出島の顕在化、史跡内の復元整備および展示活用を段階的に進めていく短中期復元整備を行う。
- (2) 19世紀初頭の出島の原形を復元し、更に四面を水面による顕在化に努め、原風景の再現を目指していくとともに周辺の都市機能、まちづくりとの調和発展を図っていく長期復元整備を行う。
- (3) 史跡内では復元建物等のハード面の整備だけでなく、往時の出島の生活風俗と文化的交流を幅広く表現していくものとし、文化活動を展開していくものとする。

## II. 短中期復元整備計画

### 1. 史跡の保存と公開計画

出島和蘭商館は、鎖国期において日本と西欧の交流が唯一行われていた所であり、その歴史的価値は単に長崎の文化的遺産というよりも、世界的なものとしてとらえるべきである。この史跡はオランダをはじめとする西欧人が来日し、生活した場所であり、現在でも出島には、当時の人々が残した遺構や遺物が点在している。

出島の整備にあたっては、これらの遺構や遺物の保存を第一義とすると同時に、その価値を来訪者に広く公開し、理解させなければならない。それにはまず、公有化計画と合わせて発掘計画を作成し、それに基づく系統的な発掘調査を行い、史跡の範囲、遺構レベルを明確にして復元整備レベルを決定する。

現存する遺構については破損状況、仕様、年代等調査結果にもとづき、復元・修理を行う必要がある。

現在保存されている出島の遺構・遺物は、鎖国期のものと、居留地時代以後のものとは大別され以下のものがあり、この他にも地中に埋蔵されている遺構・遺物があると思われる。

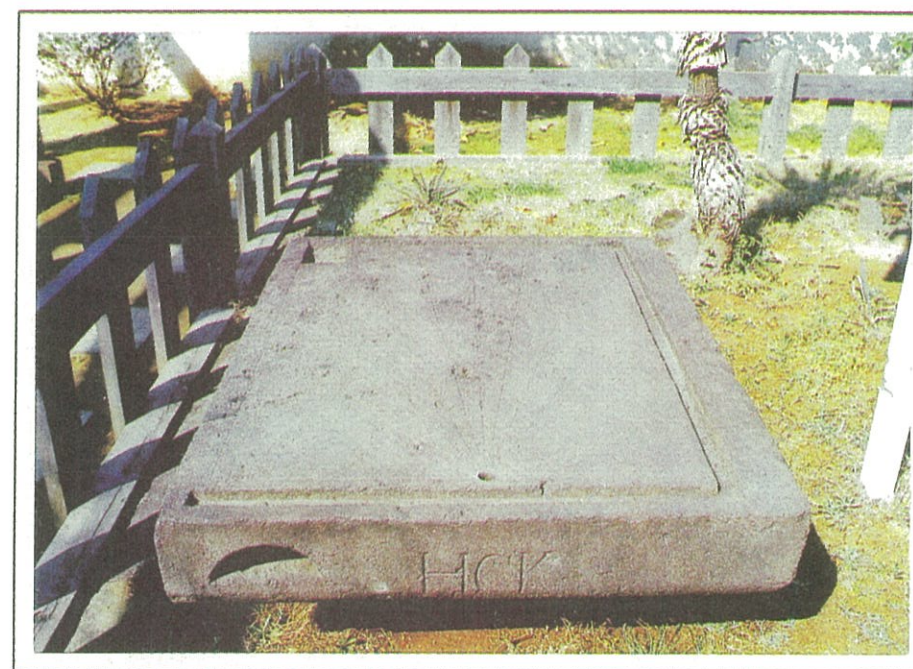
鎖 国 期	A. 石造日時計	居 留 地	J. 門柱
	B. ケンベル・ツェンベリー 記念碑		K. 三角溝
	C. 旗竿石		L. 居留地地番境石
	D. 大砲		M. 建物礎石
	E. 石垣		
	F. 土層		
	G. 建物礎石		
	H. 出島橋石柱		
	I. デジマノキ		

#### (1) 鎖国期の遺構

##### A. 石造日時計

出島の花園の中におかれていたもので、HCKという文字が刻まれている。この文字はおそらく明和3～4年(1766～1767)に出島商館長であったヘルマン・クリスティアン・カステンス (Herman Christiaan Kastens)の頭文字をとったものであろう。

出島図に描かれている日時計は、出島庭園の池に接した場所(1797年蛮館図・灌園愛花図)と、南東部(菜園中央)(1833年 出島図:プリンス・ヘンドリック海事博物館蔵)の2箇所違った位置に描かれているが、南東部のものは庭園から池が消滅する文政5～11年(1822～1828)の時期に移されたためと考えられている。



##### B. ケンベル・ツェンベリー記念碑

文政6年(1823)出島の医官として来日したシーボルト (Philipp Franz von Siebold 1796～1866)が二人の偉業を顕彰するために文政9年(1826)に建てた碑で、以下のような意味で刻んである。

E. ケンベル, C. P. ツェンベリー  
 みよ! ここに芽吹きし  
 汝らの植物が 年毎に花開き  
 植えし人びとを偲びつつ  
 感謝の花飾りを 供えることを  
 シーボルト

この碑は、建立以来シーボルト事件の発生により地下に埋められ、その後、一時諏訪の杜に移され現在に至っている。

ケンペル (Engelbert Kaempfer 1651~1716)

ドイツの医師で博物学者としても権威者であった。元禄3年(1690)商館医として来日した2年2ヶ月の間に、2度の江戸参府に随行し、動植物の他にも地理、歴史、宗教、政治、風俗に至る広範な研究をなし、帰国後1712年に「廻国奇観」を出版した。

ツェンペリー (Carl Peter Thunberg 1743~1828)

スウェーデンが生んだ世界的な博物学者であった。ツェンペリーはケンペルの研究に魅せられ、「廻国奇観」を携え、安永4年(1775)に商館医として来日した。1年4ヶ月の間に812種類の植物を集め研究をなし、また、江戸参府にも随行し、当時の日本における植物学の発展に多大な影響を与えた。

帰国後1784年に「日本植物誌」を出版した。



#### C. 旗竿石

旗竿石には『WVO 1696』の文字が刻まれており、バタビア総督であったウキレム・ファン・アウトホールン (Willem van Outhoorn 1691~1704在任) の頭文字を組み合わせたもので、脇荷蔵であったイ之蔵 (レリー) の改築時に基礎石に使用したといわれている。なお、この石をなぜ旗竿石と呼ぶに至ったかについてはわかっていない。



#### D. 大砲

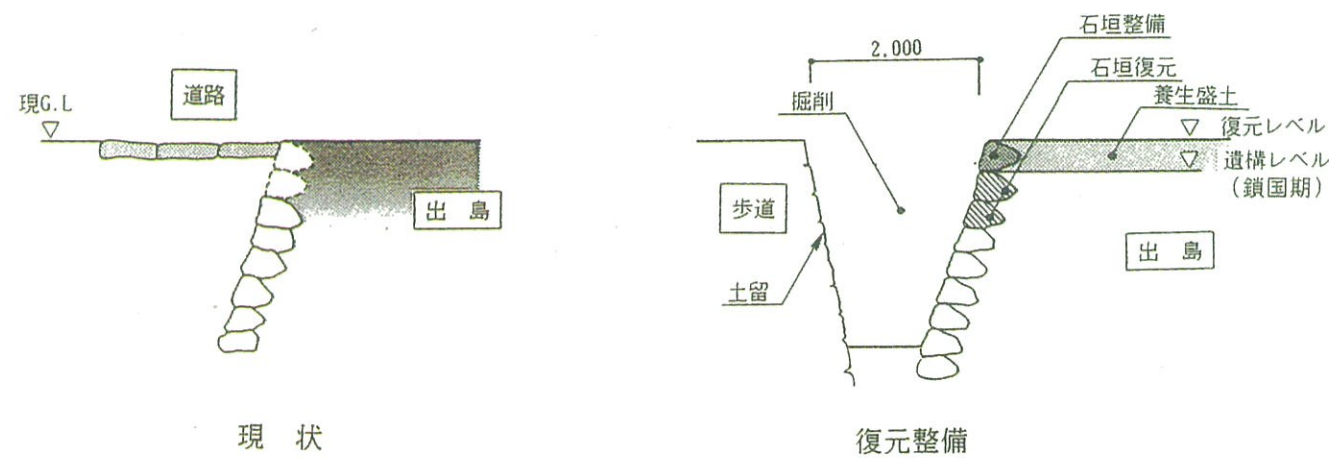
2門の青銅製と鉄製の大砲がある。青銅製のものは、表門の横に展示してある大砲で、オランダ船の姿絵と連合オランダ東インド会社の社章VOCおよびAMSTELDAM ANNO 1640の文字がある。昭和29年に浦上川河口付近で発見され、現在は昭和53年にオランダ海外史跡保存協会より寄贈された砲座に据えられている。

鉄製のものについては出所不明である。



### E. 石垣

出島の周囲の石垣は、地表近くでは埋立等の際に取除かれた部分もあるが、現在までの数箇所の発掘調査で一部確認されている。



### F. 土層

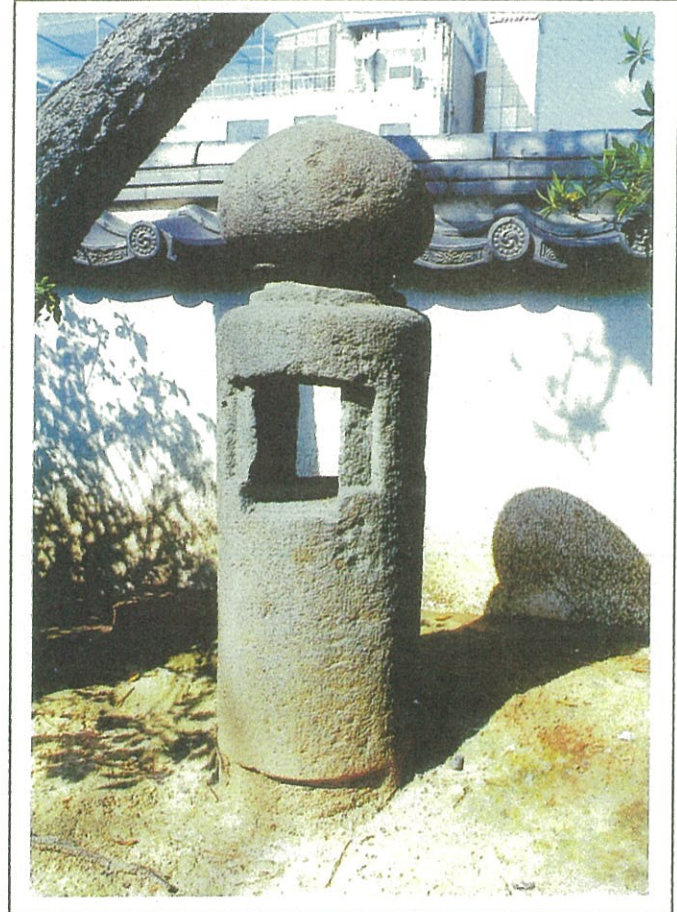
これまでの発掘調査によれば、築造時の埋立土の状況や、火災による炭化層などの土層の変化や瓦や磁器などの破片が確認されている。

### G. 建物礎石

これまでの調査（出島表門、朝永病院）では一部に礎石や玉砂利層が発見されている。

### H. 出島橋石柱

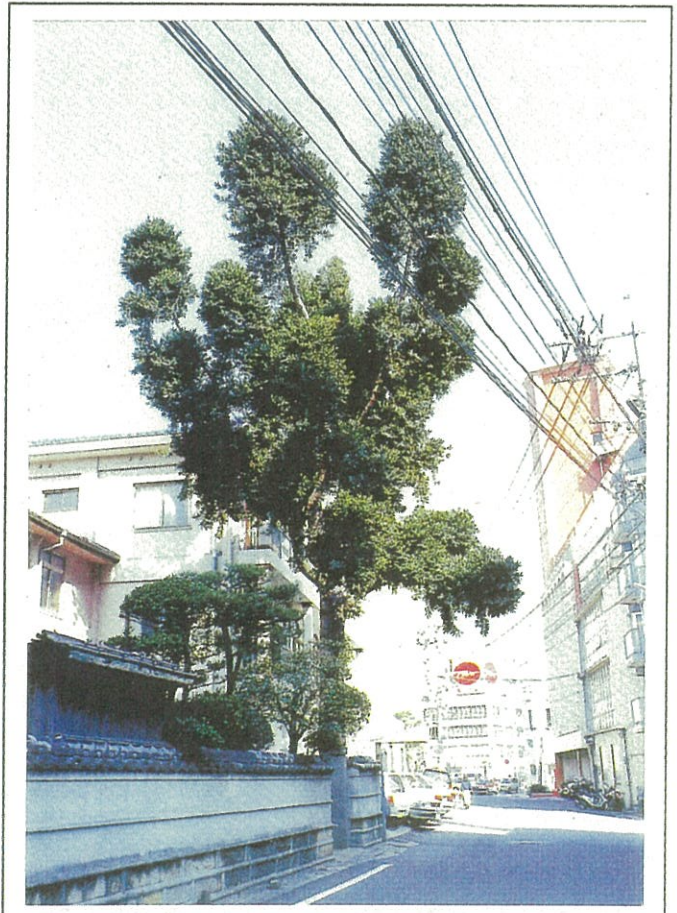
現在出島には橋名入りの石柱が置いてある。これは明治18年(1885)に着工の中島川変流工事に参画した、石工棟梁の子孫から昭和31年に寄贈されたもので出島橋親柱の可能性はある。ただ、中央部の火袋が燈籠として改変されている。



### I. デジマノキ

デジマノキはナンヨウスギ科の常緑高木で、東南アジア一帯に自生している。和名コパールノキ、学名はAgathis alba (アガチス・アルバ) という。原産地でも成長は遅く、高さ10m、幹囲1.5 mになるには100年を要するという。この木は樹高10m、幹囲1.2mあるが、幕末の頃オランダ人によって、オランダの貿易の根拠地であったジャカルタ地方から持ち込んだ幼木が育ったものである。

昭和41年に長崎県の天然記念物に指定され、日蘭修交の歴史を語る記念樹といえる。



## (2) 居留地時代の遺構

### J. 門柱

この陶製の門柱は、昭和29年(1954)に市立博物館(当時馬町)より現在地(ミニ出島、旧石倉脇出入口)に移設した。

ペトゥルス・レグウードの窯のマークがあるので、オランダのマーストリヒトのペトゥルス・レグウード社の製品で、当時出島にあった同社の店舗に使用された可能性がある。

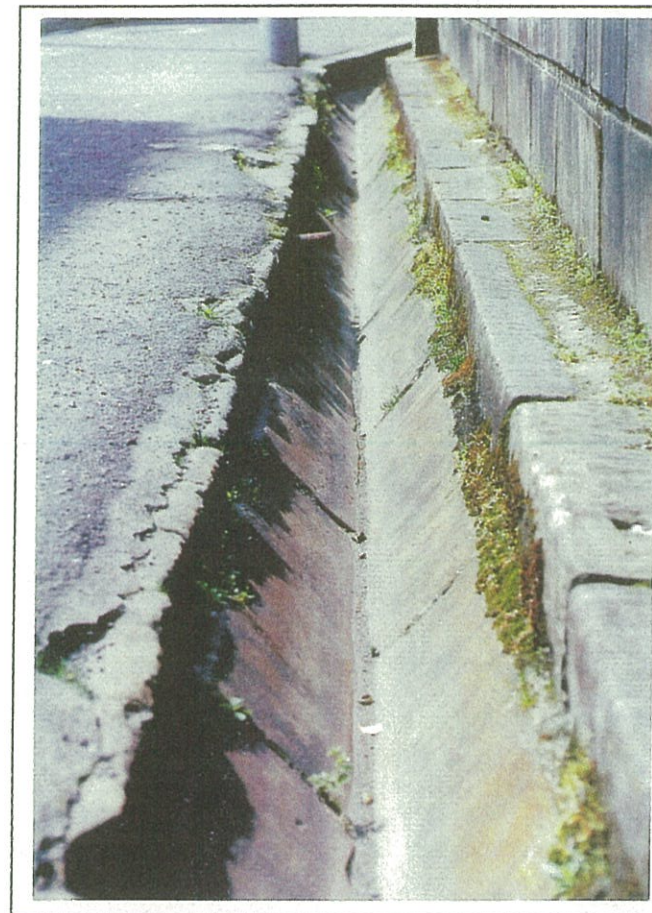


### K. 三角溝

三角溝は出島和蘭商館が廃止され、居留地の建物が建つ際につくられたものである。

### L. 居留地地番境石

境石は、居留地時代の地番を示したものである。現在6箇所確認されている。



(三角溝)



(居留地地番境石)

### M. 建物礎石

居留地時代の礎石のレベル、保存状況は発掘調査の結果によるが、後世の幾度かの建替により破壊されている可能性が高い。

### (3) 保存と公開計画

#### 鎖国期の遺構

##### A. 石造日時計

石造の日時計は風化防止等の保存処理を施すとともに、蚕館図を参考に脚台を復元し、庭園復元計画等を勘案して設置位置を決定する。

##### B. ケンペル・ツェンペリー記念碑

風化防止等の保存処理を施し、現在の位置（旧石倉北側）は当初の場所と異なるので、庭園復元計画等を勘案して設置位置を決定する。

##### C. 旗竿石

脇荷イ之蔵の復元時には、そこで保存展示するのが最適であるが、それまでは出島に残る数少ない遺物として解説を加えて室内に展示する。

##### D. 大砲

この大砲は出島に持ち込まれたものではなく、難破船のものと推定されている。破損や風化を避けるため屋内に移し展示する。

##### E. 石垣

出島周囲の石垣は破損部の復元修理などを行い、出島の四周の範囲を明確にする。南面は現在鎖国期の石垣を見ることはできないが、出島の面的な発掘調査をしたうえで外側を掘削し、石垣の復元を行い、遺構石垣を見学可能にすると同時に出島の独立性を演出する。ただし、残存部に破壊や経年による破損が進行している場合は、大規模な修理を要する可能性もある。

##### F. 土層

系統的な発掘調査の結果を見た上で、来訪者が地下の出島の遺構を見学できるよう展示方法を検討する。

##### G. 建物礎石

建物礎石等の鎖国期の遺構は埋め戻して保存する。このため、保存に必要な養生盛土を施し、復元整備レベルを設定する。

##### H. 出島橋石柱

風化防止等の保存処置を行うとともに、一時室内で展示保管し、今後は研究を深め、部材の特定を行い出島橋復元の際には活用方法を検討する。

##### I. デジマノキ

日蘭交流の歴史を物語る貴重な樹木であり、現在地で保存する。

#### 居留地時代の遺構

##### J. 門柱

今後、設置した時代等の研究を進め、展示方法を検討する。

##### K. 三角溝

出島和蘭商館跡が廃止され、居留地の建物が建つ際につくられたものであり、近代土木遺構として貴重なため保存する。

##### L. 居留地地番境石

復元する建物等に重なる可能性があるため、これらの境石は、建物等を復元する際には保存方法を検討する。

##### M. 建物礎石

19世紀初頭の建物を復元する際には、居留地時代の建物礎石も養生盛土を施し、復元整備レベルを設定する。

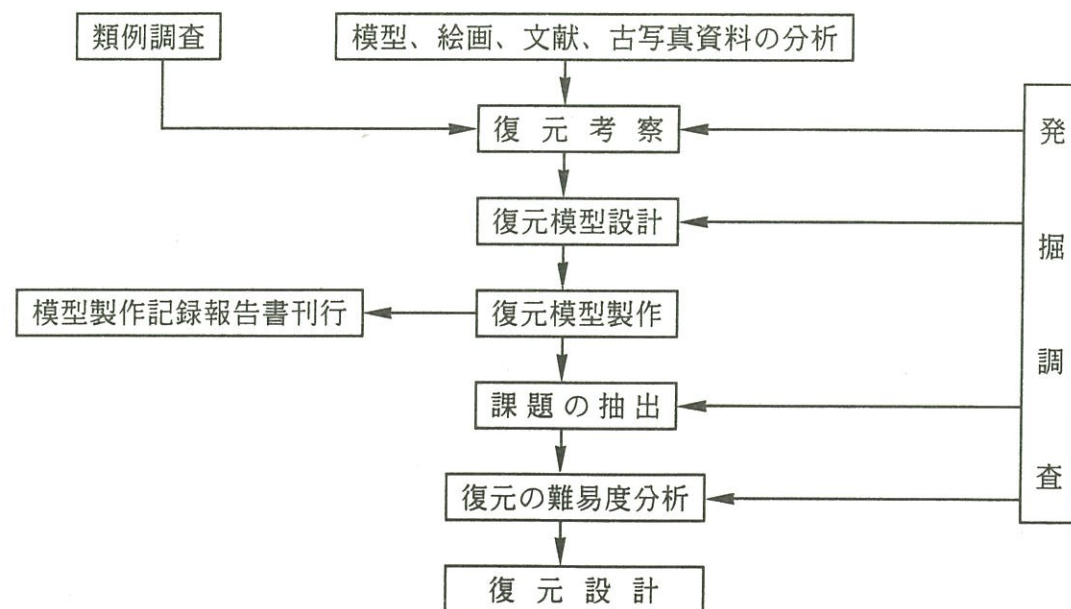
## 2. 建物の復元計画

### (1) 建物復元の考え方

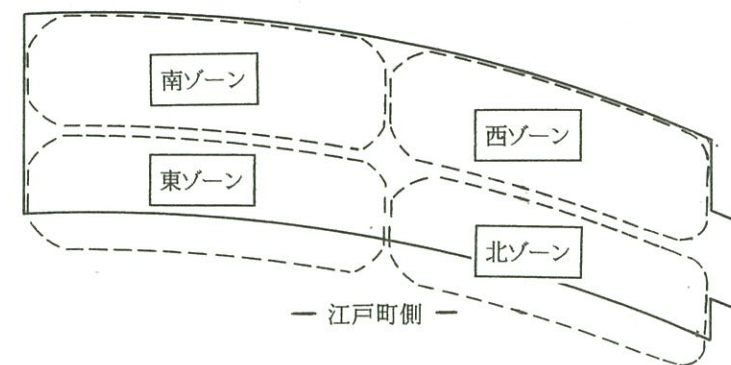
和蘭商館は寛永18年(1641)に平戸からこの地に移って来た。それから開国までの約220年間この地で交易を営んだ。その間には火災も含め、幾度も建替えが行われているが、建物を大別すると、居住施設等の建物(蘭人用、日本人用)、蔵、門、番所、小屋などで構成されており、これらの建物の復元には、現在入手し得る可能な限りの資料に基づく考察および調査が必要である。そのため、川原慶賀等によって描かれた外観の詳細な出島図や各建物の桁行、梁間寸法が記入された古絵図及び建物を立体的に明らかにすることができるオランダのライデン国立民族学博物館に収蔵されているフィッシャー(J.F. van Overmeer Fisscher 1820~1824 第1次来日)の出島模型(縮尺約1/30)などの現地調査結果を踏まえ、復元建物の平面・立面・配置の基本的な作図を行った。

しかしながら史料絵図と模型では建物の材質や内部の仕様等の不明な部分もあり、建替えの記録が記載されている可能性のある商館長日記及びオランダ側の出納簿の解読や、現存する町家などの類例調査を進めるとともに礎石や遺構の確認のため埋蔵調査を行い、十分に考証を重ね、復元精度を高めていく。

まずは、建物復元模型を製作し、細部の納まりや建物のバランスなどの検討を加えた後、諸史料、発掘調査結果を基に復元の難易度を分析し、可能なものについて復元の対象とし、19世紀初頭の出島の町並みを形成していく。なお、復元検討に使用した模型は石倉での展示に活用する。



出島は東西に走る通りと、表門から南へ伸びる通りの延長線により4つのゾーンにおおよそ区分することができ、それぞれの持つ機能や特徴が集まって出島というまちを形成していた。



ゾーン	各ゾーンの特色
西ゾーン	船着場に近く、海に向かって眺望が良く、主に上級蘭人用建物が設けられた。
北ゾーン	海の玄関口で交易に関する建物が設けられた。
東ゾーン	庭園を中心に鑑賞、娯楽の建物が設けられた。
南ゾーン	家畜の飼育や町人関連建物及び蔵などの建物が設けられた。

### (2) 建物復元のプロセス

出島の史跡は現在、公有化を進めている段階であり、史跡内にすべての建物を復元できるまでには至っていない。公有地の一部に建物を復元した場合、建物がランダムに建つような点的整備では来訪者の興味をそそらないうえ、今後の整備を進めるための拠点としては乏しい。

そのため全体の復元を最初から一度に行うのではなく、出島のシンボリックな建物を中心にブロック的な復元を進めることによって、復元する場所が一部であっても、その中に町が感じられ、今後に期待を抱かせるような整備を図り、調査研究を重ねながら、出島復元の今日的な意義と効果が発揮できるものとする。

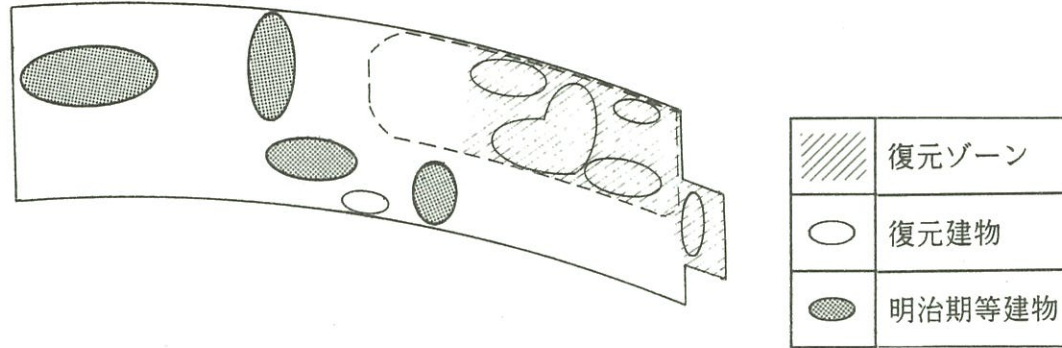
そこで、短中期計画の復元計画を概ね15年を目処に3つのステップで進めていく。

1) 短中期計画ステップ1 (11棟)

カピタン部屋や水門などの核となる建物の拠点整備を図る西ゾーンを前期とし、向かい合う北ゾーンを後期として復元可能なものから順次着工し、出島西側のブロック的整備を行う。

～前期 (西ゾーン)～

核となる建物の復元による拠点整備を行う。



前期：復元建物概要 (5棟)

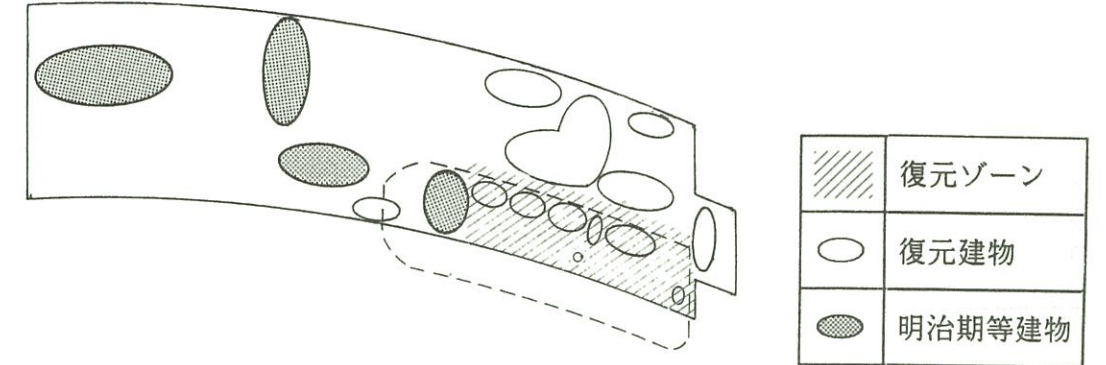
番号	名称	規模		構造形式	当時の用途
		桁行×梁間(間)	棟高(m)		
24	水門	9.0×2.0	8.8	入母屋造、棧瓦葺、 竪板張、木造平家建	交易門
28	料理部屋	6.7×2.7	7.9	切妻造、棧瓦葺、竪板張 木造平家建、越屋根付	料理部屋
29	ヘトル部屋	14.0×4.5	12.8	東側切妻造、西側入母屋造、 棧瓦葺、竪板張、木造2階建	次席商館長の居宅
30	カピタン部屋	16.5×6.5 7.0×5.0	15.0	切妻造、棧瓦葺、下見板張 (漆喰)、木造2階建	商館長の居宅
31	乙名部屋	11.5×4.0	8.2	切妻造、棧瓦葺、竪板張 木造2階建	乙名部屋

短中期ステップ1-前期ではまず出島らしさを最も強く表現できるカピタン部屋が位置する出島西側のブロックから取りかかる。

前期の西ゾーンの建物構成としては、水門、料理部屋、ヘトル部屋、カピタン部屋、乙名部屋などが位置しており、特にカピタン部屋は商館長の事務所兼住居であると同時に日本の賓客が出島を訪れた際の接待の場でもあり、出島を代表する建物であった。またここには西洋と日本の文化・学術・交易品などが最初に出入した門戸である水門もあり、ここから復元に着手する意義は大きい。

～後期 (北ゾーン)～

出島西ゾーンから北ゾーンの整備により、出島の町並み、町すじが把握られるようになり、今後は中央部へ向けて復元ゾーンは広がる。



後期：復元建物概要 (6棟)

番号	名称	規模		構造形式	当時の用途
		桁行×梁間(間)	棟高(m)		
7	15人番所	1.5×1.0	3.6	切妻造、棧瓦葺、竪板張 木造平家建	番所
8	A:一番船 船頭部屋 B:筆者部屋	9.0×5.0	13.1	西側入母屋造、東側切妻造、 棧瓦葺、竪板張、木造2階建	船長の居宅 筆者部屋
9	1番蔵	5.0×3.0	8.9	切妻造、棧瓦葺、漆喰塗 土蔵2階建	砂糖蔵
10	2番蔵	7.0×5.0	10.0	切妻造、棧瓦葺、漆喰塗 土蔵2階建	蘇木蔵 (染料)
11	3番蔵	6.0×5.0	9.2	切妻造、棧瓦葺、漆喰塗 土蔵2階建	砂糖蔵
12	筆者頭部屋	6.5×5.0	11.1	切妻造、棧瓦葺、竪板張 木造2階建	書記の居宅
	旗竿			帆船のマスト状	

後期の北ゾーンの建物構成の主なものとしては、一番船船頭部屋 (オランダ船船長)、筆者頭部屋、蔵などが位置しており、出島での生活、交易品の数々を再現できるとともに、出島の町並み、町すじが捉えられるようになる。また、国道側、市電からも出島を認識することができ、異次元の空間が出現する。出島を認識できる景観要素として重要な旗竿もこのゾーンに位置しており、これを復元することにより出島がオランダ商館であった事をより一層イメージする事ができる。

短中期計画ステップ1 建物配置図



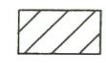
ステップ1 復元建物 (11棟)

番号	名称
7	15人番所
8	A:一番船 船頭部屋 B:筆者部屋
9	1番蔵
10	2番蔵
11	3番蔵
12	筆者頭部屋
24	水門
28	料理部屋
29	ヘトル部屋
30	カピタン部屋
31	乙名部屋
	旗竿

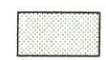
明治期等建物

番号	名称
A	表門
B	新石倉
C	旧石倉
D	旧内外倶楽部
E	旧出島神学校

\*表門は復元建物



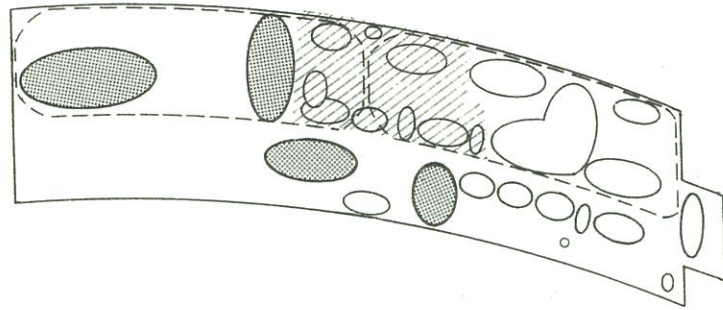
明治期等建物






ステップ1 復元建物

2) 短中期計画ステップ2 (9棟)

ステップ2-ステップ1の整備をさらに中央部に広げることにより、  
明治期等建物以西に鎖国期の出島が復元される。



	復元ゾーン
	復元建物
	明治期等建物

ステップ2：復元建物概要 (9棟)

番号	名称	規模		構造形式	当時の用途
		桁行×梁間 (間)	棟高 (m)		
32	16番蔵	5.0×2.0	7.3	切妻造、棧瓦葺、漆喰塗 土蔵2階建	丁字蔵 (香料)
33	A:筆者部屋 B:筆者部屋	8.0×5.0	13.1	切妻造、棧瓦葺、下見板 張、木造2階建	筆者部屋
34	14番蔵	5.0×3.0	8.3	切妻造、棧瓦葺、漆喰塗 土蔵2階建	丁字蔵
35	乙名詰所	4.5×4.0	7.6	切妻造、棧瓦葺、豎板張 木造2階建	乙名の詰 番所
36	15番蔵	10.0×3.0	8.1	切妻造、棧瓦葺、漆喰塗 土蔵2階建	砂糖・ 蘇木蔵
37	番所	1.5×1.0	3.6	切妻造、棧瓦葺、豎板張 木造平家建	下級検使 の番所
38	出島町人部屋	5.0×3.0	8.1	東側入母屋造、西側切妻 造、棧瓦葺、豎板張 木造2階建	出島町人 部屋
39	9番蔵	4.0×4.0	11.7	切妻造、棧瓦葺、漆喰塗 土蔵3階建	銅蔵・ 鮫蔵
40	組頭部屋	7.0×4.0	8.2	切妻造、棧瓦葺、豎板張 木造2階建	組頭部屋

ステップ2ではステップ1で復元された建物に加えて、当時の町並みを中央部まで進展させていく。これにより史跡内での西側から中央部の鎖国期の出島をほぼ再現することができる。この時点までくると水門から中央の町並み、そして表門へとつながり出島の全体像がかなり浮かび上がってくる。

ステップ2の建物構成の主なものとしては、筆者部屋、乙名詰所、出島町人部屋、組頭部屋などと蔵がある。

これらの建物は比較的中小規模の日本人用家屋と漆喰塗の土蔵が多く、カピタン部屋をはじめとする上級商館員用の大規模な異国風建物やオランダ国旗のひるがえる西側とは多少異なり、当時の日本の家並みに近い景観を形成している。

特色の一つに、乙名詰所が表門正面に位置していることが挙げられる。出島乙名は貿易事務や管理の一切を取り仕切っていた役人であり、乙名部屋はステップ1で建設する西側(カピタン部屋隣接)にもあるが、これはカピタンの監視および交渉を考慮した位置と考えられ、ここでの乙名詰所は、出島への出入りおよび出島の東西を見渡すことができる位置にあり、出島全体の監視を主目的に置かれたと考えられる。この乙名詰所の周囲には、乙名の下の組頭や蘭人用の住まいもあり、これらの建物の復元は出島における日本側の管理体制を再現することもできる。

短中期計画ステップ2 建物配置図



ステップ1 復元建物(11棟) ステップ2 復元建物(9棟)




番号	名称
7	15人番所
8	A:一番船 船頭部屋 B:筆者部屋
9	1番蔵
10	2番蔵
11	3番蔵
12	筆者頭部屋
24	水門
28	料理部屋
29	ヘトル部屋
30	カピタン部屋
31	乙名部屋
	旗竿

番号	名称
32	16番蔵
33	A:筆者部屋 B:筆者部屋
34	14番蔵
35	乙名詰所
36	15番蔵
37	番所
38	出島町人部屋
39	9番蔵
40	組頭部屋

明治期等建物

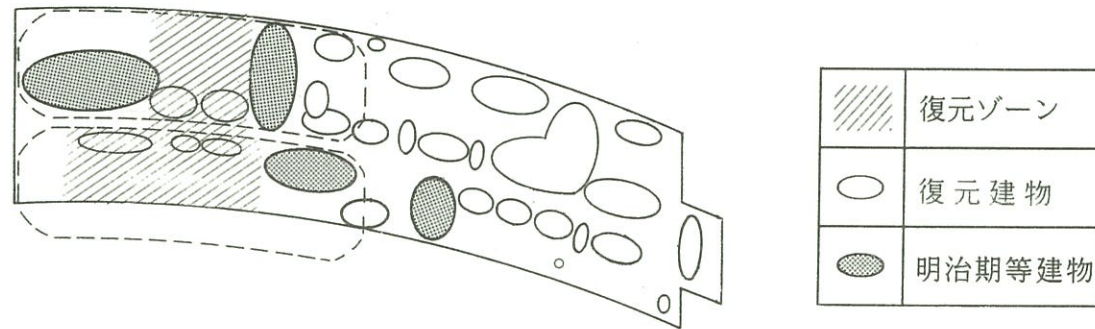
番号	名称
A	表門
B	新石倉
C	旧石倉
D	旧内外倶楽部
E	旧出島神学校

\*表門は復元建物

-  明治期等建物
-  ステップ1 復元建物
-  ステップ2 復元建物

3) 短中期計画ステップ3 (5棟)

短中期最終ステップでは東ゾーン、南ゾーンの明治期等建物にかからない部分5棟を復元する。明治期等建物は残っているが、4ゾーンに渡って整備が進むため、鎖国期の出島がかなり全体的にあらわれる。



ステップ3：復元建物概要 (5棟)

番号	名称	規模		構造形式	当時の用途
		桁行×梁間 (間)	棟高 (m)		
19	食堂付賄所	9.0×1.5	3.8	切妻造、棧瓦葺、豎板張 木造平家建	食堂付賄所
20	御朱印書物蔵	4.0×2.0	8.3	切妻造、棧瓦葺、漆喰塗 土蔵2階建	御朱印書物蔵
21	病室	7.5×2.0	6.5	切妻造、棧瓦葺、豎板張 木造2階建、	病室
46	カピタン別荘	6.4×3.0	12.7	切妻造、棧瓦葺、漆喰塗 木造2階建	カピタンの別荘
47	7番蔵	7.5×3.5	9.5	切妻造、棧瓦葺、漆喰塗 土蔵2階建	砂糖蔵

ステップ3では史跡内で復元可能な位置にある残りの建物等を復元する。この部分は、明治期等建物である旧出島神学校、旧内外倶楽部、旧石倉に挟まれるように位置しており、居留地時代の建物と混同してしまう恐れもあるが、出島図に描かれている松の木の植栽や庭園などを復元整備することによって往時の出島の雰囲気を出していく。

建物等の主な構成としては、食堂付賄所、御朱印書物蔵、病室、カピタン別荘など特色のある建物が位置している。病室、食堂付賄所は建物自体は小規模な建物であるが、治療や料理に薬草、野菜等を利用していたことから、建物と庭園の一体となった復元を行う。

短中期25棟の建物の復元にあわせて、通りの仕様や街灯などの景観形成要素と、家具・調度品等の道具類の復元整備により生活感のある町を形成していく。

この時点でも完全な復元ではないが、4つのゾーンに渡って整備が進むため、全体的に鎖国期の出島を彷彿することができ、短中期での建物復元計画は完成する。

建物復元が進むと、出島は、史跡指定地という土地の歴史的価値に加えて、当時の景観を実体験することのできる空間を持つようになる。建物の復元精度を高め、良好な出島の景観を形成することによって、将来的には全棟復元に向けての気運も高まっていく。

短中期計画ステップ3 建物配置図



ステップ1 復元建物(11棟)

ステップ2 復元建物(9棟)

ステップ3 復元建物(5棟)

明治期等建物





番号	名称
7	15人番所
8	A:一番船 船頭部屋 B:筆者部屋
9	1番蔵
10	2番蔵
11	3番蔵
12	筆者頭部屋
24	水門
28	料理部屋
29	ヘトル部屋
30	カピタン部屋
31	乙名部屋
	旗竿

番号	名称
32	16番蔵
33	A:筆者部屋 B:筆者部屋
34	14番蔵
35	乙名詰所
36	15番蔵
37	番所
38	出島町人部屋
39	9番蔵
40	組頭部屋

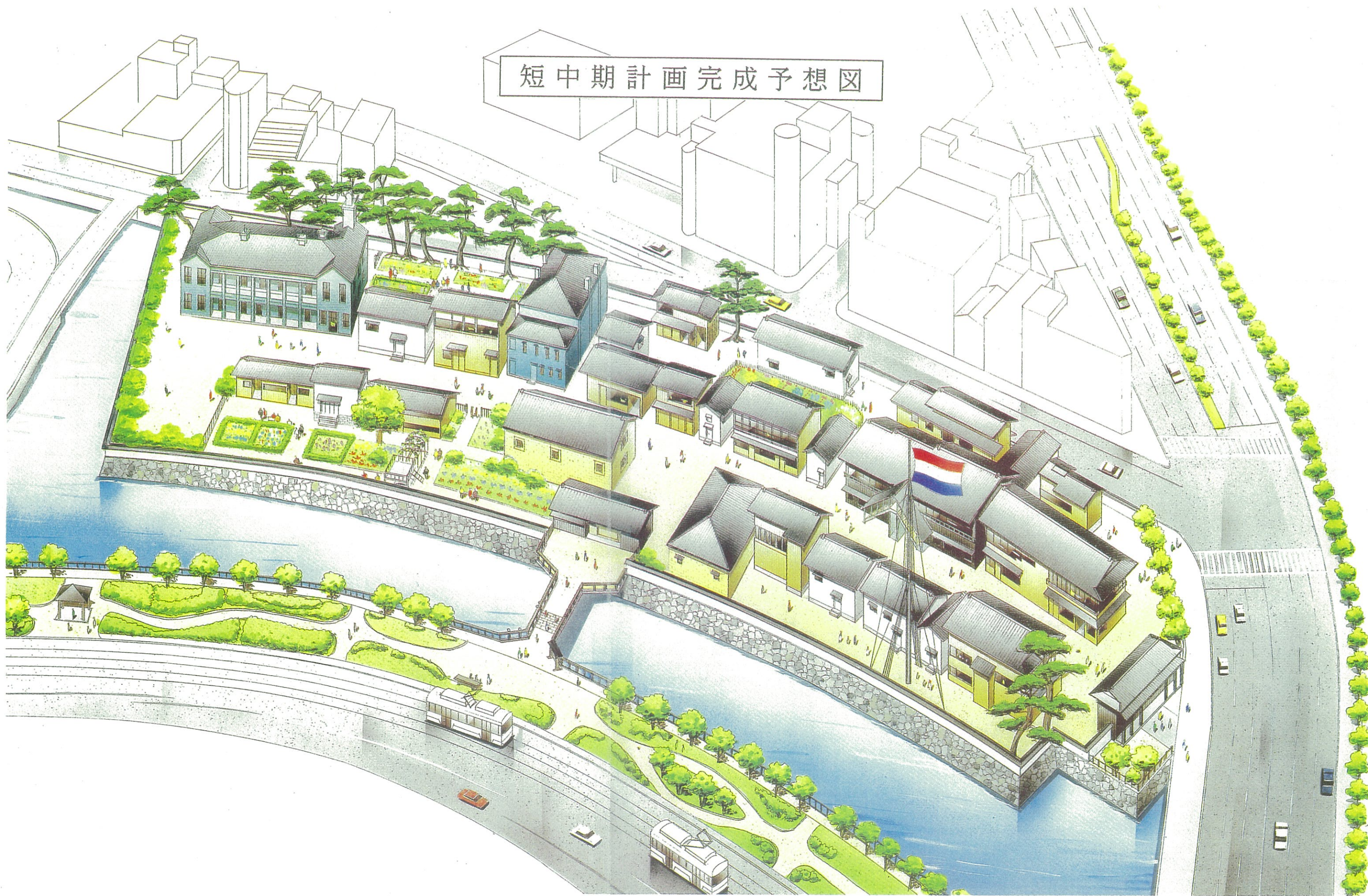
番号	名称
19	食堂付贈所
20	御朱印書物蔵
21	病室
46	カピタン別荘
47	7番蔵

番号	名称
A	表門
B	新石倉
C	旧石倉
D	旧内外倶楽部
E	旧出島神学校

\*表門は復元建物

-  明治期等建物
-  ステップ1 復元建物
-  ステップ2 復元建物
-  ステップ3 復元建物

短中期計画完成予想図



### 3. 庭園の復元計画

#### (1) 復元の考え方

出島の庭園は、出島全体面積の約2割を占め、建造物とともに、出島の生活環境を物語る重要な施設である。

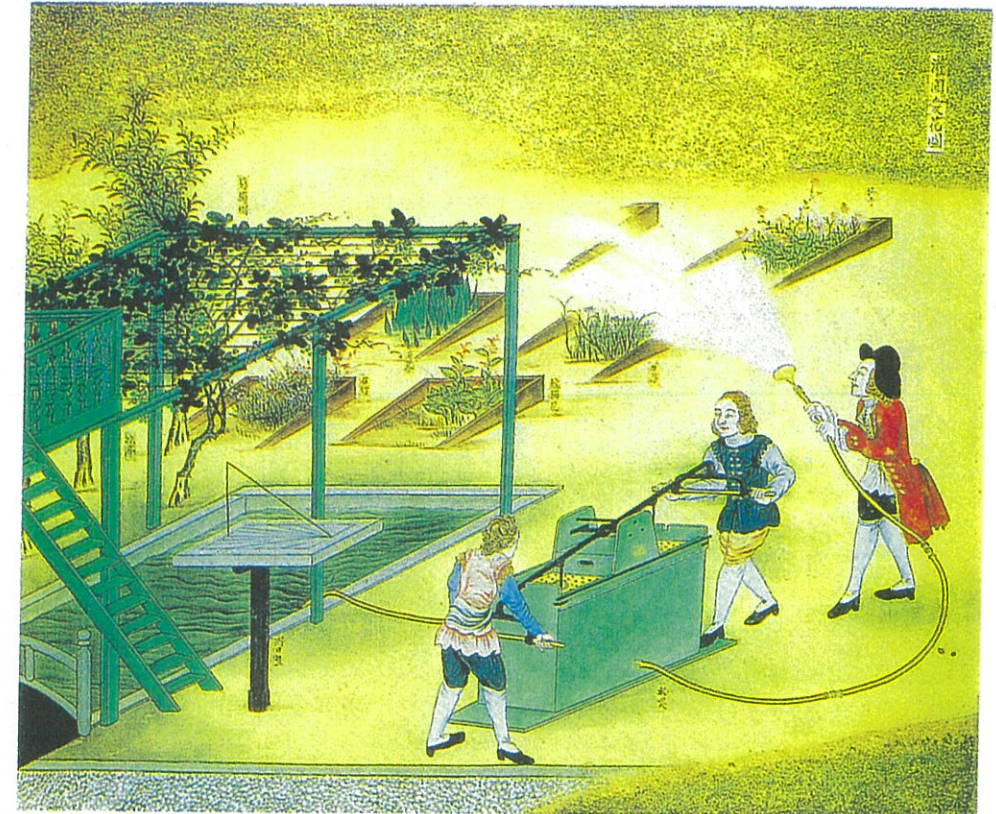
その庭園の機能は大きく2つに分けることができる。

一つは、商館員たちの生活における、憩いと潤いの場の提供である。出島には、商館長、荷倉役、医師、筆者等が常時住んでいたとされ、これらの居住者にとって出島での生活は必ずしも快適なものではなかったであろう。そのため心のなぐさめとなる鑑賞用の花木、草花を植え、さらに日本の夏の蒸し暑さは特別なものであり、これをしのぐための涼所も池の上に設けられた。これらの憩いと潤いの場としての庭園の姿をよく表現しているのが、「紅夷人旅館図」や「蛮館図－灌園愛花園」である。

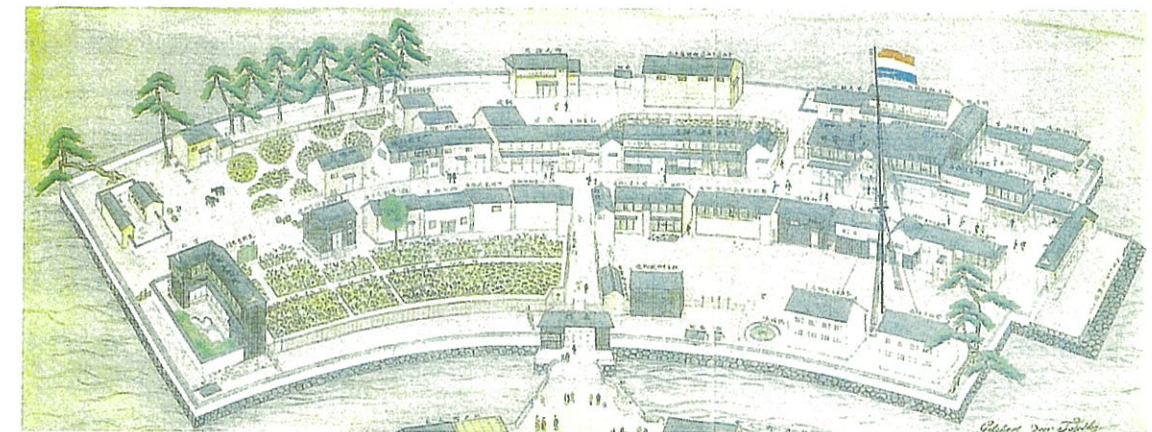
もう一つの機能は、西欧にない数多くの日本の植物を収集・研究するためのストックヤード機能で、川原慶賀の描いた出島図の庭園部分に表れている。

出島に滞在した3人の商館医師、ケンペル、ツェンペリー、シーボルトは、西欧にない珍しい日本の植物の収集・研究も来日の目的のひとつであった。彼らは日本植物の収集・研究を日本人の協力を得て充実させ、それを世界に紹介する一方、後世の日本植物学に大きな影響を及ぼした。収集した植物は種子、苗、さく葉として膨大な種類を本国へ送り、それが西欧諸国に大きな反響を呼んだ。その舞台となった出島の庭園は、出島が和蘭商館であった約220年の間には、幾度かの変遷を遂げている。

出島の庭園は、ある一断面を復元しても、それは出島庭園を語るには不十分なものとなるので、復元する出島庭園の植栽内容は2つの機能を表現するとともに、植物に関わりのある3人の植物学者を通じて総体的に提示していくものとする。



蛮館図－灌園愛花園 1797年出島図版238 (憩いと潤いの場としての庭園)



出島図 川原慶賀 1833年出島図版168 (研究・収集のための庭園)

(2) 整備の方針

■復元年代

昭和57年の出島整備審議会の答申は、復元年代を1809～1833年としている。建物の復元計画も同様に設定していることから復元建物との整合性を図るとともに、この時期に庭園植物や、庭園施設が充実していたことから庭園の復元年代も同時期とする。

■位置及び形態

庭園の位置及び形態は、フィッシャーの「出島平面図」及びグーリック (W.L. van Guericke 1822年7月来日)「出島平面図」を基本とする。

■名称

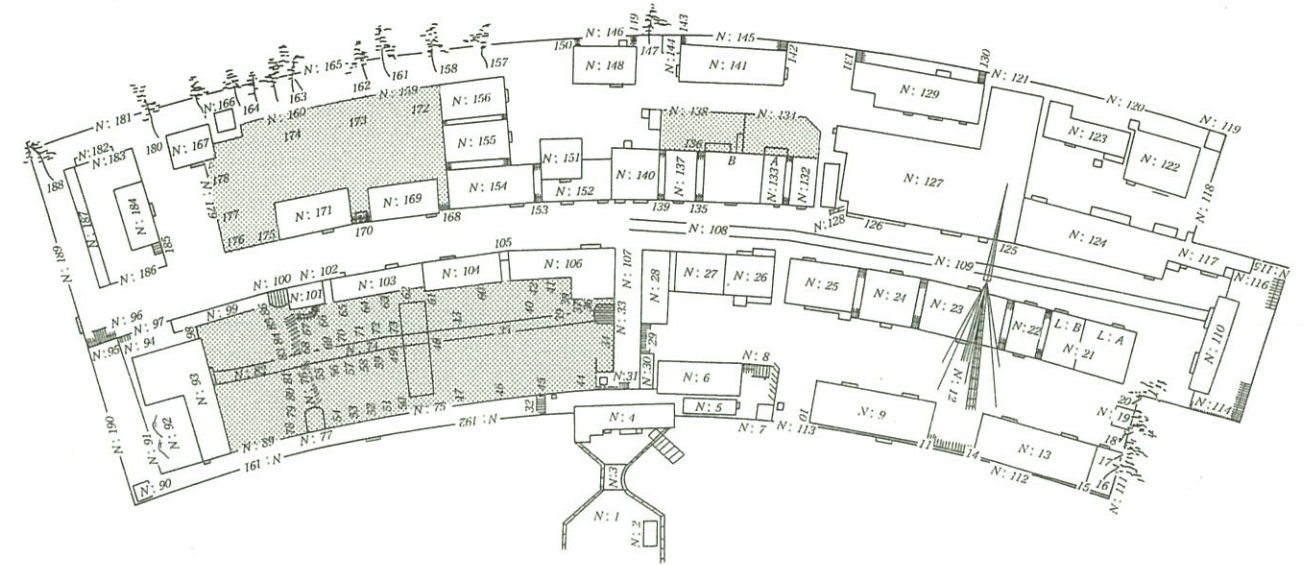
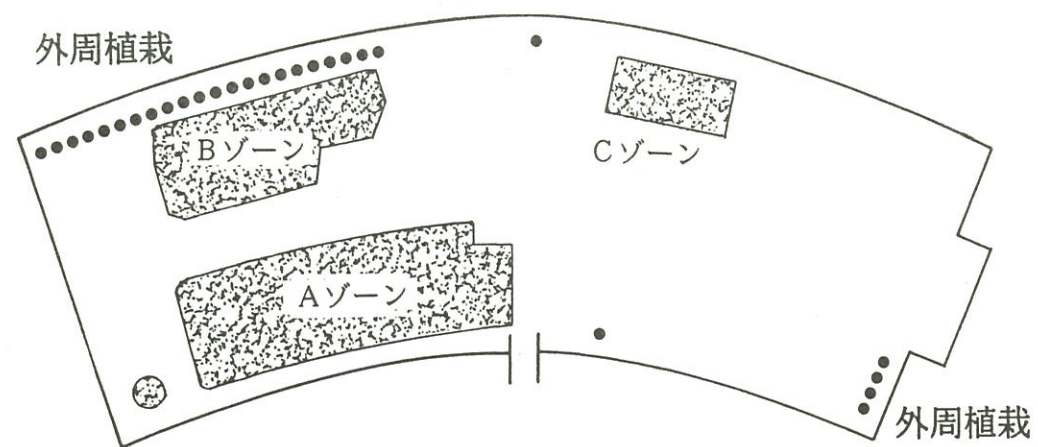
出島関連の絵図、文献には、出島内の植栽地の表記が様々に現れ、その利用形態はそれぞれ変遷したことを示している。

Aゾーン……庭園, 阿蘭陀花島, 花畑, 葉園, 植物園

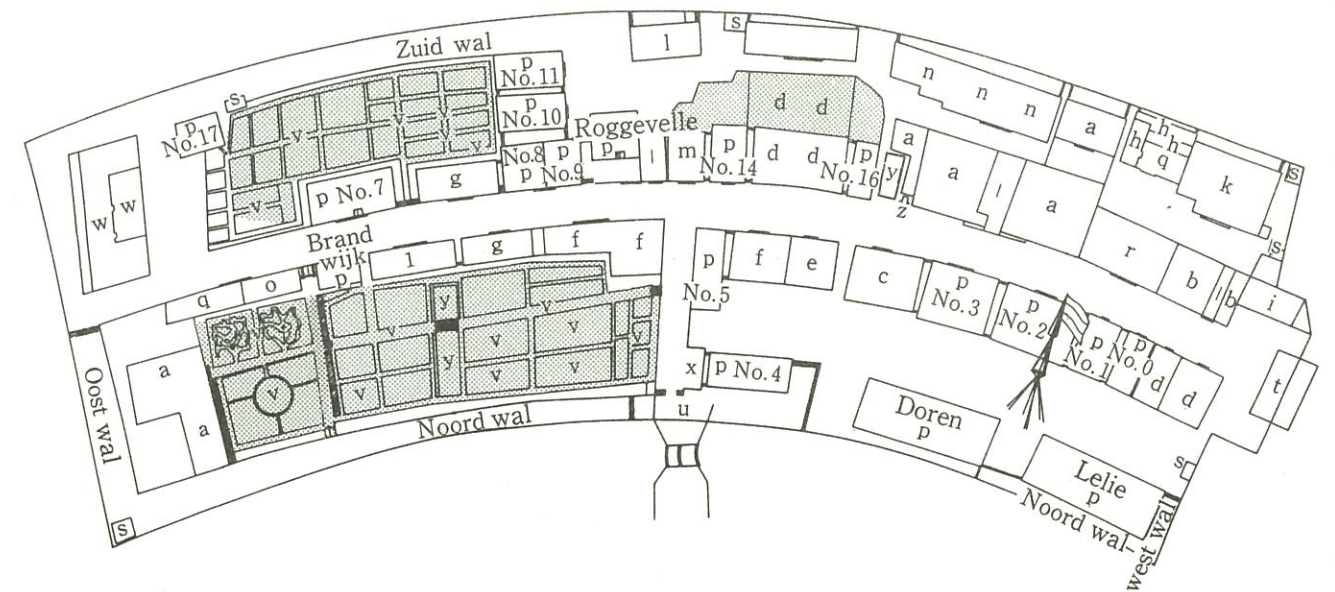
Bゾーン……菜園, 畑, 野菜畑, 庭園

Cゾーン……菜園, 庭園

各ゾーンとも名称の変化がその時代の庭園のあり方を表現している。出島の庭園は、絵図や史料によれば3つのゾーンに大きく分かれているが、本計画では外周植栽を含め、まとまった植栽地という意味で全体を総称して庭園の語を用いる。



フィッシャーの出島平面図 (出島図版 161 : 1820年代)



グーリックの出島平面図 (出島図版 164 : 1822年頃)

### (3) 復元整備計画

#### 短中期復元整備計画

##### ■ Aゾーン

庭園の植物は、定植するものと、鉢植えで展示するものに分け、両者ともテーマ性を持たせたものとする。

定植するものにはシーボルトの研究・業績にちなんでいくつかの種類を選び景観に配慮しながら植栽していく。

例えばシーボルトの「日本植物誌」等に収録される植物の中から植栽するとともに、説明板を設置して、両者を対応学習できるようにする。このなかにはシーボルトが種子の移送に工夫をこらし、オランダの日本貿易に貢献したことで知られるチャノキ、またアオキのように日本人にとってはごくありふれた植物も実のなる観葉植物として大切にされ、特に班入りのものは珍重されたことから、生垣等に使用したり、学名命名のエピソードで有名なアジサイを景観のポイントに使用するなど、単に植物を並べるだけでなく、興味を持って鑑賞できるようにする。

景観的には「日本植物誌」の扉絵に描かれた、ケンベルとツェンベリーの石碑周りの植栽も検討していく。また、シーボルト以前のケンベル、ツェンベリーの業績も視野に含めて検討していく。彼らがヨーロッパに紹介、移出した日本の植物のうちいくつかはその後各地で定着し、さらに品種改良され、園芸植物として重要な位置を占めたものとして、例えばツバキ類、コニファー類（針葉樹）等がある。また逆に出島を窓口として日本に移入し、帰化した植物のうちカンナ、バラ、ダリヤなどがあり、荷物の緩衝材として使われたクローバーもその一例である。

庭園施設としての池、橋、葡萄棚の涼所は楽しむ場としての機能を表現するもので、またデザイン的にも独特であり、景観の骨格としては重要なものであるため、絵図等を参考に復元整備していく。

鉢植えするものには、定植では管理しにくい草花類や四季折々の花の鑑賞が主体となる植物等をテーマ展示する。

例えばシーボルトが送り出し、ベルギーのケントにて花開いたカノコユリは、育成・育種され、ヨーロッパの園芸界に大きく貢献した。

このように日本の植物がヨーロッパへ渡り、それらが育種され、再び日本へもたらされ、現在の園芸文化の姿ができ上がっている。こうした日本と海外の植物交流をテーマとした展示も検討していく。

植物の生体（定植・鉢植え）展示以外にも、説明板等により植物の紹介をするなど、多様な展示を試みる。

##### ■ Bゾーン・Cゾーン

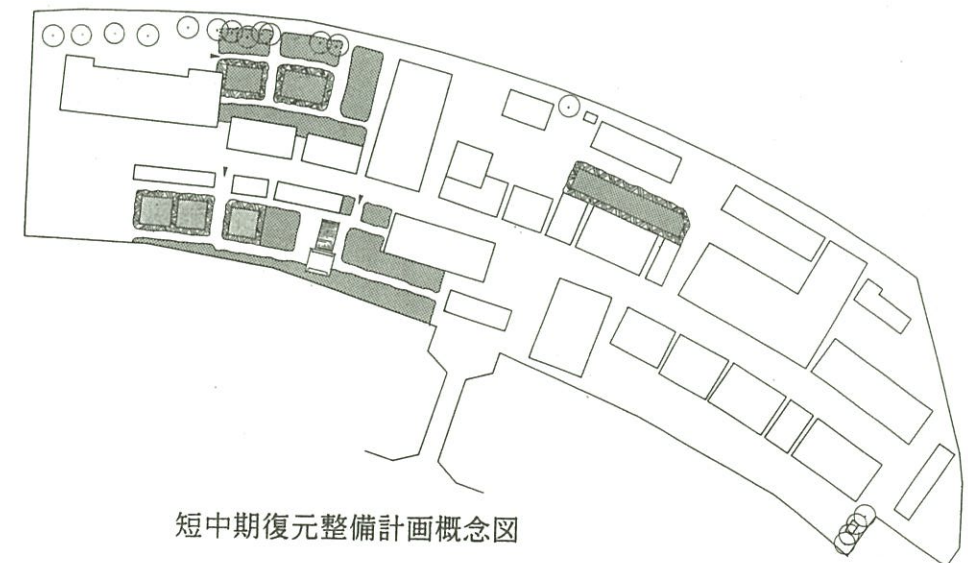
Bゾーンは、絵図や史料によると往時の商館員の食材を提供する場でもあったので、菜園として可能な限り復元整備を図っていく。

なお、建物保存計画（P.26）との調整を図るものとする。

Cゾーンは、復元建造物に付属した小庭園であるため、それら建物の復元と合わせて、整備を図っていく。

##### ■ 外周植栽

クロマツを、絵図に共通して見られる位置に植栽する。



短中期復元整備計画概念図

## 4. 旧出島橋の復元計画

### (1) 復元の考え方

往時の出島は、四方を海に囲まれた築島であり、その周辺を堀で取り囲んだ隔絶した世界であった。

旧出島橋は、出島の和蘭商館と長崎の街とを結ぶ唯一の出入口であり、出島の中でも象徴的な構造物で、出島復元計画の重点項目である。

しかしながら、出島は、明治18年から始まる中島川の変流工事により出島側を平均18m削り取られ、出島と江戸町間の距離は約20mから約30mとなった。

市民や来訪者に往時の出島を彷彿させ、架橋の機運を盛り上げるためにも、河川管理者との協議を重ね、橋の取付部分の公有化を図りながら、旧出島橋の早急な復元整備を図る必要がある。

### (2) 旧出島橋の考察

#### ①旧出島橋の構造

出島図によると、旧出島橋は延宝6年(1678)に木橋からアーチ状の石橋に改築され、明治21年の変流工事で除去されるまで存在していた。

(資料：出島図 P248, 出島図版 102)

#### ②旧出島橋の規模

出島図によると旧出島橋は、縦(縦)2間2尺・横2間1尺と、縦2間1尺・横2間2尺と記述された史料がある。

前者には天明6年(1786)以前のものであり、後者には寛政の大火後の文化6年(1809)頃の絵図が2点と、嘉永6年(1853)以降のものがある。

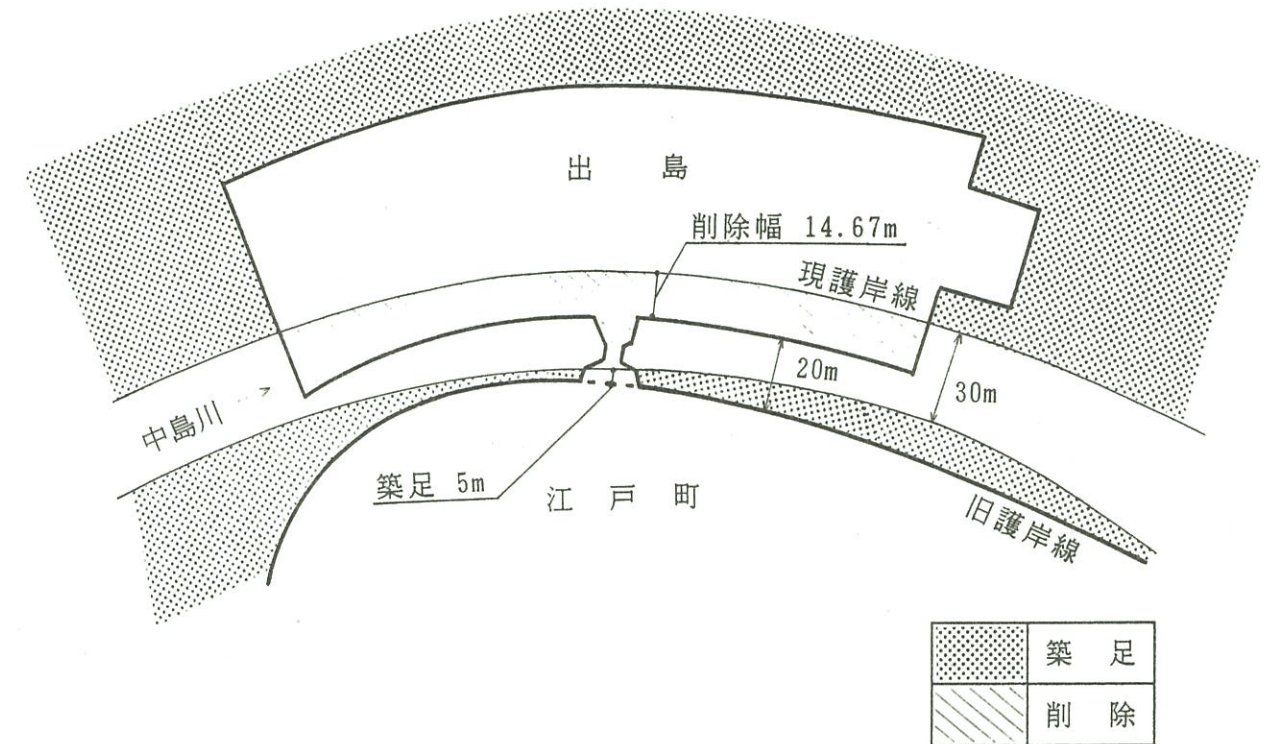
(資料：出島図版 117, 152, 155, 191)

#### ③出島と江戸町間の距離

往時の出島と江戸町間の距離は資料から推測すると、出島の旧護岸線は、明治21年の変流工事で、8.15間(14.67m)削除され、図のごとく中島川の中程に位置する。江戸町の現護岸線は旧護岸線より5m程築足されていることが確認されている。

これらのことから、出島と江戸町間の距離は約20mと推測できる。

(資料：出島図 P248, P267)



### (3) 復元の方針

出島は海面に築造され、旧出島橋だけが唯一の出入口であった。

短中期計画では、川幅の違いや河川管理上の問題等で、橋の旧形態を完全に復元することは困難といえるが、歴史的な正面からのルートを確認するために、できるだけ早い時期に旧出島橋を架橋する。

長期計画では、中島川の振り替えによって出島北面の拡張がなされるため、架け替える必要が生じることになる。

そこで短中期における架橋の方針としては、前記の考察などから史実と河川管理上の制約を踏まえて、下記の事項を前提条件とする。

1. 出島橋の全橋長は現在の河川幅の30mとする。
2. 旧出島橋の位置は、出島の南北道路から表門方向へ直線上とし、出島旧護岸線と江戸町旧護岸線の中心に位置させる。
3. 利用形態は人道橋とする。

このような前提のもとに検討すると、旧出島橋の構造形態は、大略次の3つの案が考えられる。

#### ①案 旧出島橋の位置と形状を復元し、前後を現代橋でつなぐ案

この案では、旧出島橋の部分のみ石橋の復元をなし、橋の袂の突出部の形状を付し、前後は現代橋とする。

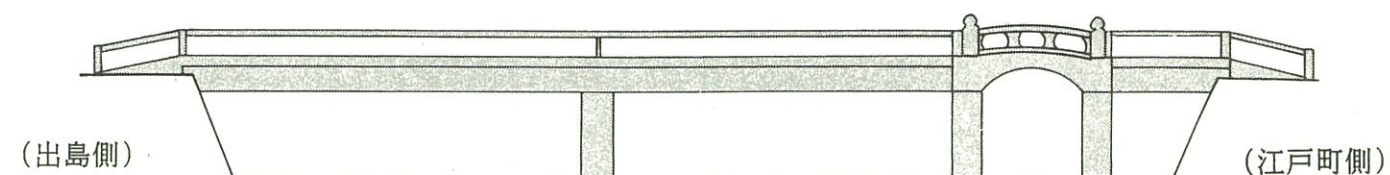
#### ②案 石橋のイメージをテーマに景観に配慮した現代橋とする案

この案は、全体を石橋のイメージをテーマとしたデザインの現代橋とするもので、デザイン・形状は自由に決定できるが、可能な限り史実に基づき復元するという理念からは遠のくものとなる。

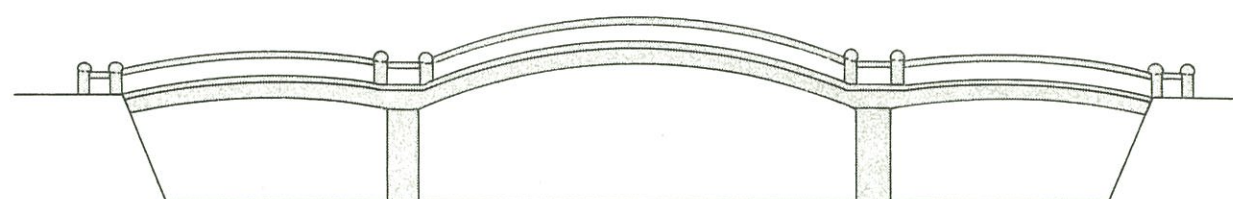
#### ③案 仮設橋とする案

この案は、往時の江戸町側からの出入口を早期に実現するため、簡便なもので架橋するものである。

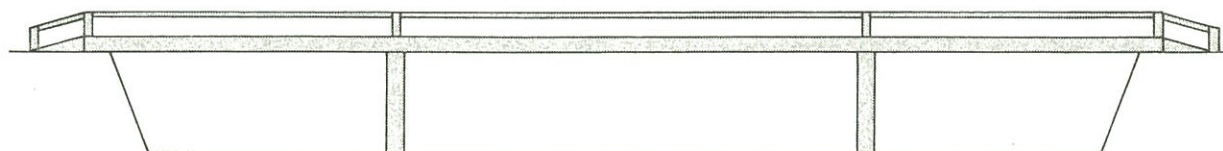
#### ①案



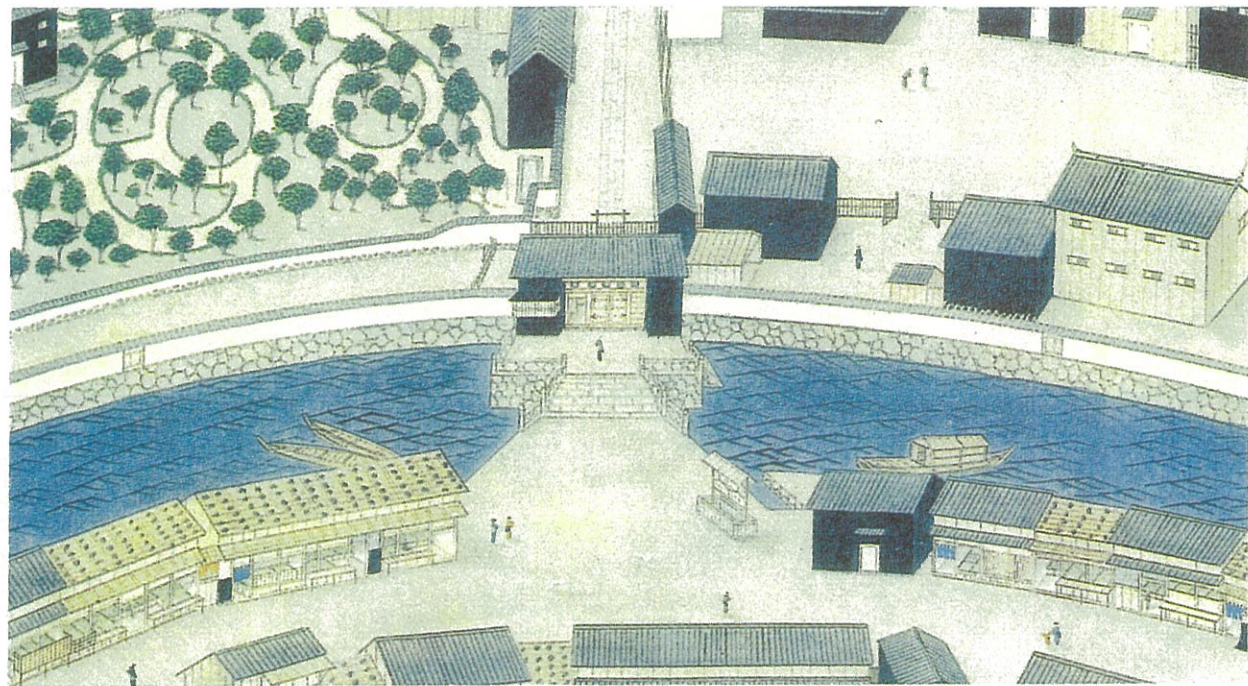
#### ②案



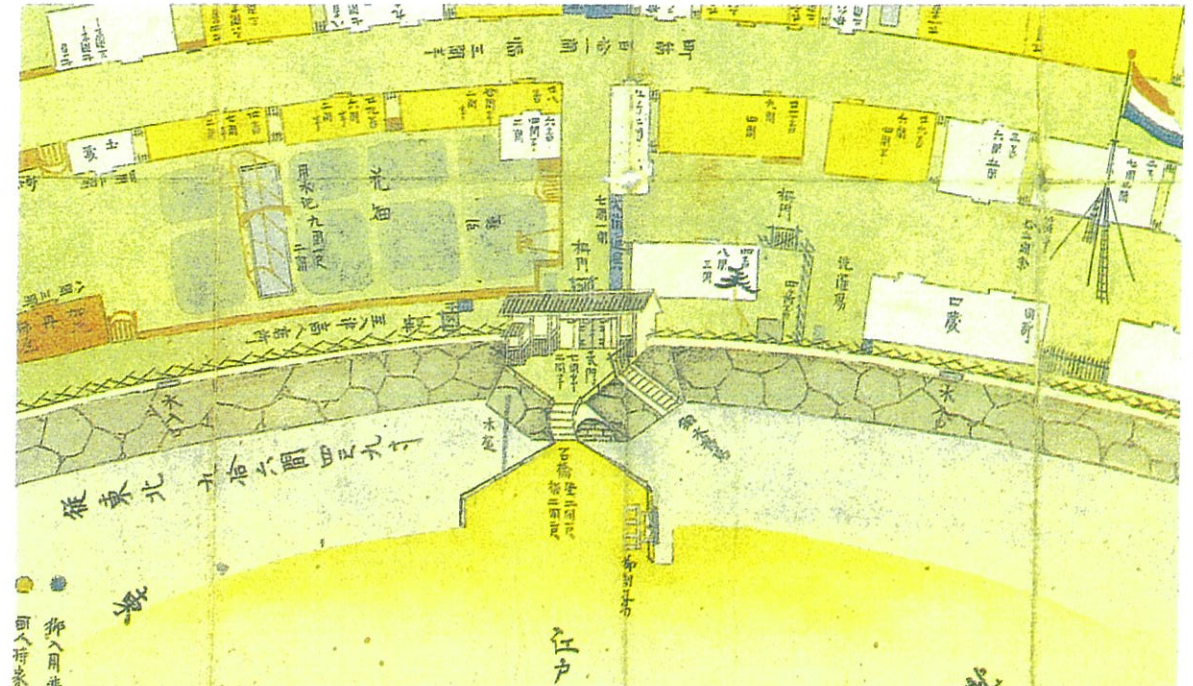
#### ③案



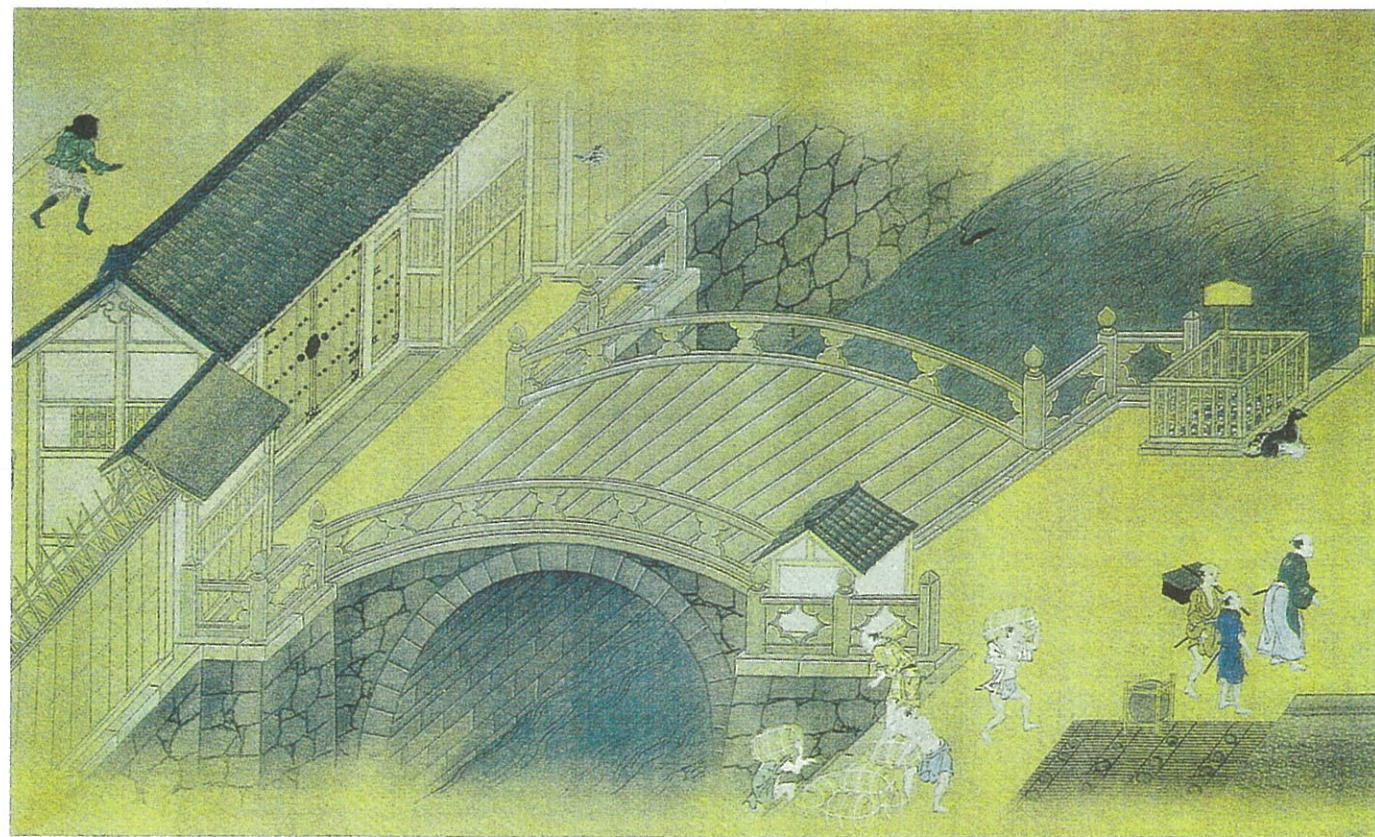
旧出島橋の復元としては、全橋長内に、位置と形状を史実に基づいた旧石橋の復元を含み、両延長部分である現代橋の幅員は、旧石橋の幅員に合わせ、橋の袂の突出部を参考図の資料に合わせた形状を付し、往時のイメージを偲ばせるものとした①案を基本とする。



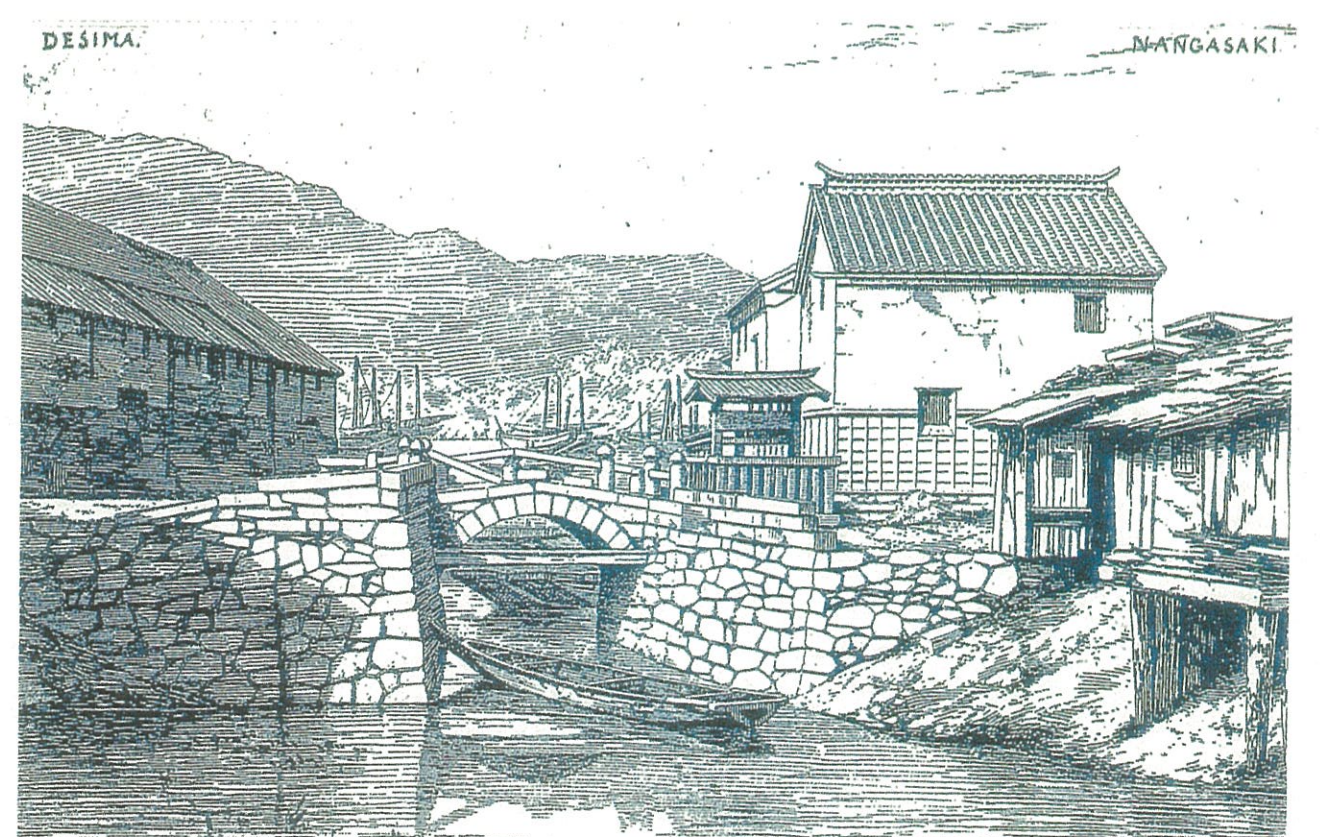
183 『出島図』 絹本着色 39.0×73.2cm ロッテルダム ファン・ストルク地図博物館蔵



152 『出嶋歩刻之図』 紙本着色 35.0×47.2cm 長崎 馬場知子氏蔵



207 狩野春湖『出島図』(『長崎図』の内) 絹本着色 41.0×510.0cm 水戸 水府明德会彰考館蔵



102 オイレンブルク伯『東アジア遠征記』所収スケッチ「出島橋」  
1866〔慶応2〕年刊 石版 12.7×17.5cm 東京 東京大学史料編纂所蔵

\*番号は出島図版

## 5. 明治期建物等の保存計画

### (1) 保存の考え方

現在、出島には旧出島神学校、旧内外倶楽部、新石倉、旧石倉の明治期等建物及び出島橋が存在している。特に、旧出島神学校と旧内外倶楽部、出島橋は明治期のものとしては、その規模、構造、外観から、今日では高く評価される近代的遺産である。一方、出島復元は土地の公有化や各種調査を前提としており、すべてが完成するには相当の期間を要する。

そのため、19世紀初頭の出島和蘭商館跡の復元に関連して生じる移築については整備効果を勘案して慎重に検討すべきであり、短中期計画までは整備の上活用していくこととする。

### (2) 現状

～旧出島神学校～

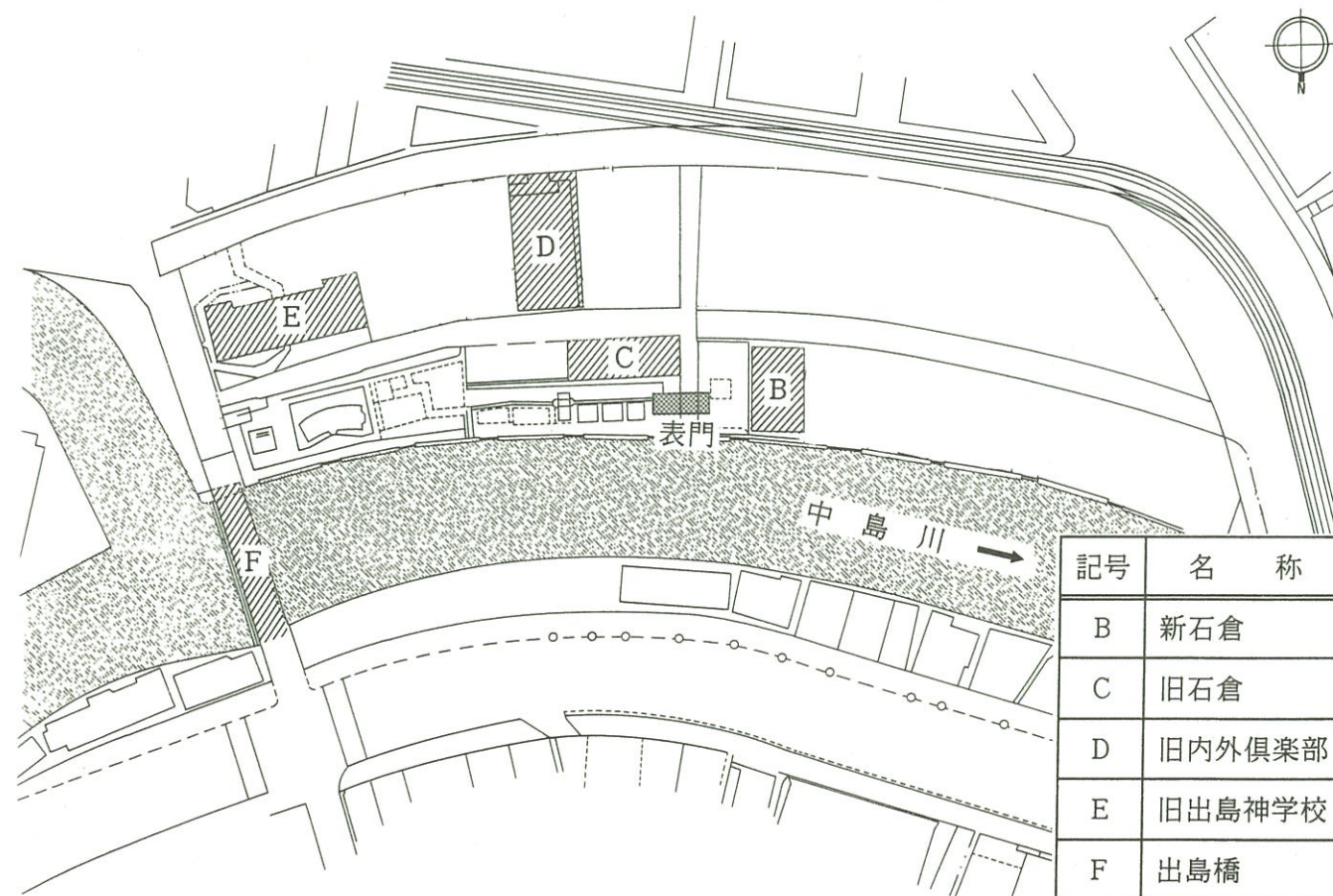
- [所在地] 長崎市出島町11番2
- [建築年代] 明治10年(1877)
- [建築概要] 木造和洋小屋組2階建、切妻造、粘土掛棧瓦葺
- [延床面積] 783.28㎡
- [その他の様式] 塔屋2階、各階ベランダ

出島神学校は明治10年(1877)、わが国最初のキリスト教新教の神学校として建設され、明治19年(1886)には神学校としては閉鎖された。その後、渡来宣教師の宿舎として使用され、明治26年(1893)に東側を増築し、現在の姿となる。明治43年(1910)以降は民間に譲渡し、病院として使用されていた。

昭和47年に長崎市が買収し、昭和52年から昭和55年の3か年かけ国庫補助を受けて半解体修理を行った。

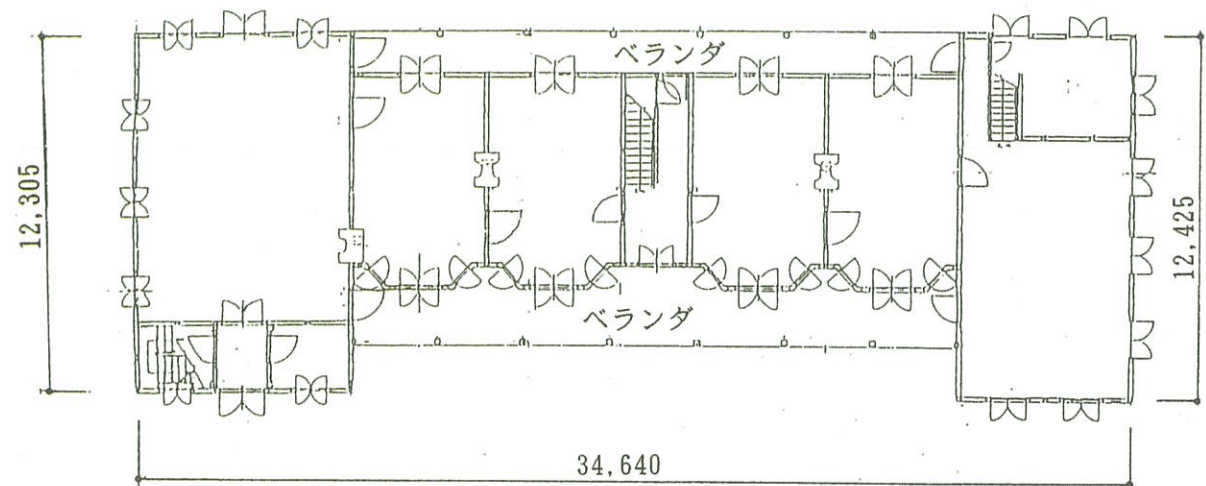
現在1階は長崎市歴史民俗資料館として公開され、2階は市の埋蔵文化財の事務室等として使用されている。

なお、神学校の隣地には、同時期に建てられた牧師館の約半分が住宅として残されている。構造は、木造2階建、寄棟造、棧瓦葺である。



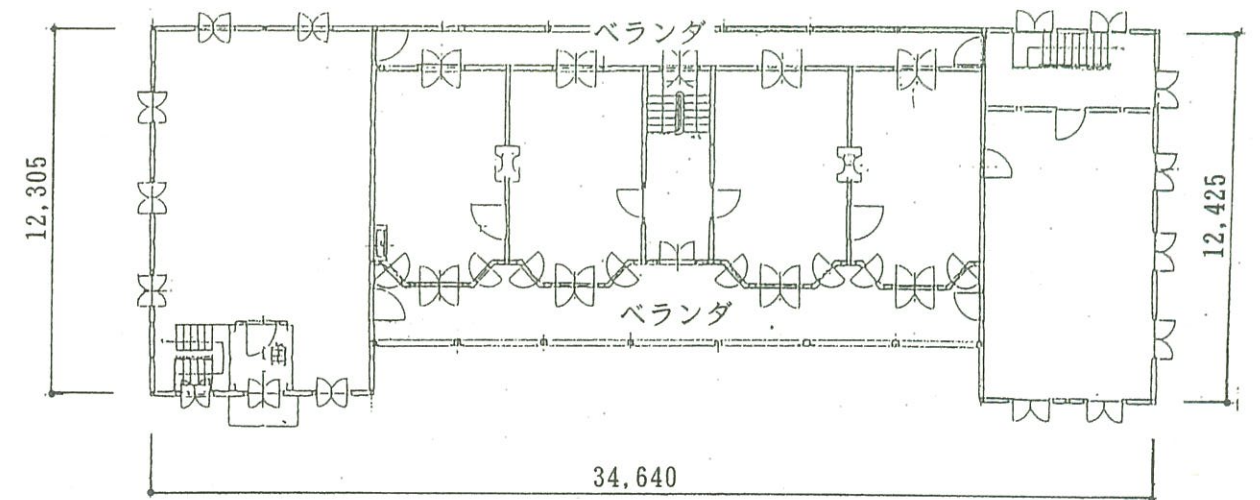
明治期建物等位置図

～旧出島神学校～



1階平面図

S = 1/250



2階平面図



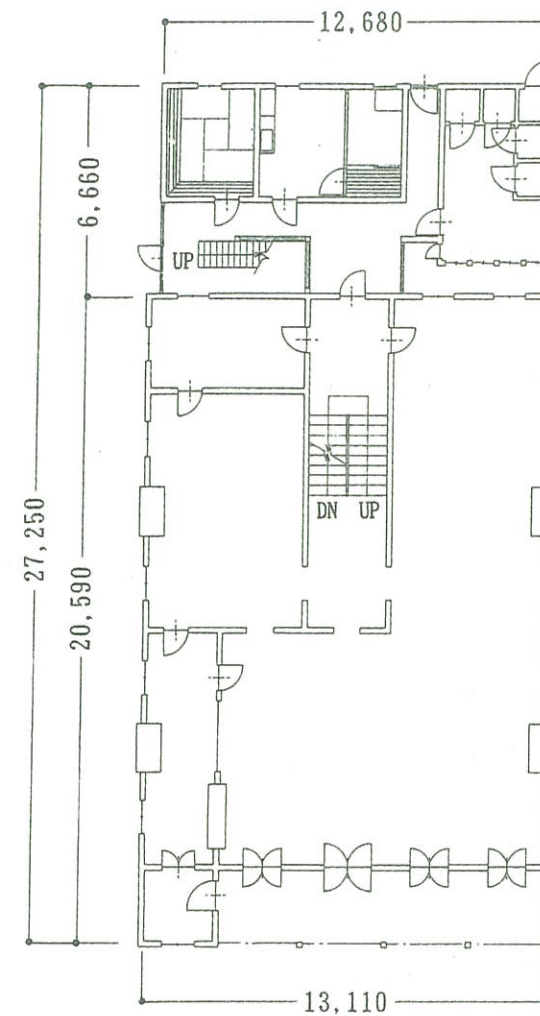
～旧内外倶楽部～

- [所在地] 長崎市出島町7番
- [建築年代] 明治36年(1903)
- [建築概要] 木造2階建、寄棟造、粘土掛棧瓦葺
- [延床面積] 685.74m<sup>2</sup>
- [その他の様式] 各階南側正面にベランダ

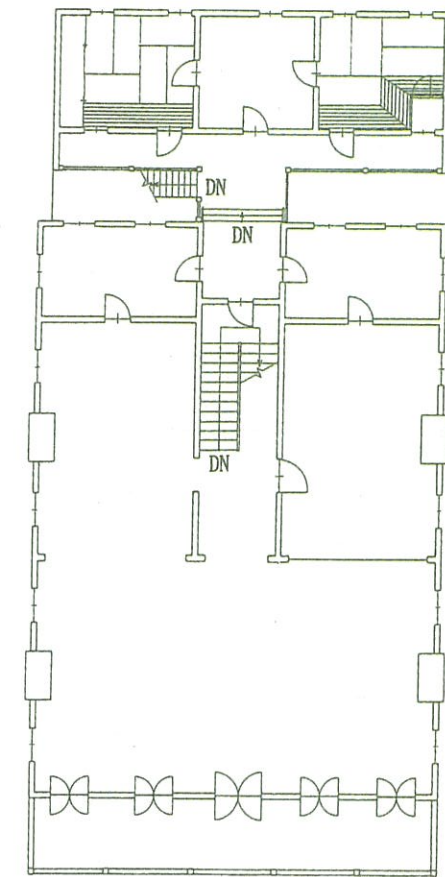
万延元年(1860)第1次居留地造成以来、多数の諸外国人の渡来によって居留地社会が形成され、居留地内の外国人間の親睦をはかるため、慶応3年(1867)建築の「長崎倶楽部」があった。

しかし、日本人と外国人の親交の場がなかったので、明治32年(1899)条約改正により居留地制撤廃時に倉場富三郎、横山寅一郎、荘田平五郎等の発起により内外人の社交場として長崎内外倶楽部が設立され、明治36年(1903)F.リンガー氏によって、現在地に新築移転した。この建物は日本人と外国人の交流の場とした倶楽部であるだけに本格的な英国式明治洋風建築の特徴をよく表わし、明治、大正、昭和の3代にわたり長崎はもとより内外の知名士会員によって華やかな運営がなされたが、戦後連合軍に接収され、その後返還を受けたが、民間に移り倉庫として使用されていた。

長崎市は昭和43年に買収し、この建物の再生を図るため、昭和48年度、市の単独事業として全面修復を行い、昭和49年度から長崎市出島資料館として使用されているが、築後90年余を経過しており、現在、老朽化が進み大規模な修理の時期に来ている。



1階平面図



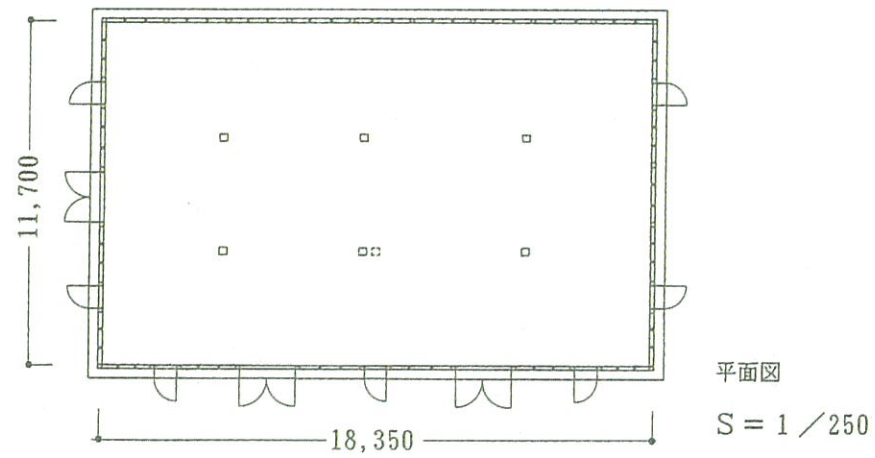
2階平面図 S=1/250



～新石倉～

- [ 所在地 ] 長崎市出島町18番2
- [ 建築概要 ] 石造平家建、寄棟造、粘土掛棧瓦葺
- [ 延床面積 ] 214.69m<sup>2</sup>

新石倉は、慶応元年(1865)に建てられた石倉を復元したもので、安政6年(1859)に出島商館が閉鎖した後の建物である。長崎市は昭和42年に買収し、昭和51年に一部旧材を使い復元した。現在は来訪者の休憩施設として、一部出土遺物の展示品を公開している。

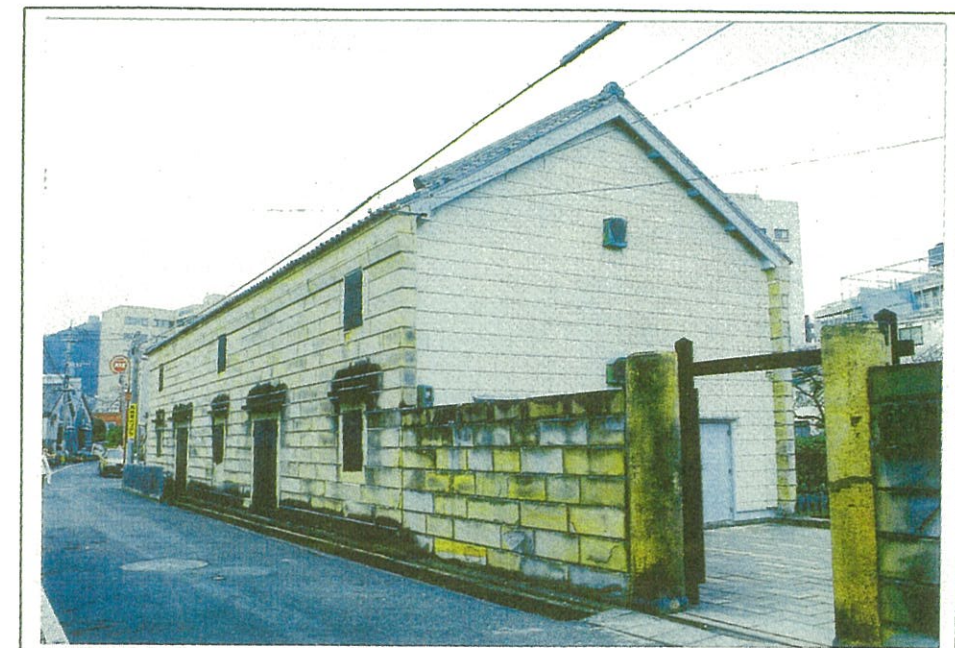
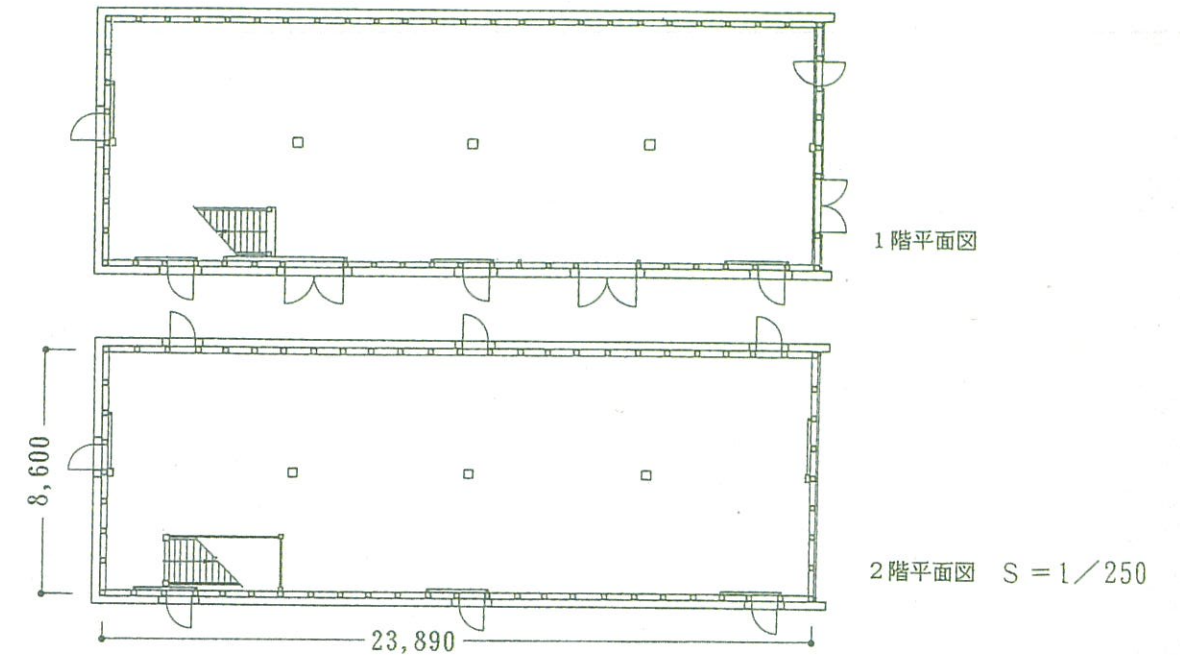


～旧石倉～

- [ 所在地 ] 長崎市出島町19番,20番
- [ 建築概要 ] 石造2階建、寄棟及び切妻造、粘土掛棧瓦葺
- [ 延床面積 ] 365.28m<sup>2</sup>

旧石倉は安政の開国後の石造倉庫で、第2次大戦後荒廃して倒壊寸前にあったものを長崎市が買収し、昭和31年に古写真をもとに礎石の上に桁行長さの半分を復元した。

現在は市の文化財関係の収蔵庫として利用されている。



～出島橋～

〔構造〕 プラットトラス形式鉄橋

〔規模〕 橋長 36.7m 橋幅 5.5m

出島橋は明治23年（1890）に架設された『新川口橋』を明治43年（1910）に現位置に移築し『出島橋』としたものである。橋梁の形式はピン接合のプラットトラスで、その鉄材は米国から輸入したものである。これはわが国の初期の近代橋梁形式であり、貴重な遺構といえる。

この橋は、市道出島町江戸町1号線にあり、出島史跡の東端から中島川を通り、長崎県庁裏門方向に架かっている。

現在わが国で供用されているこの種の道路橋としては最古のものと考えられる。現在は車種制限をしているものの、橋に接して信号があり、常に満載荷重が作用しているため耐力度の問題も生じている。



### (3) 保存計画

旧出島神学校、旧内外倶楽部、新石倉、旧石倉及び出島橋について以下のように検討し、保存を図る。

#### ～旧出島神学校～

出島神学校は昭和52～55年にかけて半解体修理が行われ、歴史民俗資料館として活用され今日に至っている。歴史民俗資料館から出島史料館としての充実を図るべく活用するためには、部分的な補修および構造補強、防災設備の充実を行う必要がある。

なお、牧師館については公有化後、調査の上保存活用を検討する。

#### ～旧内外倶楽部～

旧内外倶楽部は、老朽化が著しいため2階部分を閉鎖し平成7年3月に『建物の耐力調査』を行った。

その結果、基礎石、床の不同沈下は見られないが、軸組材には一部白蟻の被害が認められた。小屋組は洋小屋（クイーンポストトラス）となっており、陸梁中央で、垂下が生じ、梁材の折損や継手、仕口の緩みが認められた。このため、半解体修理程度の工事をするとともに構造補強の必要がある。同時に、戦後民間に払い下げられ使用されている間に取り除かれた間仕切壁などの復元を行い、明治36年に建てられた当時の内部仕様に復元する。

#### ～新石倉・旧石倉～

新石倉は出島のガイドンス施設とする。

旧石倉は、出島完全復元模型、発掘調査による出土遺物を中心として展示する。また、出島復元の広報コーナーを設置し、復元計画の早期実現へ向けて市民の意識高揚を図る。

#### ～出島橋～

出島橋は出島東面の境界線上に位置しているため、出島の顕在化を実施するにあたっては移設保存を前提とした検討が必要となる。

なお、移設する際には、この橋が歴史的価値と同時に景観上、デザイン上も優れた構造物であること、新川口橋の時代から出島周辺に位置していることを考慮し、今後の活用計画を検討する。また、事前に専門家による耐力度調査を行い、移設工法を検討する。

## 6. 展示活用計画

### (1) 展示活用計画の方針

#### 1) 展示の考え方

出島は1641年、和蘭商館が平戸から長崎出島に移転され、安政の開国までの約 220年間貿易のみならず、西洋の学術・文化導入の窓口として大きな役割を果たし、我が国の開国、近代化に大きく貢献した、歴史上極めて重要な史跡である。

展示の基本的な考え方としては、出島和蘭商館の町並みを復元し、歴史的意義を分かり易く表現するため、幅広く系統的にかつ躍動的に展開し市民が誇りに思い、来訪者が感動する「出島の魅力」をつくり上げ伝承していくことに努める。

更に整備を進め、市民をはじめ来訪者に広く公開し、長崎市の歴史的、文化的環境の構成要素として機能させていく。

建造物の復元はそれ自体が広い意味では展示物であり、復元という行為によって、19世紀初頭の出島を体験的に学ぶことができる。この外にも最新の展示手法を用いながら通史的な流れやその背景を明確にしていく。

展示は建物の復元とともに出島整備の核であり、出島の歴史的情報と出島の魅力を表現するため、学習機能を中心として、出島の完全復元への啓蒙・啓発や文化交流などの役割を持つものとする。

#### 2) 活用の考え方

出島は史跡であるため、新たに資料館や来訪者への案内施設、便益施設を建築することができない。

そのため、短中期的には、出島史跡内に現存する明治期等の建物4棟を資料館、出島の総合案内、学術的に検討のされた出島復元模型の展示や、最新映像機器を使った展示施設として活用する。

建物が復元され、往時の町並みが形成されてくると、それ自体が野外博物館的な展示物といえるが、往時の出島の生活や様子をより実体感できるように復元建物の規模、構造、用途によっては展示施設として活用し、歴史的文化的空間の継承と再生を構築する。

- |         |  |
|---------|--|
| 学 習 機 能 | 『学習施設機能』としての役割を果たすとともに出島に関する資料の収集に努める。<br>(復元建物本体、資料館、博物館)                   |
| 啓蒙・啓発機能 | 『歴史的文化遺産』としての役割を果たすとともに『復元速度』を早めるための啓蒙・啓発を行う。<br>(発掘調査及び整備情報の公開、完全復元模型、イベント) |
| 文化交流機能  | 物、人の両面から『国際交流の場』を作る。<br>(国際交流、フリーマーケット、講演会、文化サークル)                           |

(2) 整備の手順

出島の建物復元は土地の公有化や各種調査を前提としており、復元建物によって形成される往時の町並みが完成するには期間を要するため、まず既存の明治期等建物における展示を行う。

この4棟での展示は、出島の復元過程においてプロジェクト全体を見せながら出島の完全復元及び周辺環境の整備に向けて市民の意識の高揚を図るとともに、来訪者が出島の歴史を学び、出島を楽しむことを目的とした、『出島の全体像を理解させる場所』としても有効活用し、最も効果的と考えられるビジュアルな展示、完全復元模型や最新技術の映像等を使って展開する。

次に復元建物では、当時にふさわしい家具調度品や絵画等を備える。生活の様子や行事については、楽しくわかり易く見せるなど、『原寸大の出島を体験できる場所』として整備していく。また、復元の進捗状況に合わせて、庭園、街灯、路面の仕上、説明板等の整備も図っていく。

短中期の最終段階では、建物も復元し往時の町並みも形成されてくると、フィールドミュージアムとしての舞台が整ってくるので、往時の生活様子の展示、市民の憩いの場、歴史散策・文化活動の場としての展開が可能となってくる。

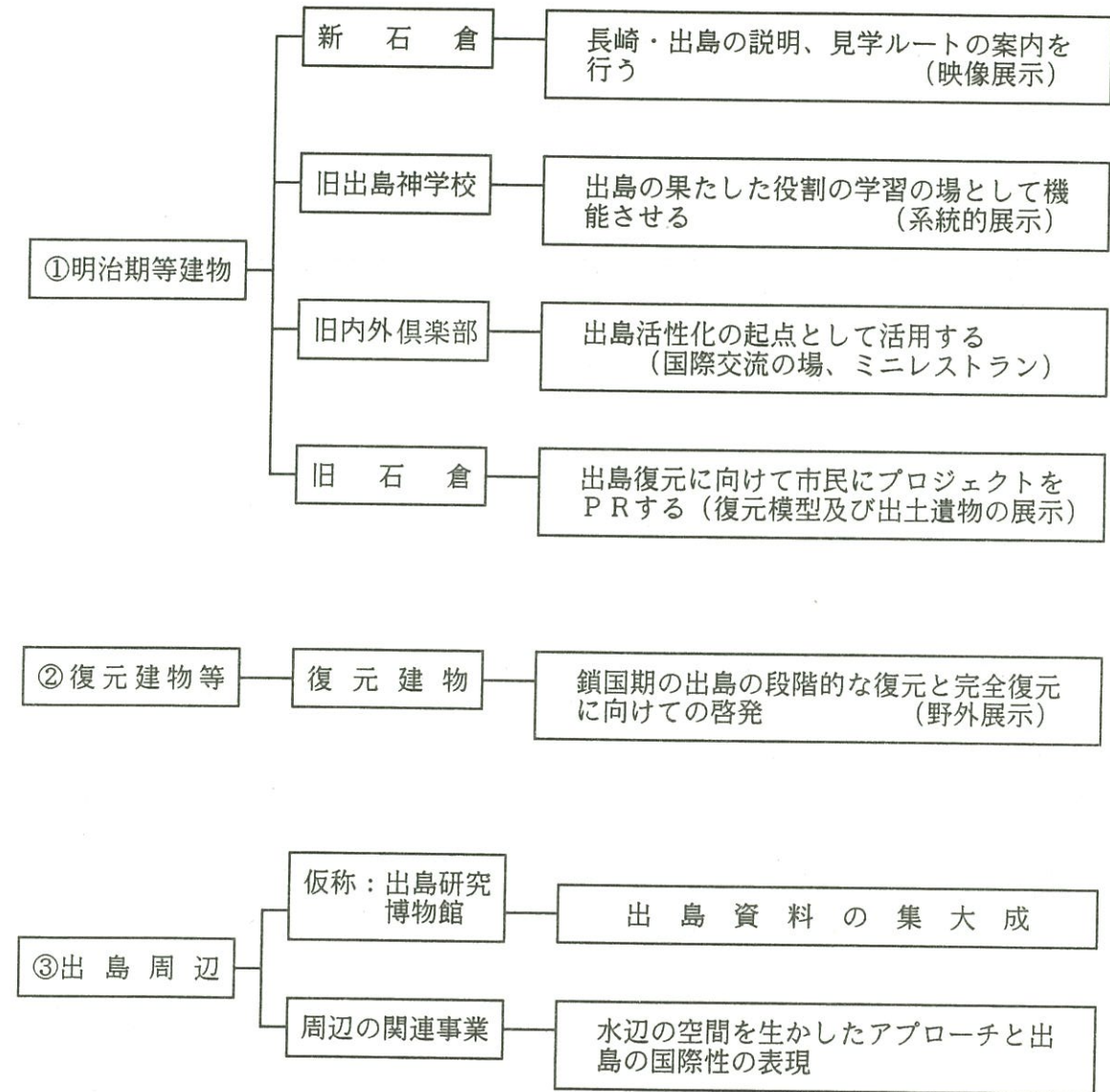
生活の様子を表現するためには、「衣」では往時の商館員・地役人・通詞の衣装の展示やその衣装を着て実際に出島内を歩き、「食」ではカピタン部屋において、当時のオランダ料理を再現して来訪者にも提供し、「住」では当時の家具調度品の展示を行い、往時の生活を体感できるようにしていく。

更には、阿蘭陀冬至や江戸参府の情景等を取り入れたイベントも行う。

長期的には、日本の近代化に貢献した学術・文化・情報の伝播なども含めて体系的・総合的に集大成させた出島研究博物館を周辺地に建設する必要がある。

また、市内の歴史的文化施設である二十六聖人殉教資料館、シーボルト記念館、グラバ一園、中国歴史博物館、古写真館などと有機的連携をもたせ、その他の博物館、歴史資料館とも情報交換が行えるよう、ネットワーク化を図る。更には、出島の国際性と貿易拠点という顔を現代に生かし、海と水での空間を利用した出島へのアプローチや周辺の土地利用との連係を図っていく。

～展示活用の整備手順図～



### (3) 明治期等建物の展示活用計画

現在、出島には、新石倉、旧出島神学校、旧内外倶楽部、旧石倉の4棟の明治期等の建物が存在している。これらの明治期等の建物は、プロジェクトの全体を見せながら、出島の完全復元及び周辺環境の整備に向けて市民の意識の高揚をはかるとともに、来訪者が出島の歴史を学び、楽しむことを目的とした展示、ガイダンス等の空間として位置付け、短中期整備の段階で有効活用する。

#### ～新石倉～

新石倉は、出島来訪者が最初に立ち寄りとなるので映像による出島の総合案内施設とし、学術性よりもアミューズメント性を高めた施設とする。

#### ～旧出島神学校～

旧出島神学校は、展示に必要な諸設備の充実を図り、全館を出島史料館として活用する。

ここでは、神学校の小割の部屋を活用し、各部屋ごとに異なったテーマを取り上げるなど系統的、多角的に出島の歴史を展示する。

#### ～旧内外倶楽部～

半解体修理して復元した旧内外倶楽部は、本来の機能である社交場として活用する。例えば、1階はミニバーを併せたサロンとし、2階はミニレストランと娯楽室（休憩室）とする。また、各部屋には当時の写真等を展示するなど、内外倶楽部として使用されていた時代の情景をここで紹介する。

#### ～旧石倉～

旧石倉の1階では、建物復元へ向けての建築史的検討を十分行った出島の完全復元模型をメインとする。

2階では、出島復元整備コーナーを設置し、出島史跡内の発掘調査による出土遺物の展示やその調査報告書や出島関連記事のスクラップ等の閲覧コーナーを設ける。

#### 出島史料館における系統的展示例

- ・ 出島誕生の背景
  - 御朱印船貿易とキリスト教の布教と禁教
- ・ ポルトガル時代の出島
  - ポルトガル商館、島原の乱とポルトガル貿易の終焉
- ・ 鎖国と出島オランダ商館の成立
  - 平戸時代のオランダ商館、平戸から長崎出島へ、オランダ商館長と風説書
- ・ 出島の地役人
  - 出島乙名、出島組頭、阿蘭陀通詞の組織及び職制（世襲性）
- ・ 出島の交易
  - オランダ連合東印度会社、長崎奉行と長崎会所、主な輸入品・輸出品
- ・ 出島の生活
  - 衣食住、娯楽、遊女、主な行事（阿蘭陀正月・冬至）
- ・ 江戸参府
  - 長崎から江戸までの行程、幕府献上品、江戸参府紀行
- ・ 出島から入ったヨーロッパの情報・学問
  - 医学、天文学、航海術、砲術、蘭学ブームの到来と鳴滝塾
- ・ 出島で起こった事件
  - 犯科帳から見た抜け荷事件、フェートン号事件、シーボルト事件
- ・ 美術、工芸品の流出入
  - 紅毛画（ガラス絵、眼鏡絵）の流行、出島出入り絵師『川原慶賀』
- ・ 日本の近代化と出島
  - 開国に伴う情報収集、海軍伝習所・医学伝習所の設立
- ・ 幕末から明治への出島
  - 外国人居留地としての出島、その後の出島の変貌
- ・ 歴史上の人物往来
  - （思想）林子平・勝海舟・吉田松陰・木戸孝允・井上馨・坂本龍馬・桂小五郎・榎本武揚・大隈重信
  - （医学・蘭学）貝原益軒・野呂元丈・青木昆陽・緒方洪庵・大槻玄沢
  - （文学）頼山陽・福沢諭吉 （画家）司馬江漢 （地学）間宮林蔵・伊能忠敬
  - （理学）平賀源内 （経済）岩崎弥太郎 （俳人）小林一茶

#### (4) 復元建物の展示活用計画

建物の復元は、明治期等建物における展示では表現できなかった『出島の町並みや建物のスケール感』を来訪者に実体験させることが可能となる。更に復元建物の展示により、来訪者は、当時の人々の仕事や遊び、西欧文化などの生活全般にわたってよりリアルに知ることが可能となる。

復元建物は『居住・管理建物』『蔵』『番所』『門』『小屋』で構成され、建物の用途や、町並み構成要素である各復元建物の特徴を生かし、建物規模に応じた展示内容を選定する。

『居住・管理建物』と『蔵』は建物規模が比較的大きく、建物名称からもその使用目的が明確であり、建物にちなんだ展示が可能であるが、『番所』『門』『小屋』などは規模、構造的にも展示にはなじまず、一部を管理やサービスなどの運営施設として活用する。

蘭人用建物は、ガラス格子や出窓、手摺子、内装、シャンデリア、家具・調度品等にその特徴がある。そこで、この建物では、主としてカピタンや商館員の生活様式を再現して来訪者の実体験のスペースとする。また、その空間を利用し、国際交流の場を設ける。

日本人用建物は、出島に出入りした人々の仕事の場であったことから、通詞や検使などの仕事の様子や作品を紹介する。

基本的には19世紀初頭の家具、調度品等を配し、情景展示を主として、一部に映像を用いる。

蔵は、間仕切りのない密閉された空間が確保できることから、建物本来の用途や収蔵品に応じた映像展示を行い、蔵によっては発掘調査による出土遺物等の展示を行う。

門は出島の出入口にあたり、特に表門は、出島橋復元後のメインアプローチとなるところであるため、入場案内等を行う。

#### 短中期計画ステップ1

ここで復元するゾーンには、居住・管理建物6棟（A:1番船船頭部屋 B:筆者部屋、筆者頭部屋、料理部屋、ヘトル部屋、カピタン部屋、乙名部屋）と蔵3棟、水門1棟、番所1棟が建つ。

この建物の中には、カピタン部屋などの主要な建物が多く、建物本体と家具・調度品等により、当時の生活や貿易を表現する学習機能を主とした展示を行う。

#### 短中期計画ステップ2

この段階では、ステップ1の棟に加え、居住・管理建物4棟（A:筆者部屋 B:筆者部屋、乙名詰所、出島町人部屋、組頭部屋）、蔵4棟、番所1棟の中・小規模の建物9棟が建つ。ここでは居住・管理建物で出島における地役人の仕事の様子を表現する。また、町並み形成の進展に併せ、路面の仕上げや街灯、説明板等の整備を行い、野外展示の充実を図る。

蔵はステップ1と同様に貿易品の展示を行い、一部を便益施設として活用する。なおイベント時には、小ホールやギャラリーとして蔵を使用することも考えられる。

#### 短中期ステップ3

ステップ3では、居住・管理建物3棟（病室、カピタン別荘、食堂付賄所）と蔵2棟が建つ。ここでは、短中期計画の最終目標であると同時に、長期計画の早期実現へ向けての意識高揚を図る。

# 復元建物のステップ

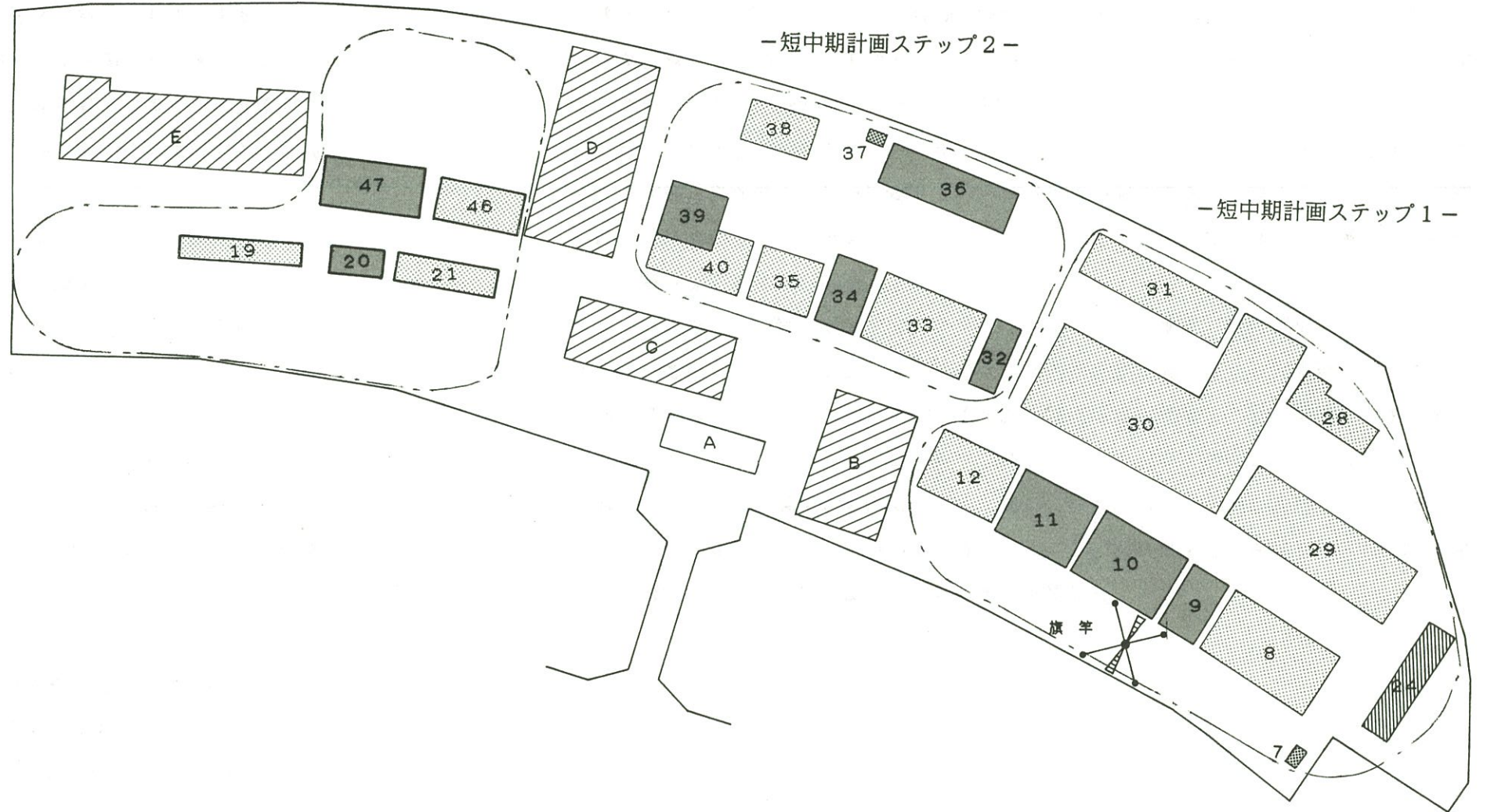
短中期計画ステップ1 (11棟)

番号	名称	展示活用例
8	A:一番船 船頭部屋 B:筆者部屋	建物・家具・調度品の展示
12	筆者頭部屋	
28	料理部屋	
29	ヘトル部屋	
30	カピタン部屋	
31	乙名部屋	商館員の生活の様子
9	1番蔵	建物の公開 貿易品の展示
10	2番蔵	
11	3番蔵	
7	15人番所	建物の公開
24	水門	建物の公開
	旗竿	出島のシンボル

短中期計画ステップ2 (9棟)

番号	名称	展示活用例
33	A:筆者部屋 B:筆者部屋	建物の公開
35	乙名詰所	
38	出島町人部屋	
40	組頭部屋	地役人の仕事の様子
32	16番蔵	建物の公開 便益施設 小ホール・ ギャラリー
34	14番蔵	
36	15番蔵	
39	9番蔵	
37	番所	倉庫

-短中期計画ステップ3-



短中期計画ステップ3 (5棟)

番号	名称	展示活用例
19	食堂付賄所	便益施設
21	病室	建物の公開
46	カピタン別荘	
20	御朱印書物蔵	出土遺物展示
47	7番蔵	

明治期等建物リスト

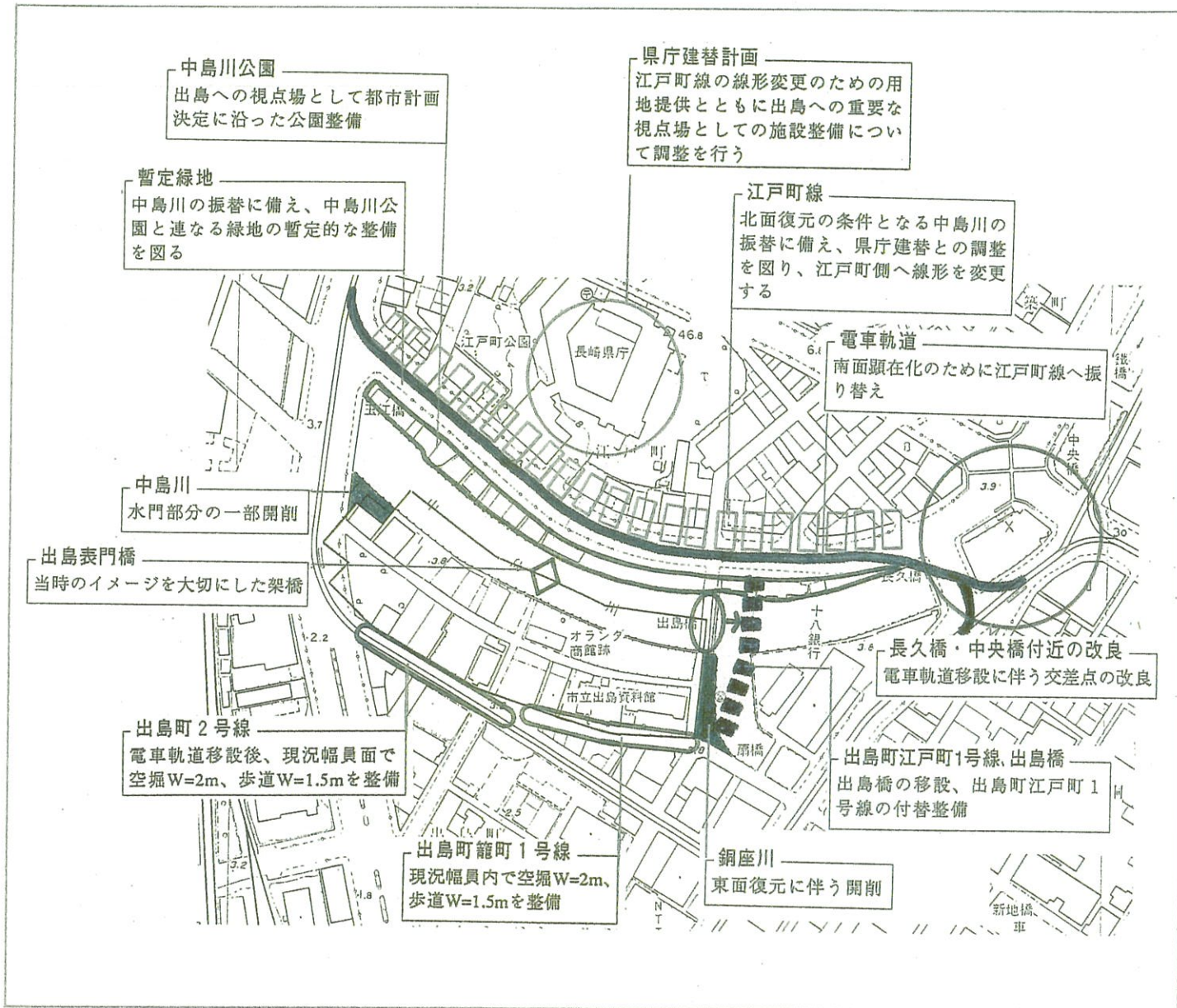
記号	名称	展示活用例
A	表門	入場案内
B	新石倉	総合案内・映像展示
C	旧石倉	模型展示
D	旧内外倶楽部	社交場
E	旧出島神学校	出島史料館

\* 表門は復元建物

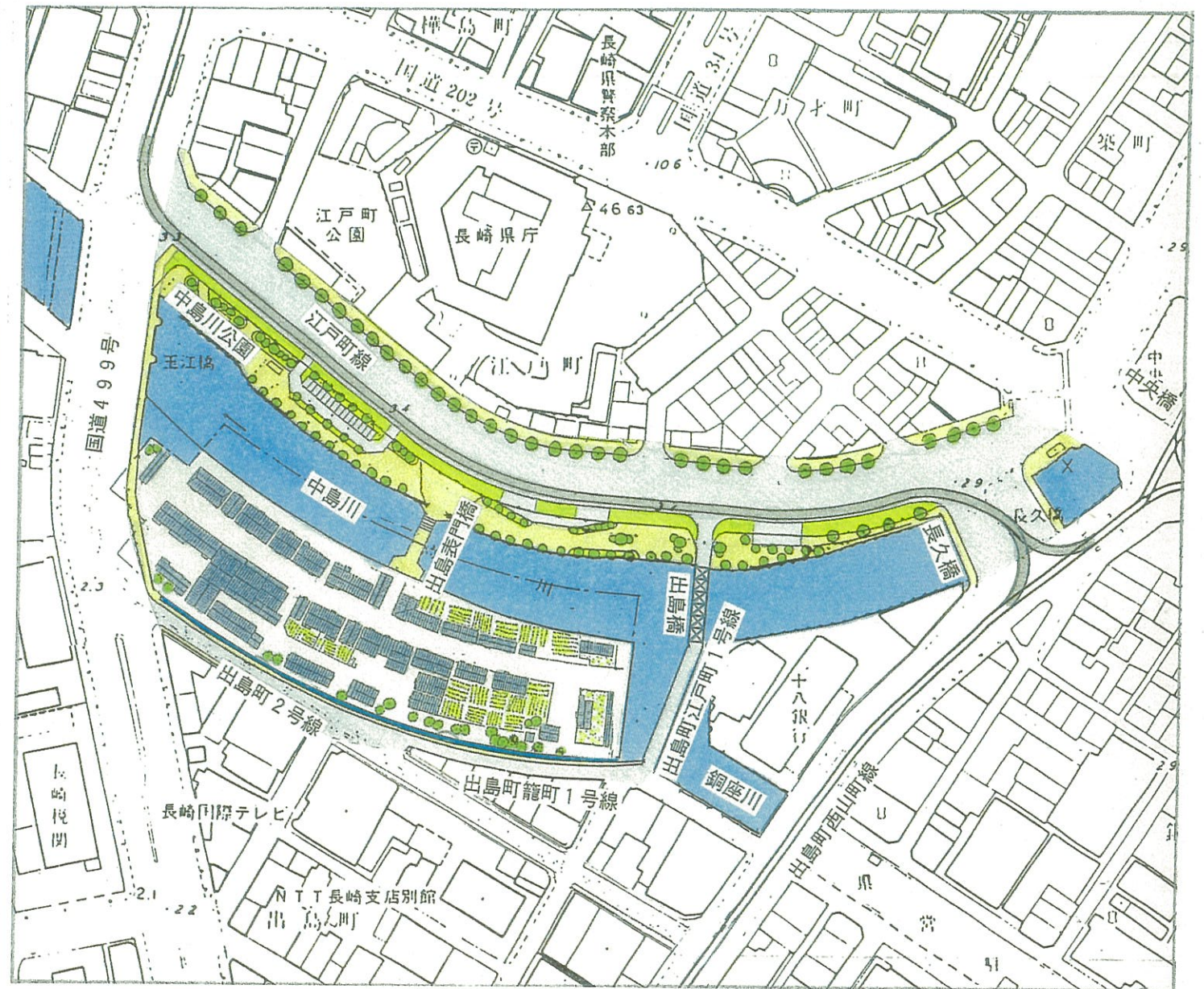
2) 整備内容

出島史跡地とその周辺において、先の整備方針に沿った出島顕在化のために必要な具体的な整備内容と計画図は次のとおりである。

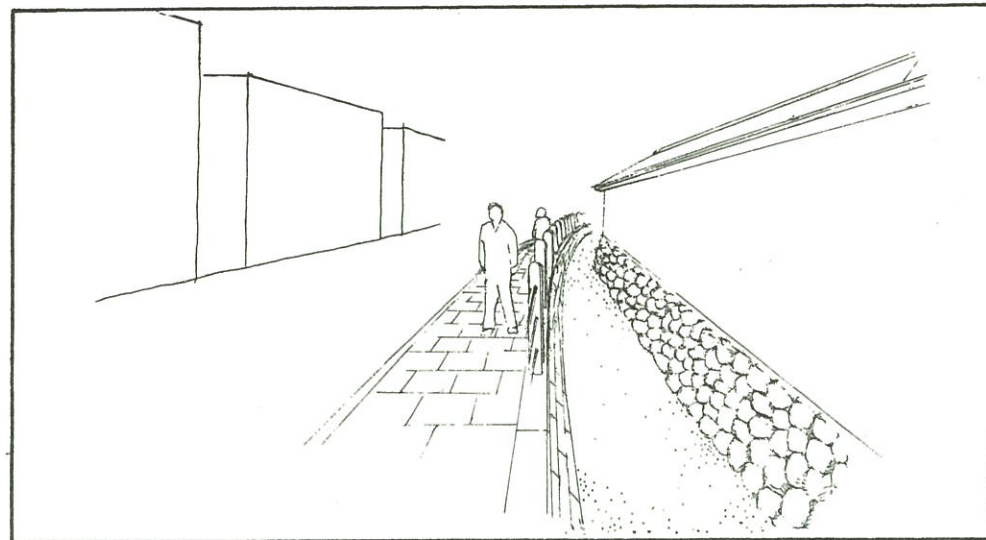
□ 出島顕在化整備方針図



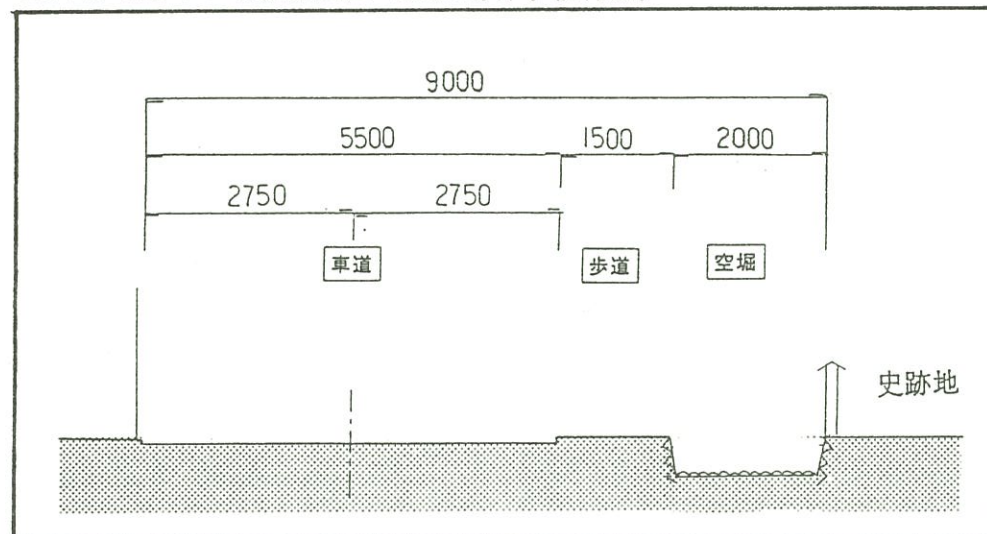
□ 出島の顕在化計画図



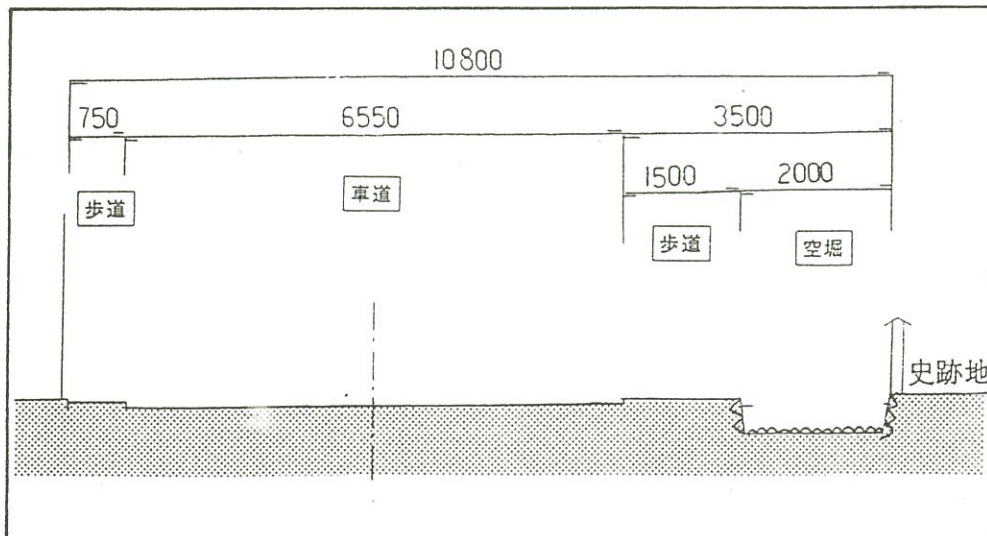
■出島町籠町1号線、出島町2号線整備（南面掘）イメージ図



■出島町籠町1号線断面図（旧出島神学校付近）



■出島町2号線断面図（出島パーキング付近）



### 3) 整備プログラム

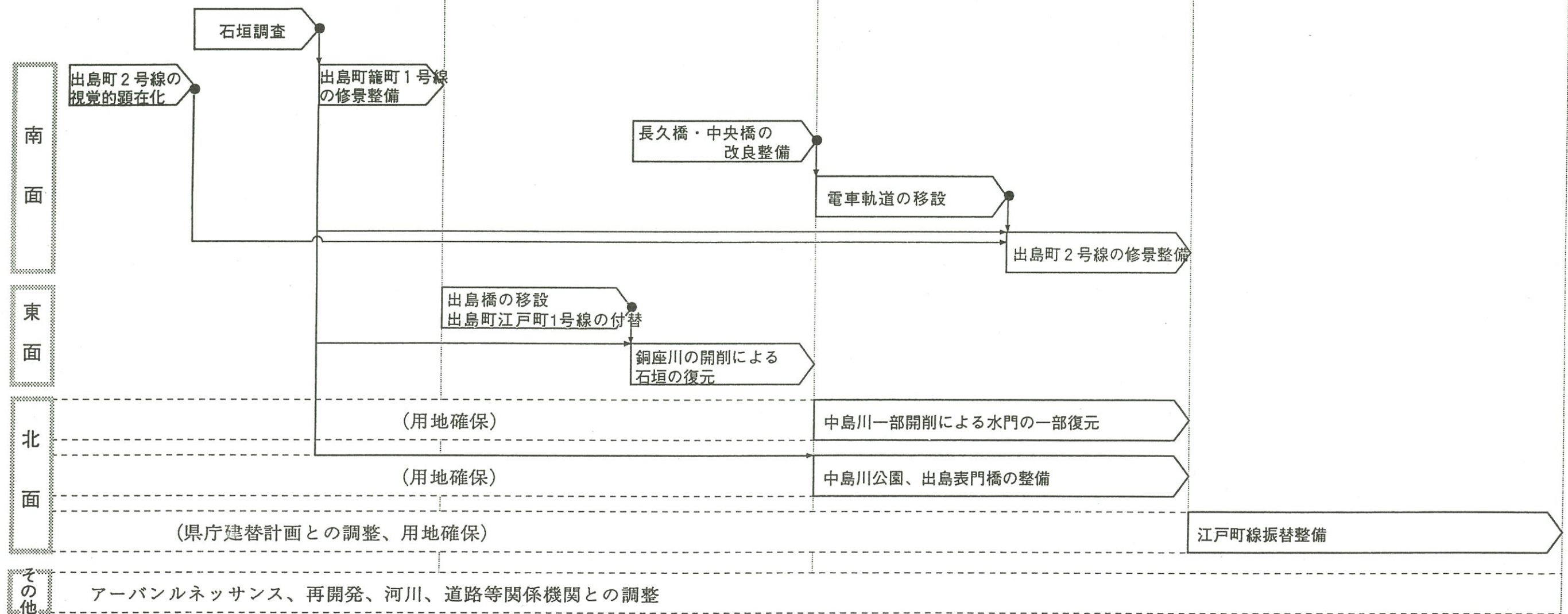
整備プログラムを作成するにあたり、整備内容に示された顕在化計画に沿って短中期における復元整備計画を以下の事項に配慮して立案していく。

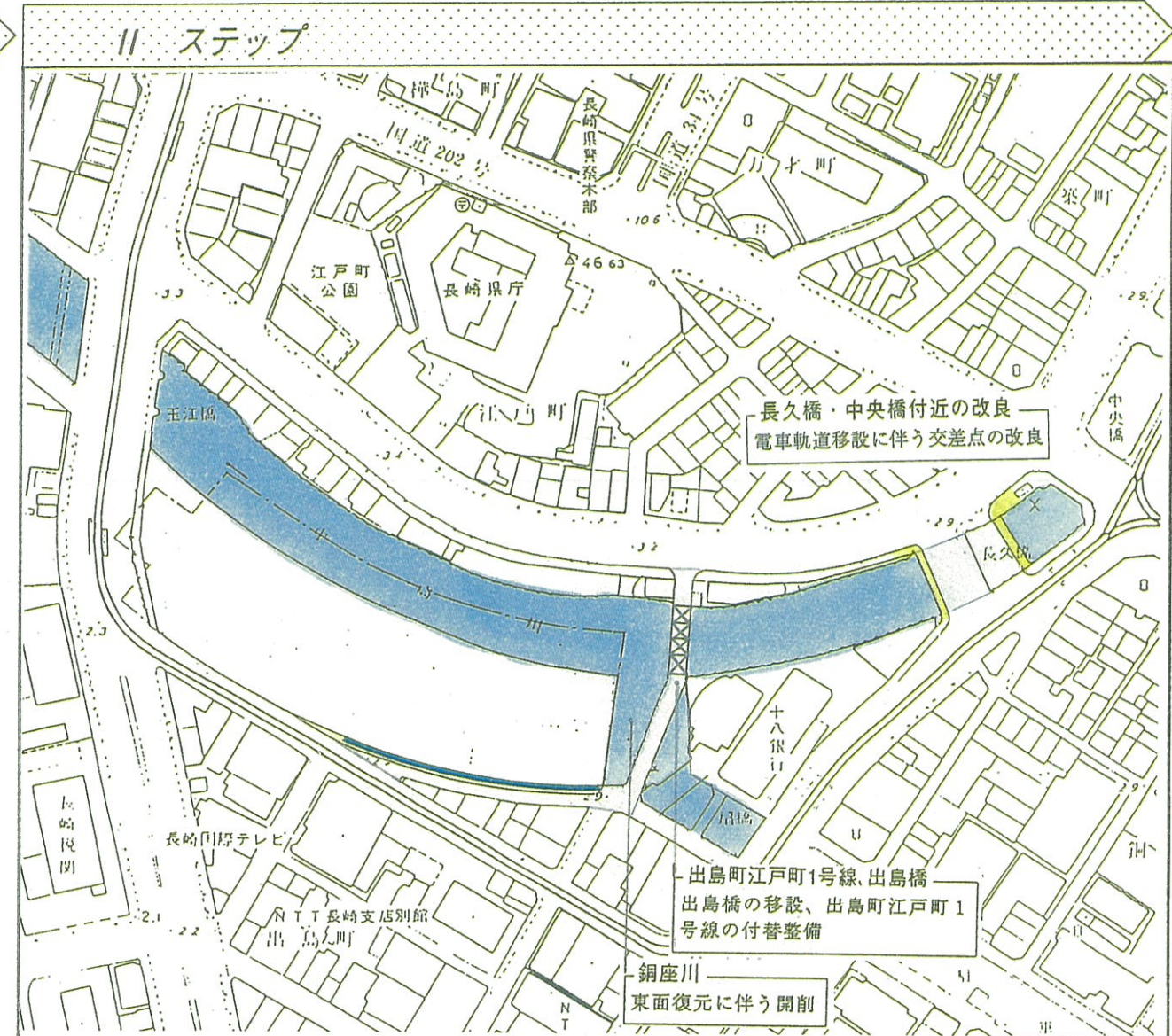
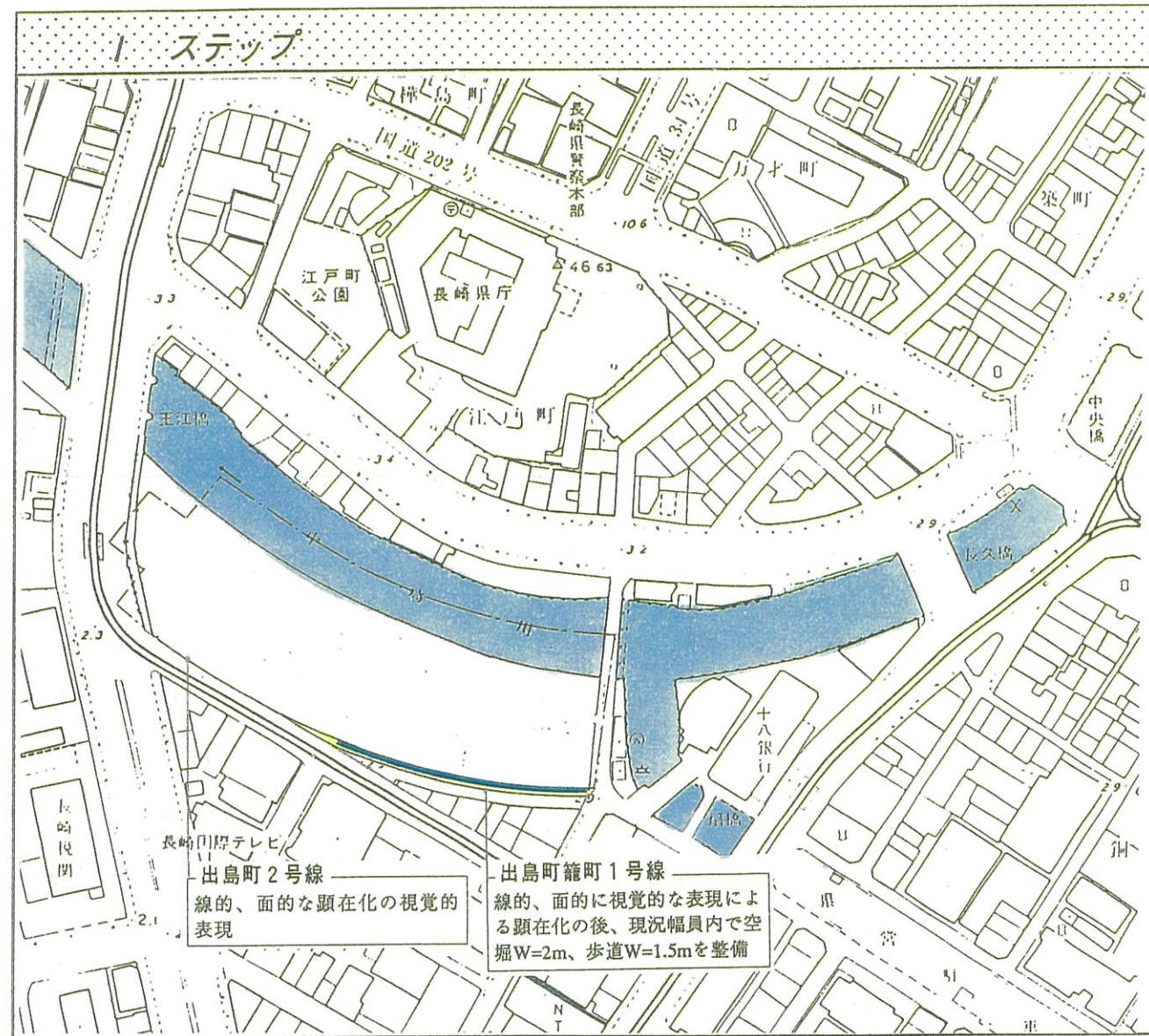
- ・復元整備を内外にアピールし、完全復元を目指した今後の事業の起爆剤となるよう、短期的には復元の前提となる史跡地内の公有地化や史跡調査を含めた公共空間内の整備を主体に早期の実現が可能となるように進めていく。
- ・復元整備の第1段階として、まず線的または面的に四面の視覚的な表現の工夫によって史跡地周辺の顕在化を図っていく。
- ・県庁建替等の関係機関との計画の調整や用地買収等を伴いある程度期間を要する整備については、まず整備の推進にあたっての条件を整えつつ、その進捗をみながら整備を行っていく。
- ・完全復元、四面顕在化の実現に向けて、周辺プロジェクトの動向に対応しながら関係機関との調整を早期に進めていく。

整備プログラムは、多岐にわたる整備の関連性を考慮しながら、概ね15年を目処に各ステップ5年程度として段階的に整備を進めていく。

●整備プログラム

I ステップ	II ステップ	III ステップ	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・南面の顕在化</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東面の復元、顕在化</li> <li>・電車軌道移設に向けた基盤整備</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・電車軌道移設による南面顕在化</li> <li>・北面の一部復元</li> <li>・出島表門橋、対岸公園の修景整備</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長期復元プランへ連動する江戸町線の振替整備</li> </ul>

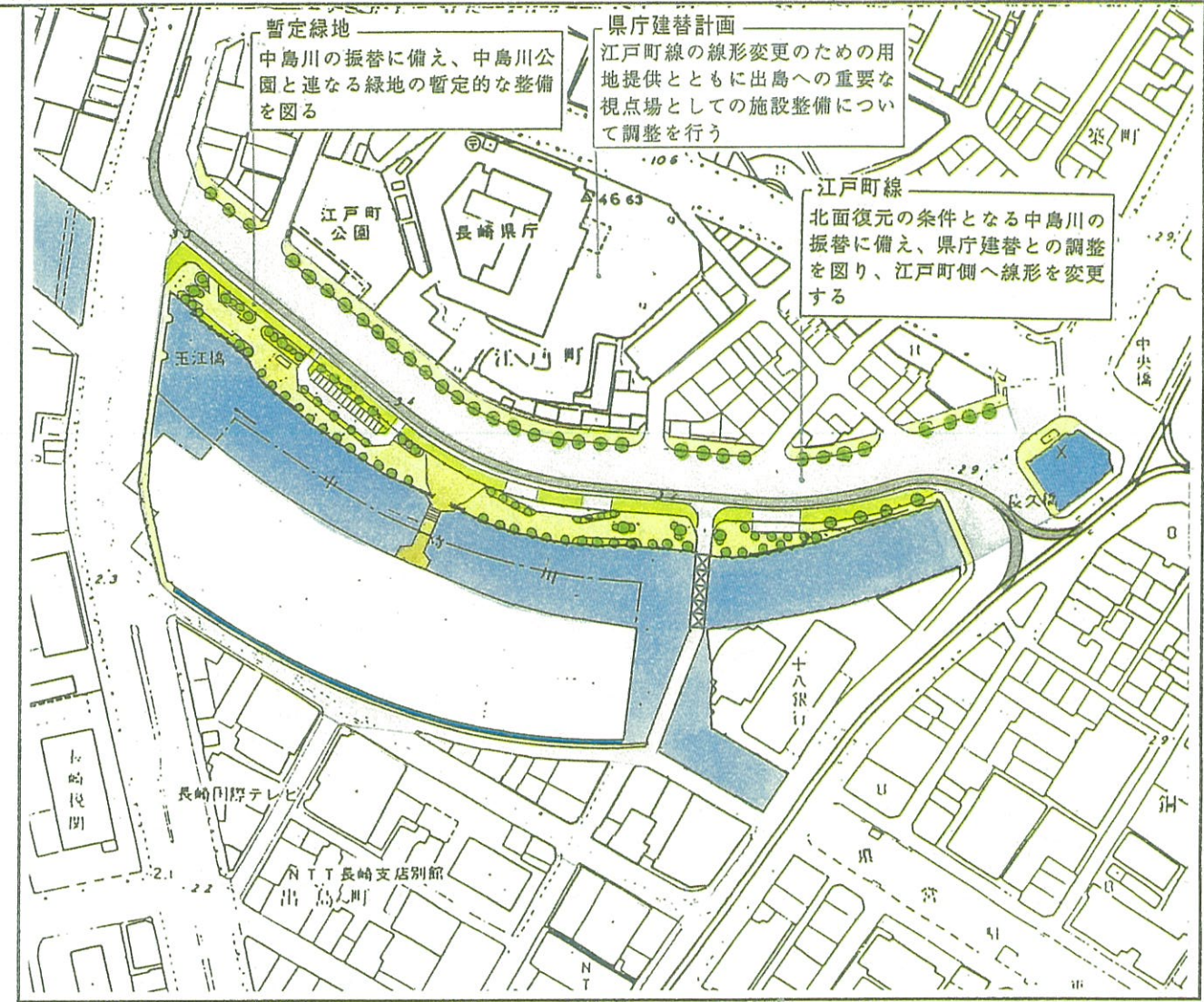
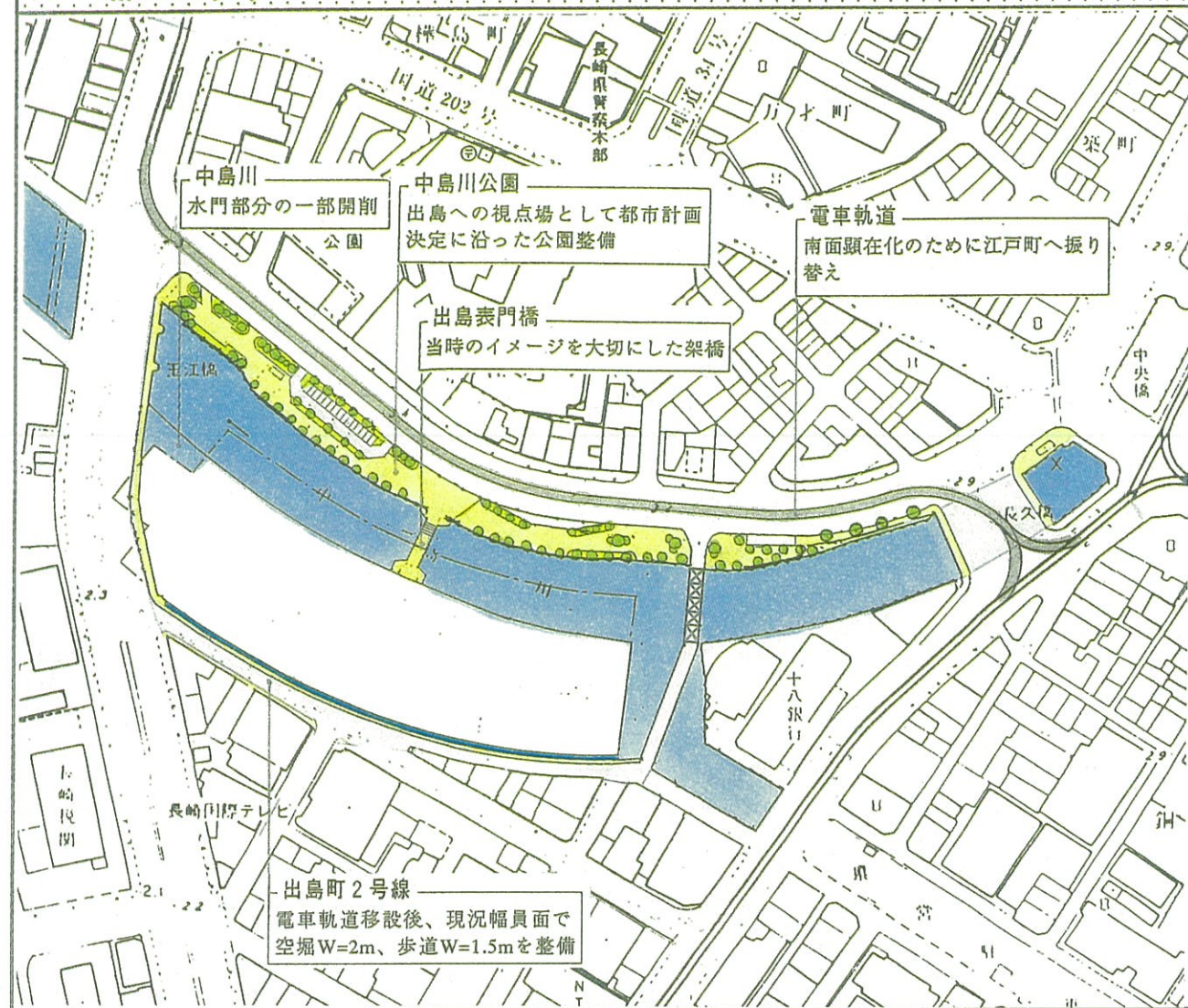




整備対象	実現化に向けての課題
出島町2号線の視覚的顕在化	・ 史跡地の範囲を示す現在の鉄による点的表現から、線的、面的な視覚的顕在化の整備検討（練塀と道路面での線的、面的表示）
出島町籠町1号線	・ 南面石垣一部の顕在化に伴い、その石垣破損状況にのった修理範囲、処理方法の検討。 （水面の確保については潮位の関係や銅座川の水質上の問題があり、困難と考えられるため空堀とする。）

整備対象	実現化に向けての課題
出島橋	・ 出島橋を将来とも保存するための移設工法及び移設後の車輛通行に供する構造の調査・検討。
出島町江戸町1号線	・ 出島橋と結合する市道の付け替えと新たな橋梁の線形、構造等の検討。 ・ ポンプ場、出島公民館の移設の検討。
銅座川	・ 東面の石垣復元に際して、河川の浸食等に対する護岸改修。
長久橋、中央橋付近の改良	・ 電車軌道の移設を前提とした交差点における交通処理に対応する形態、規模等の設定。

### III ステップ



整備対象	実現化に向けての課題
電車軌道	<ul style="list-style-type: none"> <li>江戸町線の振替に対応した軌道線形、電停の位置の設定</li> <li>移設に対応した交通体系の検討。</li> </ul>
出島町2号線	<ul style="list-style-type: none"> <li>南面石垣の破損状況にのっとった修理範囲、修理方法の検討。</li> <li>居留地時代の付け足し部分の改変について合意形成。</li> </ul>
中島川公園	<ul style="list-style-type: none"> <li>長期的な完全復元における中島川の振替に伴う移設を前提とした整備レベルの検討。</li> </ul>
出島表門橋	<ul style="list-style-type: none"> <li>往時の橋のイメージが伝わるように状況に応じた構造、デザインの検討。</li> </ul>
中島川	<ul style="list-style-type: none"> <li>水門の石垣復元に対して河川の浸食等に対する護岸改修。</li> </ul>

整備対象	実現化に向けての課題
江戸町線	<ul style="list-style-type: none"> <li>線形の設定、線形変更で取り込まれる民有地（県庁側）の用地確保。</li> <li>電車軌道や中島川公園との歩行者空間の連携等を踏まえた幅員構成の設定、各交差点のスムーズな交通処理の検討。</li> </ul>
県庁建替計画	<ul style="list-style-type: none"> <li>江戸町線の線形変更、視点場整備等を条件とした建替計画の実現に向けての調整。</li> </ul>

### III. 長期復元整備計画

#### 1. 長期復元整備計画の考え方

出島史跡地の顕在化は、短中期計画の段階で部分的には整備されてくるものの、北側の拡張や水門部分の顕在化など、なお往時の原形を取り戻すまでには至らない。出島の姿・形の完全復元、四面の水面による顕在化という2つの長期的目標を達成し、往時の出島のイメージをより鮮明に再現してはじめて出島の復元が完成の域に達するものといえる。

また、出島とその周辺地区では、アーバンルネッサンス構想、県庁建替、骨格となる交通体系の整備など大型プロジェクトを抱え、長崎市の都心形成にとって重要な位置にあり、出島の復元とこれらプロジェクトとの歩調を合わせた市街地の改造によってこれまでにない長崎の魅力を創造していく絶好の機会ととらえられる。

このため、出島の姿・形の完全復元、四面顕在化に向けての目標を確立し、周辺市街地と一体となって出島を核にしたまちづくり、環境形成が進められるよう、現時点での最良の方策と考えられる長期復元整備計画を明らかにしていくことが望まれる。

出島の姿・形の完全復元、四面顕在化の実現には、史跡地北面の拡張に伴う中島川の振り替え、西面水門部分の復元、顕在化に伴う国道499号の線形変更、銅座川の振り分けなど大規模な市街地の改造を伴うこととなり、その実現には事業手法、関係機関との調整、他プロジェクトや計画との整合性、財源など十分な検討を行わなければならない。また、この計画の実現までには相当長い期間を要すると思われ、この間の社会、経済情勢の変化も十分予想されることから、随時、計画の見直しを行うなど柔軟な対応が図られる整備体制をもつ必要がある。

#### 2. 長期計画の整備プログラム

短中期の顕在化計画から完全復元、四面顕在化を最終目標とする骨格構造に至るまでは、様々な事業の活用、事業相互の時間的、空間的な調整が図られることが前提となる。そのため、関係事業との調整・協議の進捗度に応じて大規模な基盤整備を行う用地確保と整備事業を随時進めていくことになる。

ここでは、四面顕在化が公共空間のスムーズな機能更新及びその用地確保をバランスよく行いながら、出島を囲むひとつひとつの面を段階的に顕在化していく基本的なプロセスを示す。

##### I ステップ：北面の復元、顕在化

短中期で整備される江戸町線の振替に連動して、中島川公園及び中島川を振替、北面の拡張復元を図る。

##### II ステップ：西面水門の復元、顕在化

アーバンルネッサンス構想との調整、用地確保等の条件を整え、国道499号の振替、西面水門の復元、顕在化を図る。

##### III ステップ：南面周辺の環境整備

銅座川の分流により、明確な水面形成を図るとともに、出島を核にした市街地環境の形成を図る。

この基本的な形成プロセスを事業調整の念頭において、今後関係機関への協力依頼や協議を行い、長期復元整備計画の実現へ向けてひとつひとつ取り組んでいくことが、この壮大な計画を実現に向けて導いていくことになる。特に、この骨格構造の実現には相当の年月と事業費が必要となり、出島とその周辺地域が共通した目標を持ち、地域住民や事業者の総意によって一体的なまちづくりとしていく取り組みが不可欠となる。

こうした出島を核にした都市改造は新たな都市環境・機能をイメージづけていく先導的公共事業を積極的に展開することからはじまり、地域住民や事業者の計画への理解と関心を深めながら、その可能性を高めていくことが肝要である。また、出島地域の将来像を地域ならではの発想で確かなものにしていく地域主体の取り組みを行っていくことが望まれる。



#### 4. 建物の復元計画

中島川の変流工事により削られた部分と国道 499号に取り込まれた部分が復元され、出島本来の形態が取り戻された段階で、出島和蘭商館の建物の中でも貴重な建物であった花園玉突場、脇荷イ之蔵、本方呂之反物蔵、検使部屋、通詞部屋などを学術的考察のもとに復元していく。

#### 5. 庭園の復元計画

建造物の復元に合わせ、庭園全体としての本来の姿であった復元を目指すこととし、庭園機能の二面性を総体的に提示していくものとする。

ケンベル、ツェンベリー、シーボルトにより出島の庭園を起点とした、日本とヨーロッパの植物の交流や植物の生体展示についても、スウェーデンのウプサラ大学、オランダのライデン大学植物園及び、ヴェルツブルグ大学、植物園等との情報交換を密にして、資料収集や研究を深めていく。

#### 6. 旧出島橋の復元計画

中島川を江戸町側へ振り替えて、19世紀初頭の出島の姿・形が復元されても30mの幅員は河川管理上縮小することはできない。

そこで、石造の出島橋の部分は短中期復元整備工事により位置、形態とも史実に基づき復元されているが、近代橋で架橋されている部分は架け替え工事が必要となる。

#### 7. 明治期建物等の取扱い

##### 基本方針

短中期整備段階においては、明治期建物等は現位置で保存し、展示施設などに活用する。長期復元整備での取扱いについては、短中期整備の中で建物の復元が進んだ時点で改めて検討する。

##### 2つの考え方

出島和蘭商館跡として時代上の統一を図り、往時の姿を完全に復元できるよう明治期の建物を他の場所へ移築保存することとし、その後19世紀初頭の建物を復元する考え方と、明治期建物の歴史的評価を重視し、鎖国期から居留地時代を経て、現代に至る史跡上の時代的複合性にも配慮して、そのまま明治期建物を存続させる考え方の2つがある。

##### 長期計画での取扱い

長期整備計画が実行されるまでにはかなり長い期間が予想される中で、これら明治期の建物の存在が最終的に復元整備効果の妨げとなるか否かについて現時点で決定することは困難である。

従って、明治期建物の位置する部分については、整備の最終段階において出島全体の保存と活用を総合的に勘案して決定することとする。

#### 8. 展示活用計画

長期計画で復元された建物についてはその規模、構造、用途に応じ、より充実した展示活用を図っていく。

長崎市出島史跡整備審議会委員

25名 (敬称略、順不同)

(学識経験者)	荒木大麓	(元)長崎県土木部長	
	伊藤秀三	長崎大学教養部教授	
	越中哲也	純心女子短期大学教授	
	越中勇	長崎県立美術博物館学芸課長	
	岡林隆敏	長崎大学工学部助教授	
	片野博	九州芸術工科大学芸術工学部助教授	
	嘉村国男	長崎文献社社長	
	下川達弥	(前)長崎県立美術博物館学芸課長 (H.6.11.1~H.7.6.30)	
	中村質	九州大学文学部教授	
	西和夫	神奈川大学工学部教授	
	林一馬	長崎総合科学大学工学部教授	
	○ 姫野順一	長崎大学教養部教授	
(関係団体役員)	今井丈照	日本旅行業協会長崎地区会長	
	片岡瑠美子	長崎純心大学教授	
	上出恵子	活水女子短期大学教授	
	坂本卓也	長崎青年会議所理事長	
	妻野海郎	NHK長崎放送局長	
	朝長昭生	長崎新聞社編集局長	
	中川安明	江戸町自治会長	
	野口源一郎	出島町自治会長	
	◎ 平井謙介	長崎商工会議所副会頭	
	山口美智子	アマランス 研究グループ代表幹事	
(市議会議員)	下条ふみまさ	長崎市議会副議長	
	井原東洋一	教育厚生委員会委員長	
	重橋照久	(前)長崎市議会副議長 (H.6.11.1~H.7.6.30)	
	吉原孝	(前)教育厚生委員会委員長 (H.6.11.1~H.7.6.30)	
(市職員)	中山由紀子	長崎市立鳴見台小学校教諭	
	原田博二	長崎市立博物館長	
	宮田育子	(前)長崎市立三原小学校教諭 (H.6.11.1~H.7.6.30)	

◎印は会長 ○印は会長職務代理者

小委員会委員

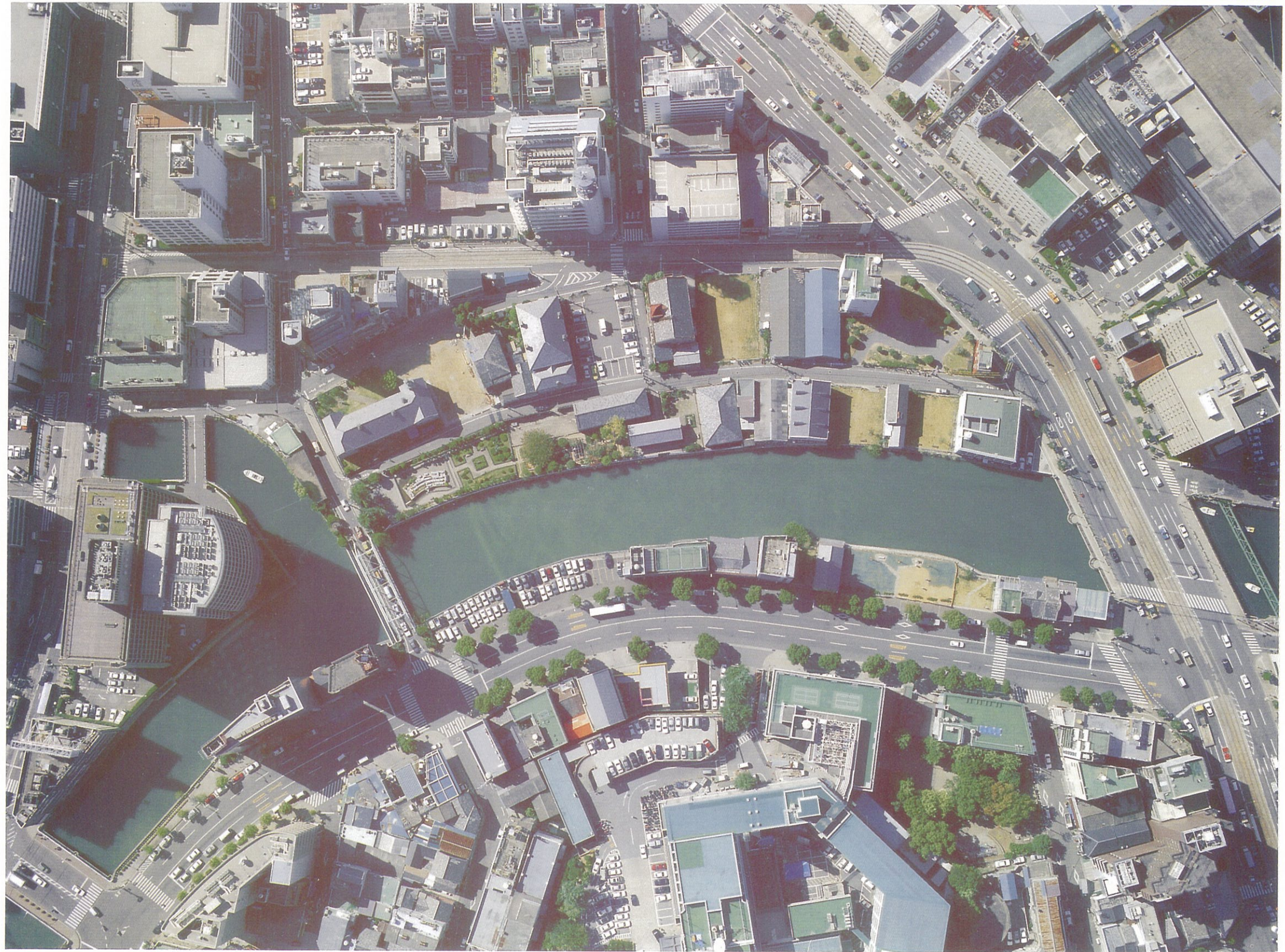
9名 (敬称略、順不同)

荒木大麓	都市計画
岡林隆敏	土木工学
片野博	環境設計
下川達弥	考古資料
中村質	近世史
西和夫	近世建築
林一馬	建造物
原田博二	歴史資料
○ 姫野順一	経済学史

○印は委員長

出島の現況（航空写真）

（平成8年2月撮影）

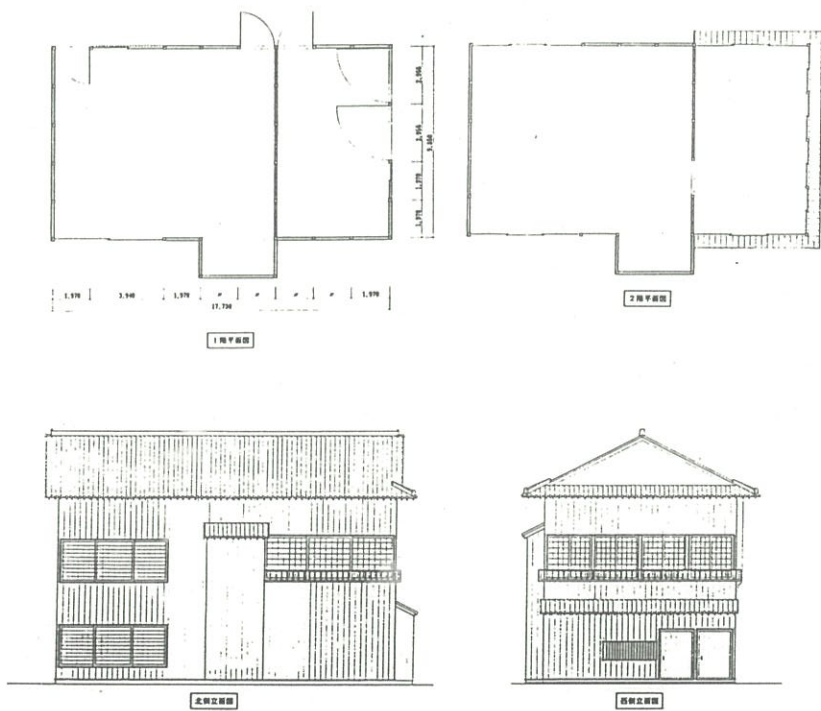


短中期計画 ステップ1・・・11棟

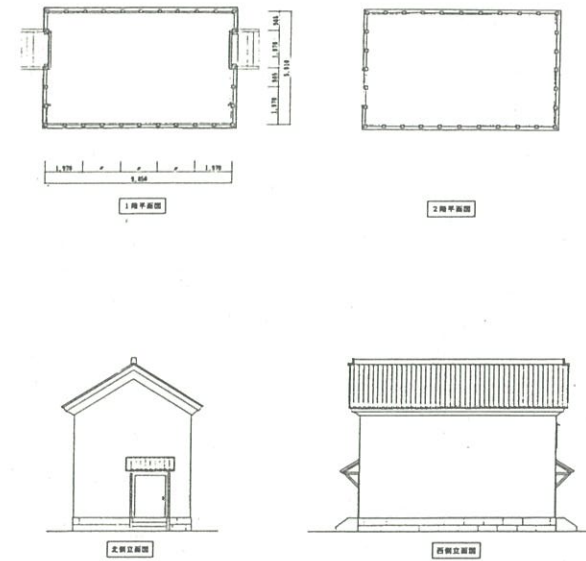
番号 7 [15人番所]



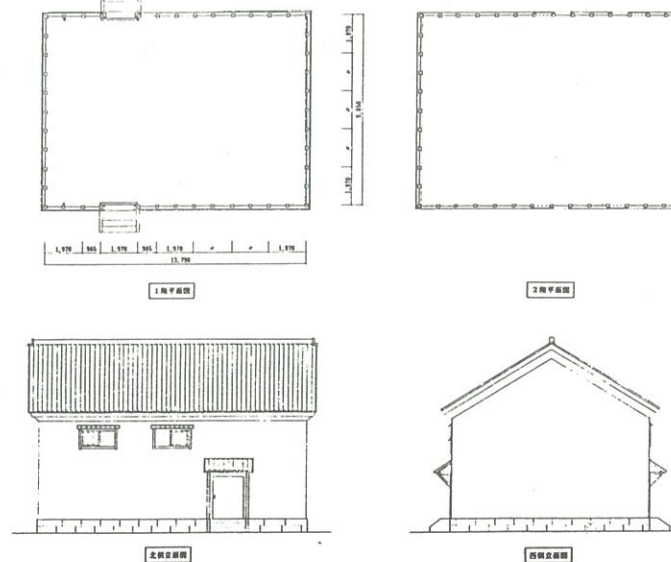
番号 8 [一番船船頭部屋・筆者部屋]



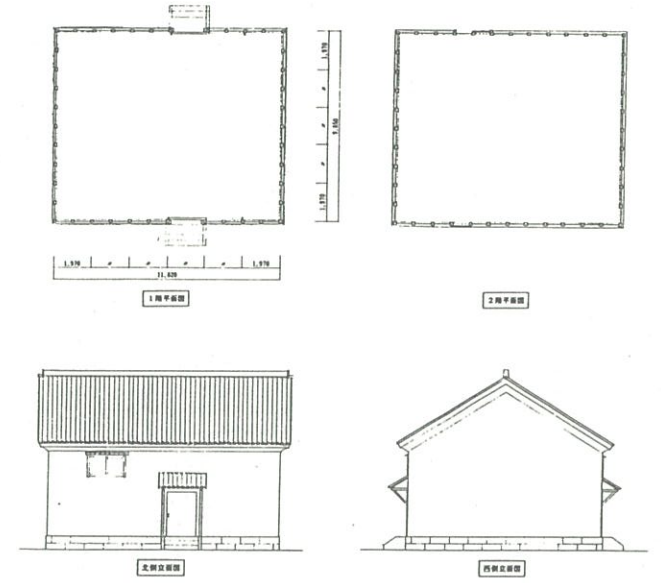
番号 9 [1番蔵]



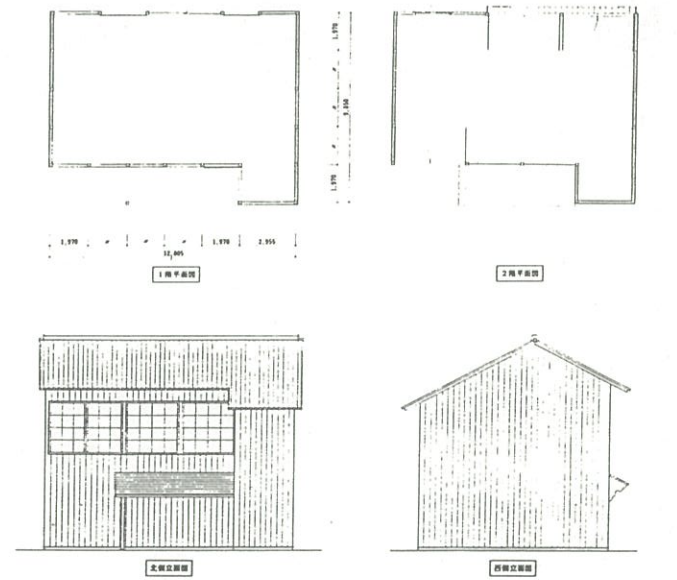
[2番蔵]



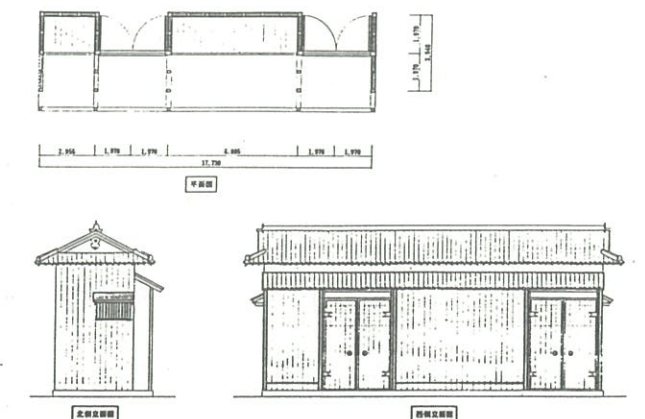
番号11 [3番蔵]



番号12 [筆者頭部屋]

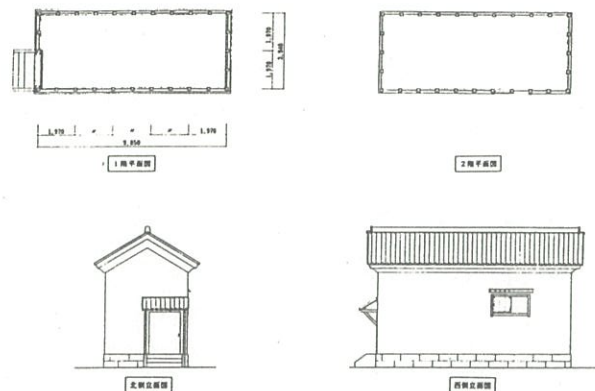


番号24 [水門]

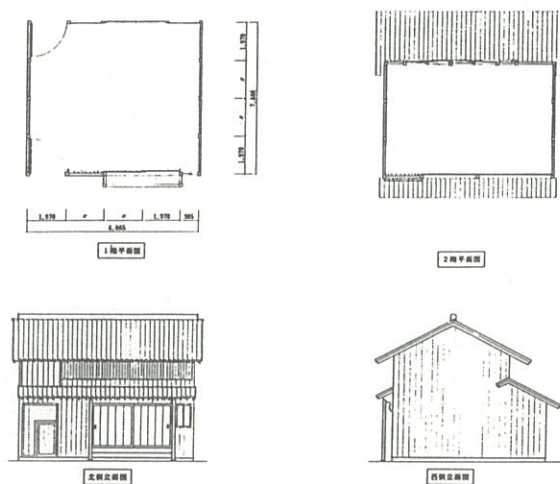




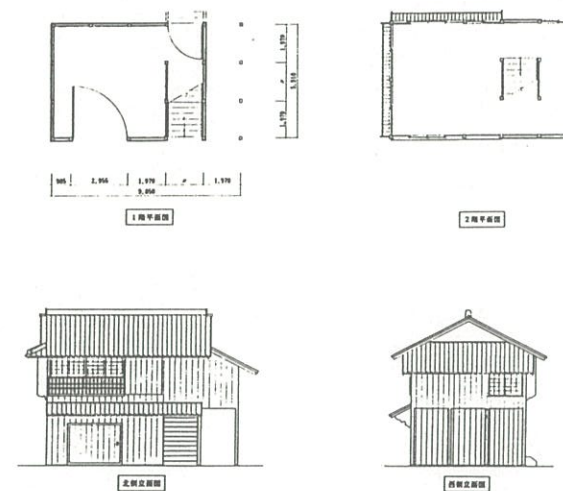
番号32 [16番蔵]



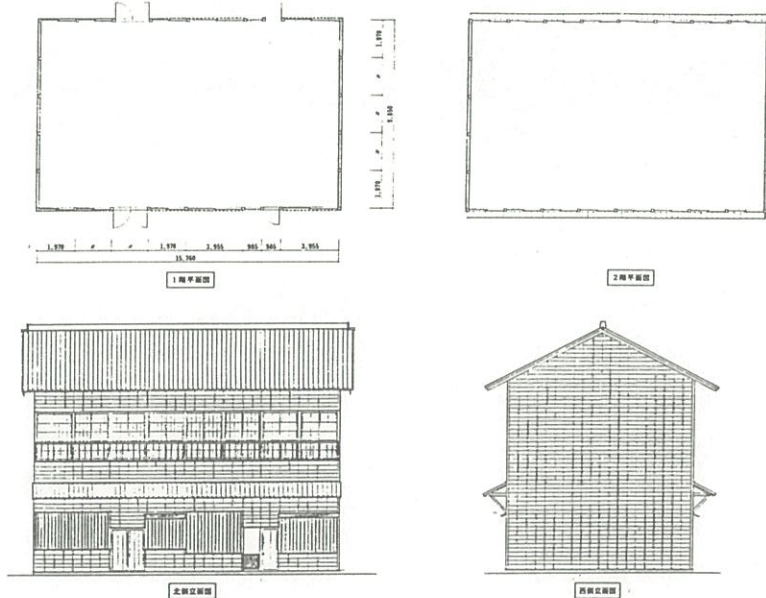
番号35 [乙名詰所]



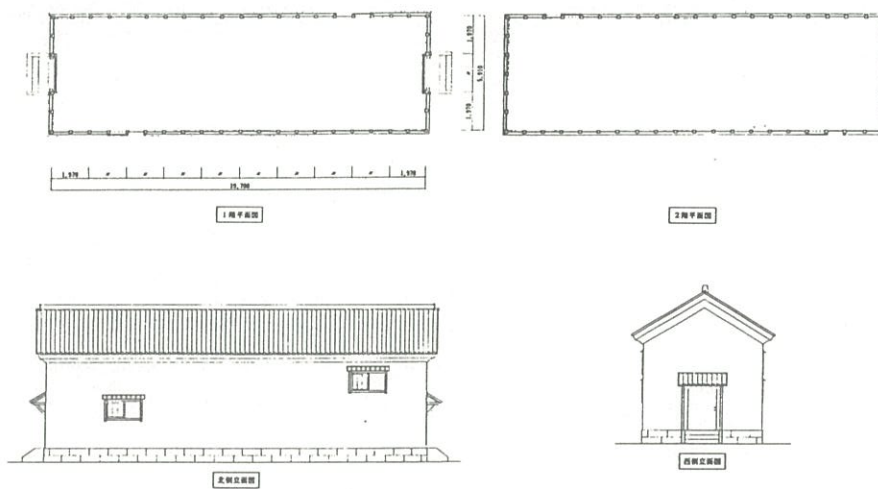
番号38 [出島町人部屋]



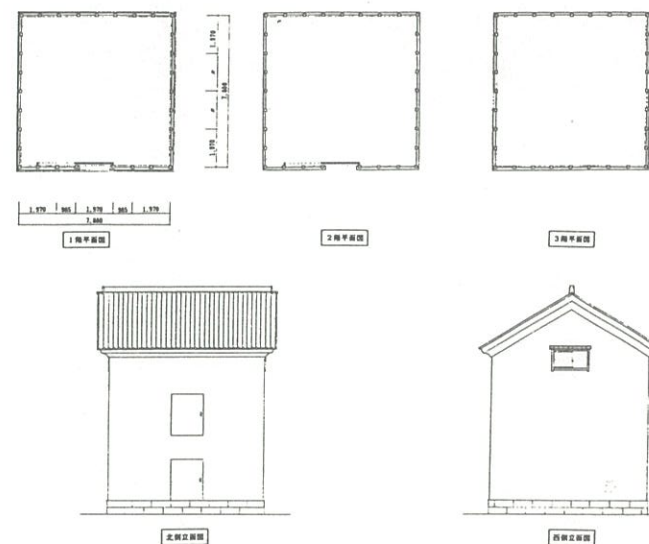
番号33 [筆者部屋・筆者部屋]



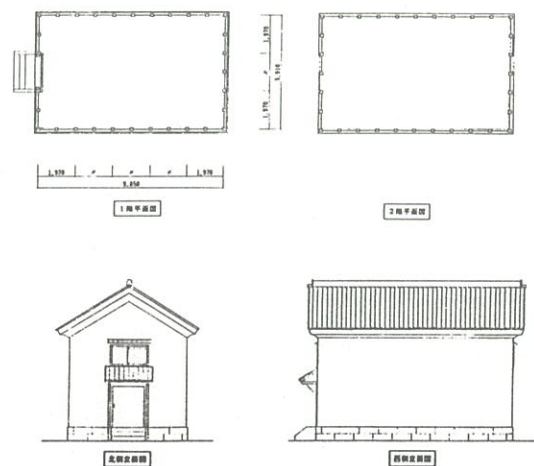
番号36 [15番蔵]



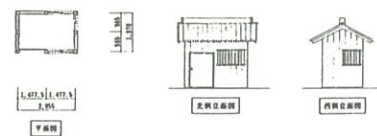
番号39 [9番蔵]



番号34 [14番蔵]



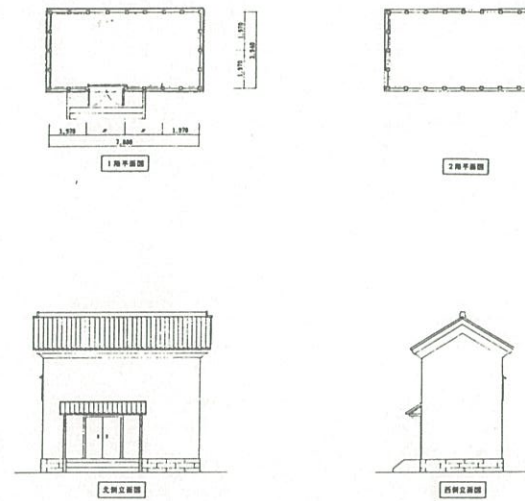
[番所] 建物復元番号37



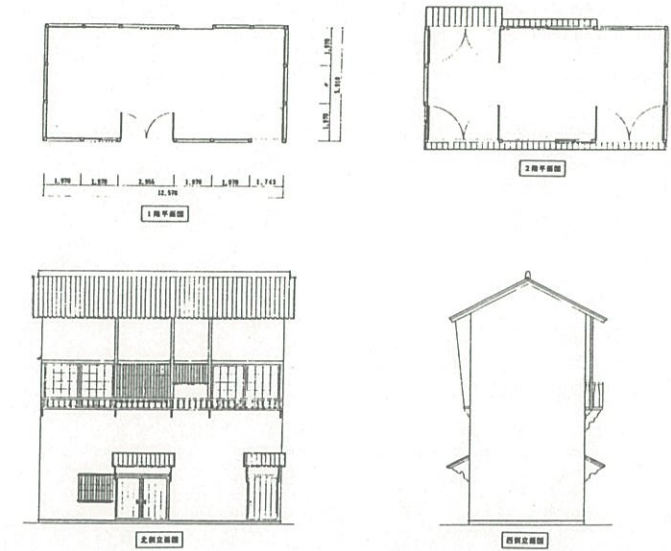
番号40 [組頭部屋]



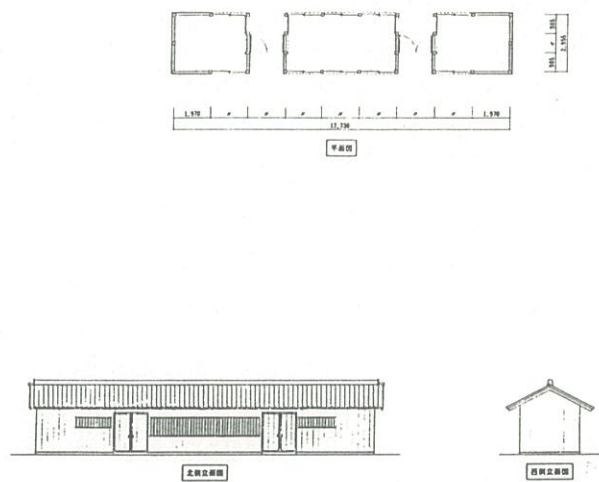
番号20 [御朱印書物蔵]



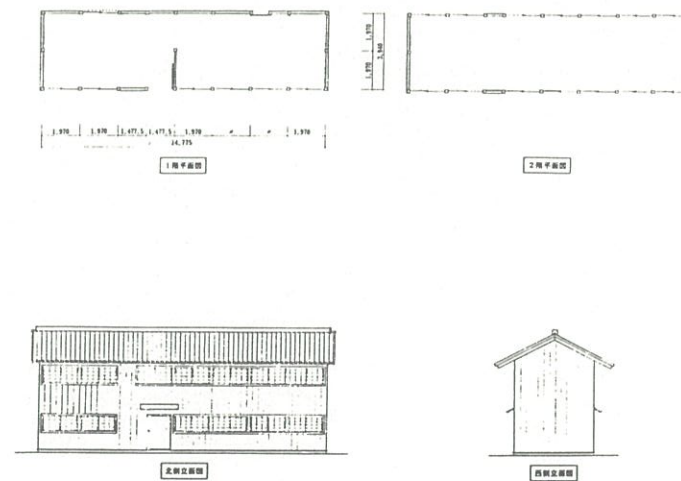
番号46 [カピタン別荘]



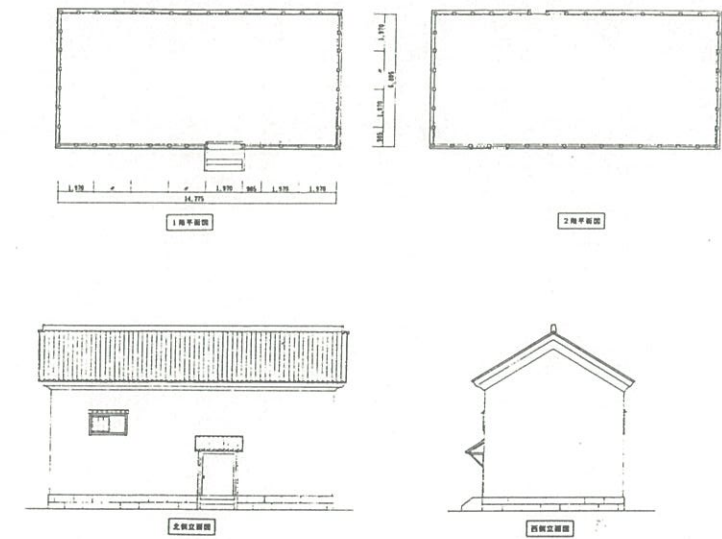
番号19 [食堂付賄所]



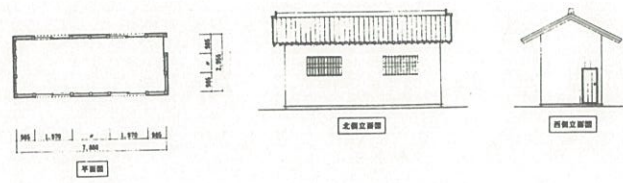
番号21 [病室]



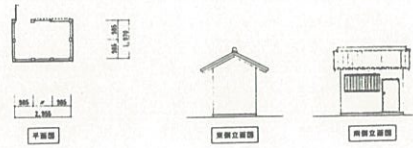
番号47 [7番蔵]



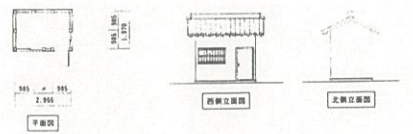
番号 2 [番所]



番号 4 [15人番所]



番号 17 [15人番所]



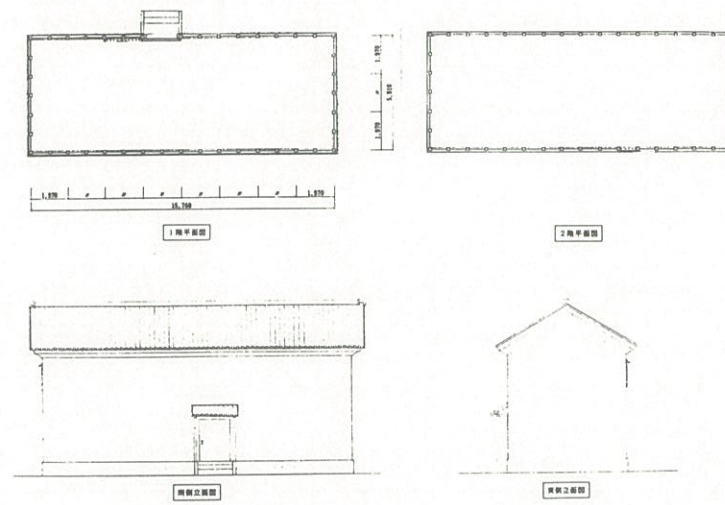
番号 26 [番所]



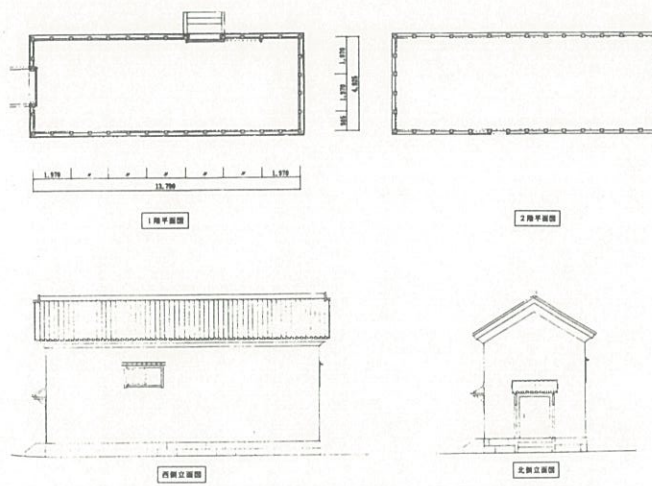
番号 44 [15人番所]



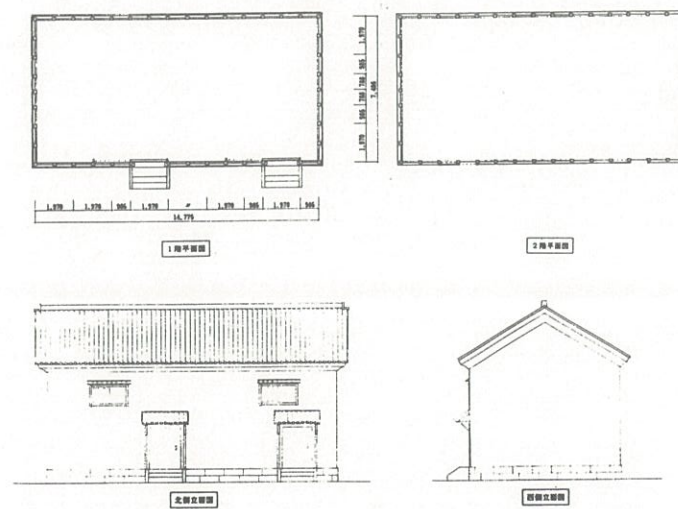
番号 3 [4番蔵]



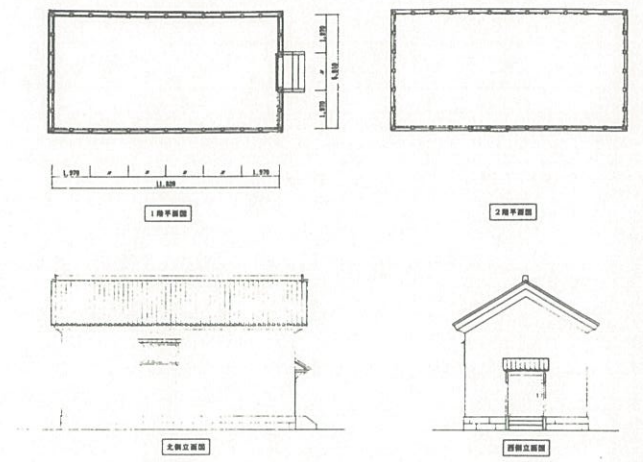
番号 15 [5番蔵]



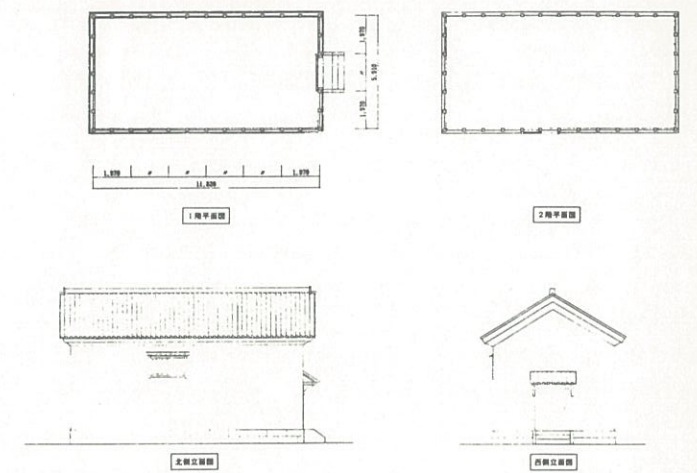
番号 41 [8番蔵]



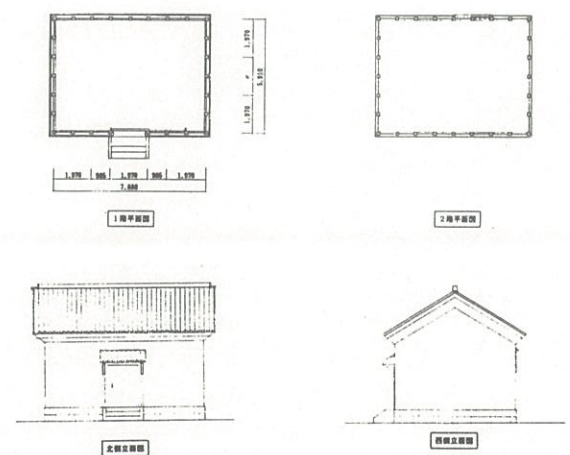
番号 43 [10番蔵]



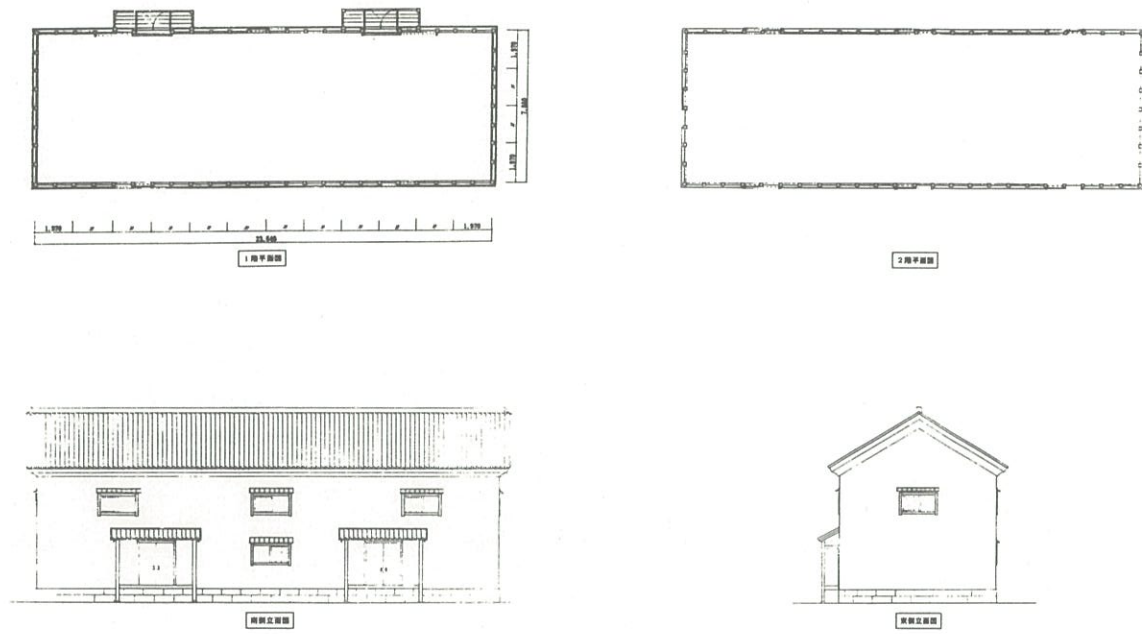
番号 42 [11番蔵]



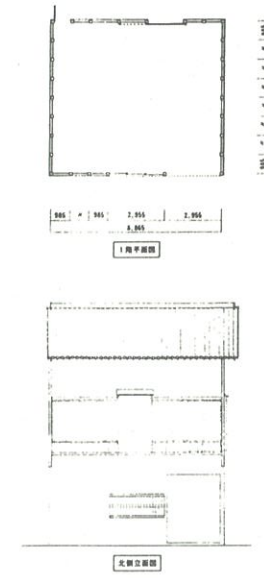
番号 45 [17番蔵]



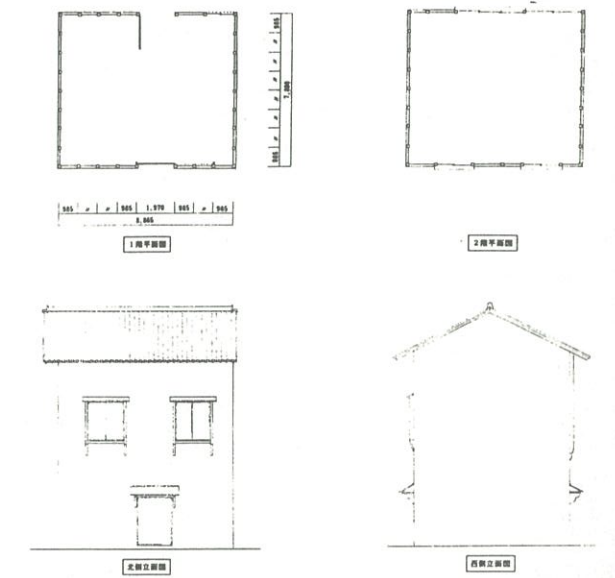
番号 5 [本方呂之反物蔵]



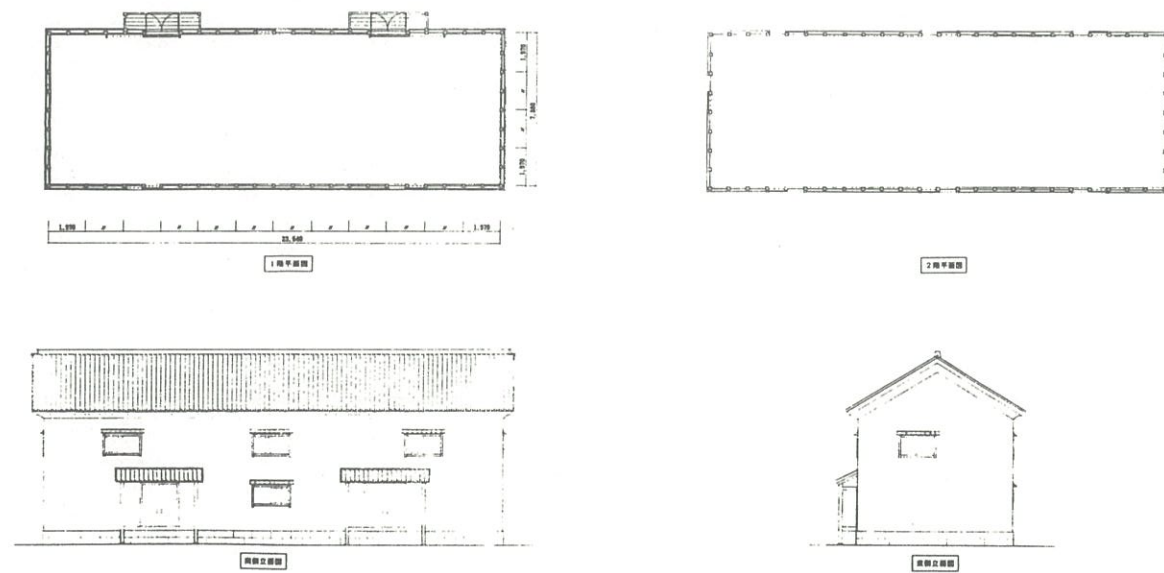
番号13 [医師部屋]



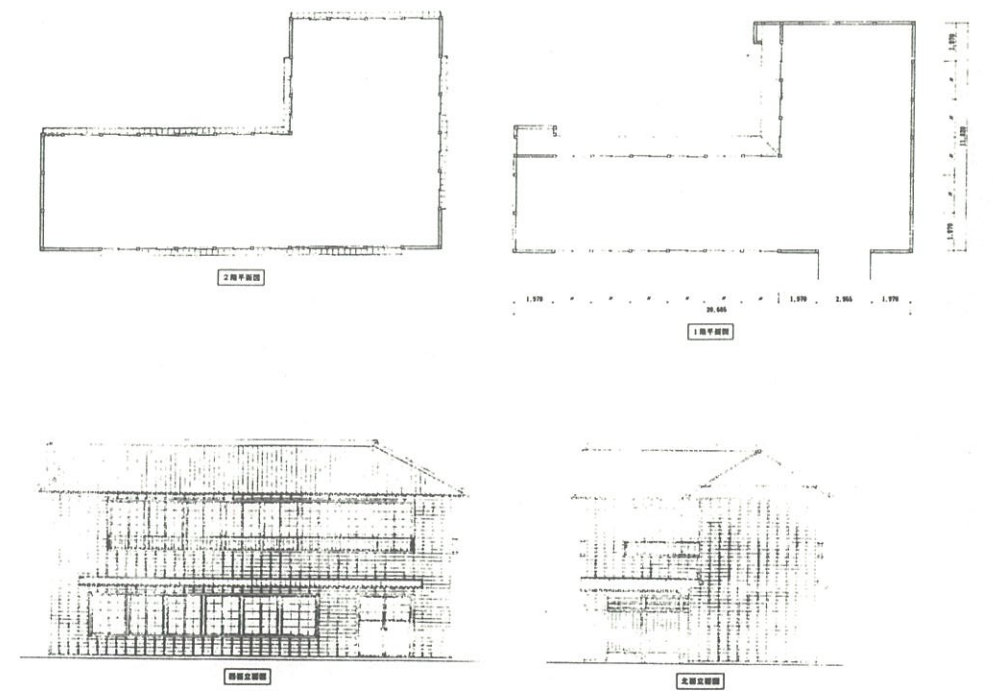
番号14 [役人蘭人部屋]



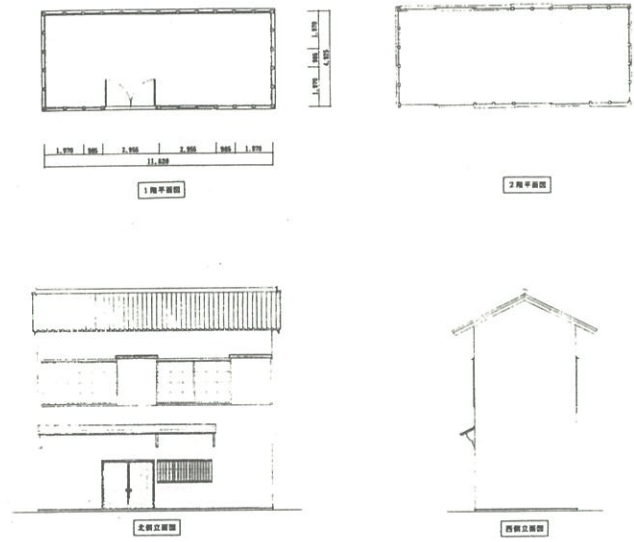
番号 6 [協荷イ之蔵]



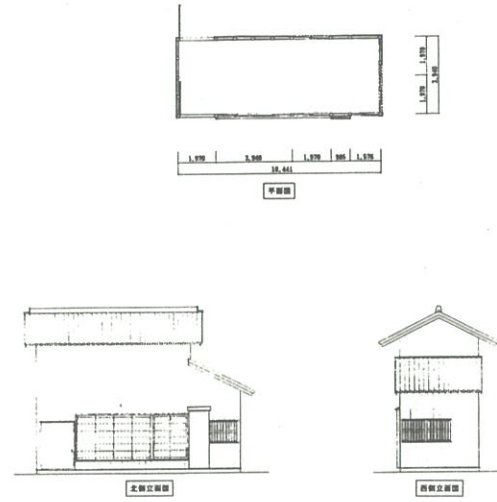
番号18 [花園玉突場]



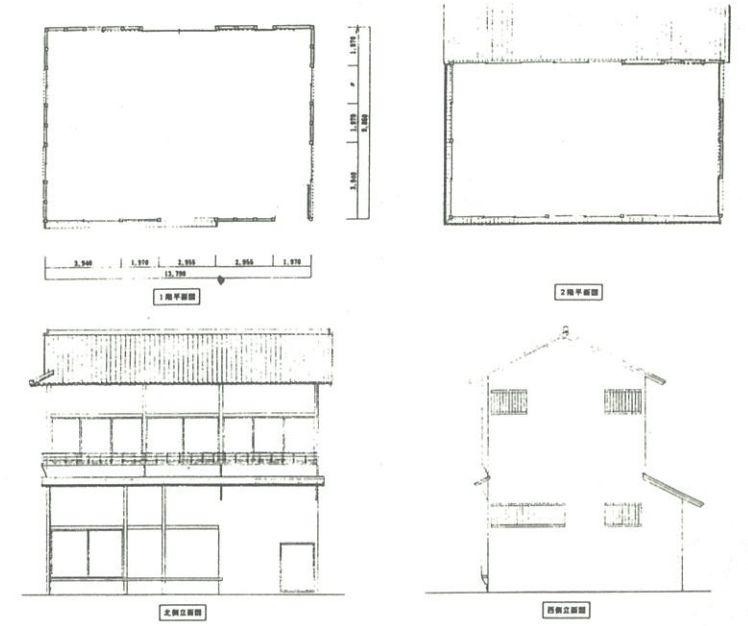
番号22 [画工部屋]



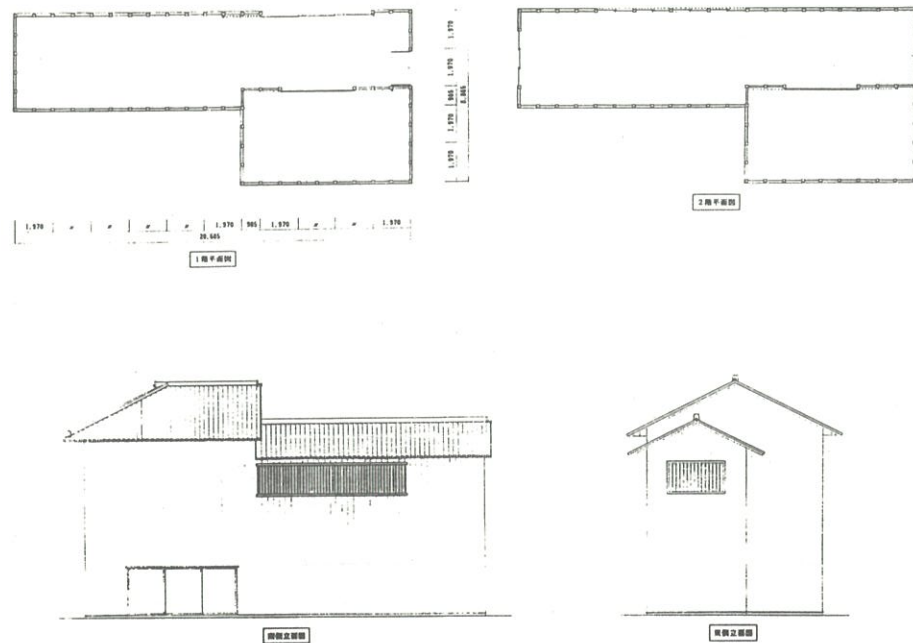
番号25 [検使部屋]



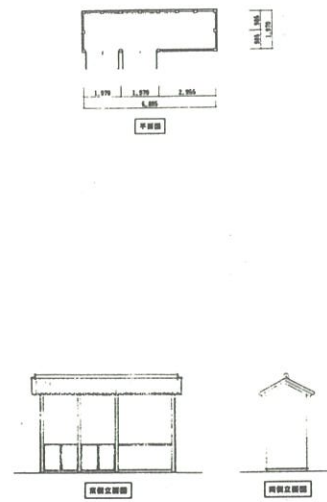
番号27 [通詞部屋]



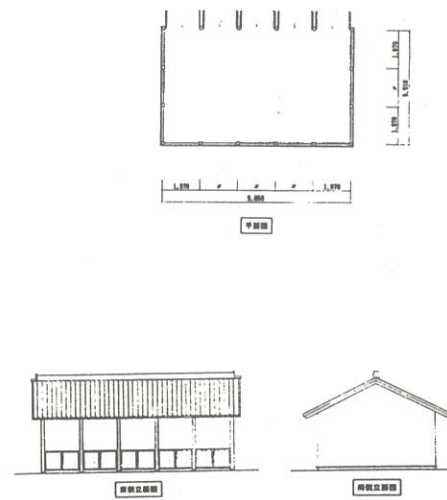
番号23 [二番船船頭部屋・下役蘭人部屋]



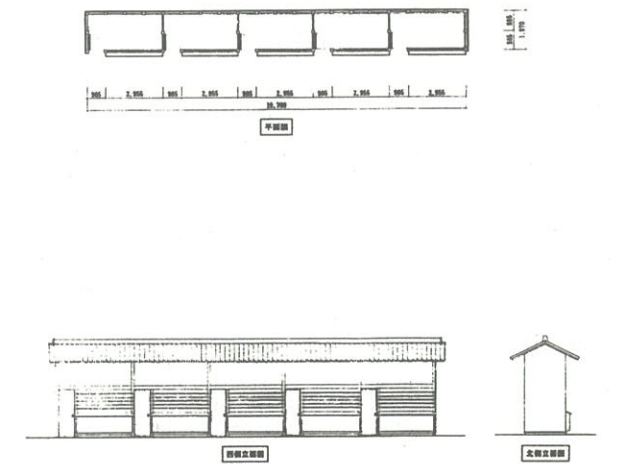
番号16 [火消道具小屋]



番号48 [牛小屋]



番号49 [豚小屋]



復元建物との現況重ね図



■ 短中期復元建物		■ 長期復元建物		■ 既存建物に位置する復元建物		■ 既存建物(明治以降)	
番号	建物名称	番号	建物名称	番号	建物名称	記号	建物名称
7	15人番所	1	表門	13	医師部屋	B	新石倉
8	A:一番船船頭部屋 B:兼番部屋	2	番所	14	役人個人部屋	A	表門
9	1番蔵	3	4番蔵	15	5番蔵(砂蔵)	C	旧石倉
10	2番蔵	4	15人番所	22	園工部屋	D	旧内外クラブ
11	3番蔵	5	本方呂之反物蔵	23	A:二番船船頭部屋 B:下役個人部屋	E	旧出島神学校
12	兼番頭部屋	6	協同イ之蔵	41	8番蔵(砂蔵)		
19	食堂付膳所	16	火药道具小屋	42	11番蔵(大工小屋)		
20	御米印書物蔵	17	15人番所	43	10番蔵(普請小屋)		
21	病室	18	花籠玉突場	45	17番蔵 (掛網遊青蔵)		
24	水門	25	換便部屋	48	牛小屋		
28	料理部屋	26	番所	49	豚小屋		
29	ヘル部屋	27	通廊部屋				
30	カピタン部屋	44	15人番所				
31	乙名部屋						
32	16番蔵						
33	A:兼番部屋 B:兼番部屋						
34	14番蔵						
35	乙名膳所						
36	15番蔵						
37	番所						
38	出島町人部屋						
39	9番蔵						
40	組頭部屋						
46	カピタン別荘						
47	7番蔵(砂蔵)						

— 短中期復元範囲  
— 長期復元範囲

## 出島和蘭商館跡の発掘調査概要

1. 昭和44年に市道出島町江戸町1号線と市道出島町籠町1号線の交差する位置で、出島中継ポンプ場の污水管工事中に出島東南角の石垣が検出。長崎大学医学部助手（当時）の坂田邦洋氏らによる調査を実施。大小7段程度の野面自然石による南側石垣を確認。陶磁器や瓦、パイプやガラス瓶などが出土。
2. 昭和46年に市道出島町2号線と電車通りに面する旧東京海上火災保険株式会社の建設工事により、出島南側中央西寄りの石垣と裏込石が検出。長崎県教育庁文化課による調査を実施。工事区域の南側20mにわたる裏込栗石を確認。瓦やパイプなどが出土。
3. 昭和57年に答申された「史跡出島和蘭商館跡復元整備構想」第1項目の提案に基づき、昭和59年度から2か年にわたり遺跡の地形測量と範囲確認調査を実施。昭和59年の第1次調査では出島の東・南・西側境界推定線上に4か所（Ⅰ～Ⅳ区）、昭和60～61年の第2次調査では7か所（Ⅴ～Ⅺ）に調査区を設定。各区より石垣や旧生活面などが検出。陶磁器や瓦、パイプやガラス瓶などが出土。本調査により旧出島の境界線が判明。
4. 昭和61年にNTTおよび西部ガスによる埋設管工事により、出島西側の調査を実施。上記調査と並行しながらの立会調査。石垣が検出され、陶磁器やパイプなどが出土。
5. 昭和61年に出島史跡内に所在する朝永病院の増改築に伴う発掘調査を実施。調査区の南側では護岸石垣裏込めが、北側では建物礎石が検出。陶磁器やパイプ、ガラス瓶や動物遺体が出土。
6. 平成元年に出島史跡整備事業の一つである出島表門建設に伴い、発掘調査を実施。石列や礎石、旧道路面などを確認。陶磁器や瓦、パイプやガラス瓶、動物遺体などが出土。

出島和蘭商館跡の発掘調査一覧表

	発掘期間	調査原因	遺構	出土遺物	数量 (パルコンテナ)	調査機関	調査報告書
1	昭和44年	污水管工事	石垣	陶磁器、パイプ、ガラス瓶、瓦、煉瓦など	1箱	長崎大学医学部	概報
2	昭和46年	東京海上建設	石垣	陶磁器、パイプ、ガラス瓶、瓦、煉瓦など	1箱	長崎県教育庁	概報
3	昭和59～61年	出島範囲確認	石垣	陶磁器、パイプ、ガラス瓶、瓦、煉瓦、金属製品、木製品、石製品、動物遺体など	150箱	長崎市教育委員会	昭和61年刊行
4	昭和61年	NTT・ガス工事	石垣	陶磁器、パイプ、ガラス瓶、瓦、動物遺体など	3箱	長崎市教育委員会	同上収録
5	昭和61年	朝永病院改築	礎石	陶磁器、パイプ、ガラス瓶、動物遺体など	100箱	長崎市教育委員会	概報
6	平成元年	出島表門復元	石列	陶磁器、パイプ、ガラス瓶、瓦、煉瓦、金属製品、動物遺体、コールドールなど	11箱	長崎市教育委員会	概報



出島関連年表

西暦	年号	出島関連	西暦	国内・世界	西暦	年号	出島関連	西暦	国内・世界		
室町時代	1543	天文12	43	ポルトガル人、種子島に漂着、鉄砲伝来 フランシスコ・ザビエル、鹿児島に上陸、 キリスト教を伝える	江戸時代	1637	寛永14	39	ポルトガル船の来航禁止（鎖国令Ⅴ）		
	1549	18				1639	16				
	1550	19				1641	18				
	1562	永禄5				1643	20				
	1565	8				1644	21				
	1567	10				1649	慶安2				
	1570	元亀元				1650	3				
	1571	2				1661	寛文元				
1573	天正元	73	室町幕府滅亡	1662	2	61	清朝中国統一				
安土・桃山時代	1580	天正8	80	スペイン、ポルトガルを併合 オランダ独立宣言 本能寺の変、信長死去 豊臣秀吉、関白となる 秀吉、伴天連追放令を發布	江戸時代	1678	延宝元	15	正徳新令を施行		
	1581	9				1678	6				
	1582	10				1689	元禄2				
	1585	13				1690	3				
	1587	15				1696	9				
	1588	16				1698	11				
	1590	18				1699	12				
	1592	文禄元				92	朱印船貿易（1592～1635）			1707	宝永4
	1597	慶長2				98	秀吉死去			1715	正徳5
	1598	3				00	関ヶ原の戦い			1716	享保元
	1600	5				00	オランダ船リーフデ号、豊後に漂着、 イギリス東インド会社設立			1720	5
	1602	7				02	オランダ東インド会社設立			1739	元文4
江戸時代	1603	慶長8	03	徳川家康、江戸に幕府を開く オランダ、スペインより独立 全国に禁教令を発令 大坂冬の陣 大坂夏の陣（豊臣の滅亡） 家康死去 奉書船以外の海外渡航禁止（鎖国令Ⅰ） 日本人の海外渡航禁止（鎖国令Ⅱ） 日本人の海外渡航、海外在住日本人の帰国 全面禁止、大型船建造禁止（鎖国令Ⅲ） ポルトガル人を出島に収容、 混血子・母、国外追放（鎖国令Ⅳ）	江戸時代	1775	安永3	20	寛永の禁書政策の弛禁令（吉宗）		
	1604	9				09	1774			安永3	
	1609	14				13	1775			4	
	1612	17				14	1776			5	
	1613	18				15	1789			寛政元	
	1614	19				16	1790			2	
	1615	元和1				33	1798			10	
	1616	2				33	1799			11	
	1623	9				35	1801			13	
	1626	寛永3				36	1804			文化元	
	1633	10				33	1808			5	
	1634	11				35	1809			6	
	1635	12				35	1810			7	
	1636	13				36	1814			11	
							1816			13	
							1817			14	
			1823	文政6							
			1824	7							
			1825	8							
			1828	11							
			1840	天保11							
			1841	12							
					74	『解体新書』出版					
					76	アメリカ独立宣言					
					89	フランス革命（89～99）					
					91	林子平「海国兵談」刊 翌年絶版					
					92	ロシア使節通商要求					
					99	オランダ東インド会社解散、国営となる					
					01	伊能忠敬、全国の測量					
					08	間宮林蔵、樺太探検、間宮海峡発見					
					10	フランス、オランダを併合					
					14	オランダ独立を回復					
					16	杉田玄白『蘭学事始』					
					25	異国船打払令					
					40	アヘン戦争（～1842）					
					41	天保の改革（41～43）					
					41	高島秋帆、江戸にて砲術公開					

西 暦	年 号	出 島 関 連	西 暦	国 内 ・ 世 界	
江戸時代	1850	嘉永 3	最後の江戸参府	43	オランダ国王、開国勸告
	1853	6	ロシア使節プチャーチン、長崎に来航	53	ペリー浦賀に来航
	1854	安政元	日米和親条約を長崎で調印 (長崎、函館を開港)		
	1855	2	日蘭和親条約を長崎で調印 海軍伝習所を開設		
	1857	4	ボンペ、医学伝習共感として来日		
	1858	5	出島の和蘭商館廃止、領事館開設	58	日米修好通商条約を調印
		5	安政の出島大火		
	1859	6	シーボルト再来日、グラバー来日		
	1860	万延元	外国人居留地完成	60	桜田門外の変
	1861	文久元	出島一部水門脇及び西側埋築	60	アメリカ南北戦争(60~65)
	1864	元治元	出島一部西側埋築		
	1866	慶応 2	出島を外国人居留地に編入		
	1867	3	出島の南側を遊歩場として埋築	67	大政奉還
明治時代	1869	明治 2	出島町・築町間に出島新橋架橋		
	1877	10	第1期港湾改良工事(明治10~26) (明治18年中島川交流工事起工、 明治21年出島北側削除)	77	西南の役
		10	旧出島神学校建設		
	1894	27		94	日清戦争(94~95)
	1900	33	第2期港湾改良工事(明治33~37) (港内浚渫工事に伴う埋立工事により、明治 37年には出島南側の海面は姿を消す)		
1903	36	旧内外倶楽部建設			
1910	43	出島橋移設(新川口橋明治23年架橋)	04	日露戦争(04~05)	
大正時代	1920	大正 9	出島沿岸修築工事着手		
	1922	11	出島和蘭商館跡を内務省告示で、史跡名勝 天然記念物保存法にもとづき、国の史跡指 定		
昭和時代	1939	昭和 4		39	第2次世界大戦(39~45)
	1941	16		41	太平洋戦争(41~45)
	1952	27	史跡出島和蘭商館跡第1次整備計画 (昭和27~32) (用地買収、旧石倉復元、練堀築造)		
1973	48	史跡出島和蘭商館跡第2次整備計画 (昭和48~51) (用地買収、ミニ出島設置、新石倉復元、 内外倶楽部改修、池など庭園整備)			

西 暦	年 号	出 島 関 連	国 内 ・ 世 界	
昭和時代	1977	昭和52	史跡出島和蘭商館跡第3次整備計画 (昭和52~55) (出島神学校解体復元3ヶ年事業、 用地買収、石堀増設、庭園工事)	
	1978	53	出島史跡整備審議会を設置 第1委員会(中央財界)8名 第2委員会(蘭学研究者)6名 第3委員会(地元)15名 計29名	
	1982	57	史跡出島和蘭商館跡復元整備構想の答申	
平成時代	1989	平成元	市政100周年事業の一環として、出島表門 の復元	
	1993	5	出島史跡整備研究会が整備計画の基本案を 策定 教育委員会に出島復元整備室を設置 史跡区域を教育文化施設として都市計画決定	
	1994	6	都市計画事業認可	
	1996	8	出島史跡整備審議会(第2次)を設置 25名 史跡「出島和蘭商館跡」復元整備計画答申	